

# 京都府遺跡調査概報

## 第 87 冊

1. 橋爪遺跡第 5 次
2. 奈具岡遺跡第 9 次
3. 川向古墳群
4. 大島遺跡第 3 次
5. 興戸宮ノ前遺跡第 3 次

1 9 9 9

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 川向古墳群



川向古墳群全景（手前から4・3・2号墳、北から）



## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があると、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成10年度に実施した発掘調査のうち、京都府教育委員会・京都府土木建築部・建設省近畿地方建設局の依頼を受けて行った橋爪遺跡・奈良岡遺跡・川向古墳群・大島遺跡・興戸宮ノ前遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、久美浜町教育委員会・府立久美浜高等学校・弥栄町教育委員会・京都府峰山土木事務所・舞鶴市教育委員会・京都府舞鶴土木事務所・木津町教育委員会・建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所・相楽霊園管理委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
  1. 橋爪遺跡第5次
  2. 奈具岡遺跡第9次
  3. 川向古墳群
  4. 大島遺跡第3次
  5. 興戸宮ノ前遺跡第3次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 橋爪遺跡第5次	熊野郡久美浜町橋爪65番地	平10.5.12～7.3	京都府教育委員会	村田 和弘
2. 奈具岡遺跡第9次	竹野郡弥栄町溝谷	平10.8.18～11.13	京都府土木建築部	筒井 崇史
3. 川向古墳群	舞鶴市志高川向	平9.12.3～平10.2.26 平10.4.28～7.22	京都府土木建築部	河野 一隆 福島 孝行
4. 大島遺跡第3次	相楽郡木津町相楽岸間堂地内	平10.6.23～10.2	建設省近畿地方建設局京都国道事務所	岩松 保
5. 興戸宮ノ前遺跡第3次	京田辺市興戸宮ノ前	平10.8.25～10.29	京都府土木建築部	藤井 整

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 本文目次

1. 橋爪遺跡第5次発掘調査概要	1
2. 奈具岡遺跡第9次発掘調査概要	15
3. 川向古墳群発掘調査概要	37
4. 大島遺跡第3次発掘調査概要	51
5. 興戸宮ノ前遺跡第3次発掘調査概要	73

# 挿図目次

1. 橋爪遺跡第5次	
第1図 調査地および周辺遺跡分布図	2
第2図 調査トレンチ位置図	3
第3図 調査トレンチ遺構平面図	5
第4図 土層断面実測図	6
第5図 S D131土器溜まり実測図	7
第6図 出土遺物実測図(1)	8
第7図 出土遺物実測図(2)	9
第8図 出土遺物実測図(3)	10
第9図 出土遺物実測図(4)	11
第10図 出土遺物実測図(5)	12
2. 奈具岡遺跡第9次	
第11図 調査地位置図	15
第12図 調査地周辺主要遺跡分布図	16
第13図 奈具・奈具遺跡群調査次数別位置図	18
第14図 調査区内土層柱状図	21
第15図 遺構配置図	22
第16図 竪穴式住居跡 S H005実測図	23
第17図 竪穴式住居跡 S H006・007・089実測図	24
第18図 掘立柱建物跡2実測図	25
第19図 柵列跡1実測図	26
第20図 下層遺構配置図	27

第21図	出土遺物実測図(1)-----	28
第22図	出土遺物実測図(2)-----	29
第23図	出土遺物実測図(3)-----	30
第24図	奈具・奈具遺跡群の変遷-----	31

### 3. 川向古墳群

第25図	調査地および周辺遺跡分布図-----	38
第26図	2～4号墳調査区平面・断面図-----	39
第27図	2号墳主体部実測図-----	40
第28図	3号墳第1主体部実測図-----	41
第29図	3号墳第2主体部実測図-----	42
第30図	4号墳主体部平面・断面図-----	43
第31図	4号墳出土壺棺平面・断面図-----	44
第32図	炭窯2実測図-----	44
第33図	炭窯1実測図-----	44
第34図	2・3号墳出土土器実測図-----	45
第35図	出土弥生土器-----	45
第36図	出土鉄製品実測図-----	45
第37図	4号墳出土壺棺実測図-----	46
第38図	出土熙寧元宝実測図-----	46
第39図	木棺小口部を礫で押さえる埋葬施設の例-----	48
第40図	炭窯1(上)・炭窯2(下)完掘状況-----	50

### 4. 大島遺跡第3次

第41図	調査地位置図-----	51
第42図	調査トレンチ位置図-----	52
第43図	大島遺跡1・2次調査検出遺構配置図-----	53
第44図	調査地南壁土層柱状図-----	54
第45図	検出遺構平面図-----	55
第46図	掘立柱建物跡実測図(1)-----	56
第47図	東部地区検出遺構図-----	58
第48図	竪穴式住居跡4実測図-----	59
第49図	掘立柱建物跡実測図(2)-----	60
第50図	流路11南壁土層図-----	61
第51図	土器棺13・14実測図-----	62
第52図	出土遺物実測図(1)-----	63
第53図	出土遺物実測図(2)-----	64

第54図	出土遺物実測図(3)	-----	65
第55図	出土遺物実測図(4)	-----	66
第56図	出土遺物実測図(5)	-----	66
第57図	出土遺物実測図(6)	-----	67
第58図	大島遺跡居住域配置図	-----	68
<b>5. 興戸宮ノ前遺跡第3次</b>			
第59図	調査地位置図(周辺遺跡分布図)	-----	73
第60図	調査地位置図	-----	74
第61図	調査地遺構平面図	-----	75
第62図	調査区土層断面図	-----	76
第63図	井戸 S E 69平面図	-----	77
第64図	井戸 S E 69立面図	-----	77
第65図	S X 66・S X 68出土状況図(上段:蓋撤去前 下段:蓋撤去後)	-----	79
第66図	S K 32曲物底板出土状況図	-----	80
第67図	S D 05棧出土状況図	-----	80
第68図	出土土器実測図 1	-----	82
第69図	出土土器実測図 2	-----	83
第70図	出土木製品実測図	-----	85

## 付 表 目 次

<b>1. 橋爪遺跡第5次</b>			
付表 1	橋爪遺跡出土遺物観察表	-----	13
<b>2. 奈具岡遺跡第9次</b>			
付表 2	奈具・奈具岡遺跡群調査一覧表	-----	34
付表 3	奈具岡遺跡出土遺物観察表	-----	35
<b>4. 大島遺跡第3次</b>			
付表 4	大島遺跡出土土器観察表	-----	69
付表 5	大島遺跡出土石製品観察表	-----	72



# 図 版 目 次

## 1. 橋爪遺跡第5次

- |       |   |                       |
|-------|---|-----------------------|
| 図版第1  | (1) 調査地遠景(北から)<br>(3) 調査地遠景(西から)                | (2) 調査地遠景(下が北)        |
| 図版第2  | (1) 調査前風景(北東から)<br>(3) 重機掘削風景(北西から)             | (2) 調査前風景(西から)        |
| 図版第3  | (1) 発掘作業風景(西から)<br>(3) 東部遺構検出状況(南から)            | (2) 遺構検出状況(西から)       |
| 図版第4  | (1) 北西部遺構検出状況(南東から)<br>(3) 調査区北壁断面(南から)         | (2) 北西部遺構検出状況(南から)    |
| 図版第5  | (1) 調査区全景(東から)<br>(3) 東部完掘状況(南から)               | (2) 東部完掘状況(東から)       |
| 図版第6  | (1) 調査区全景(西から)<br>(3) 南西部完掘状況(東から)              | (2) 北西部完掘状況(南から)      |
| 図版第7  | (1) 調査区北壁断面(南東から)<br>(3) 遺物出土状況(北東から)           | (2) 調査区南東壁断面(西から)     |
| 図版第8  | (1) S D131検出状況(南から)<br>(3) S D131遺物出土状況(西から)    | (2) S D131遺物出土状況(北から) |
| 図版第9  | (1) S D131遺物出土状況(南から)<br>(3) S D131遺物出土状況(西から)  | (2) S D131遺物出土状況(東から) |
| 図版第10 | (1) S K058完掘状況(東から)<br>(3) S K058遺物取り上げ風景(北東から) | (2) S K058遺物出土状況(東から) |
| 図版第11 | (1) 調査地遠景(下が南)<br>(3) 説明会風景(北から)                | (2) 説明会風景(北東から)       |
| 図版第12 | 出土遺物(1)   |                       |
| 図版第13 | 出土遺物(2)   |                       |
| 図版第14 | 出土遺物(3)   |                       |
| 図版第15 | 出土遺物(4)   |                       |
| 図版第16 | 出土遺物(5)   |                       |

## 2. 奈具岡遺跡第9次

- |       |                |                      |
|-------|----------------|----------------------|
| 図版第17 | (1) 調査地遠景(南から) | (2) 調査地遠景(東から)       |
| 図版第18 | (1) 調査地近景(西から) | (2) 調査地全景(真上から、上が北東) |

- 図版第19 (1) 竪穴式住居跡 S H005 全景(遺物出土状況、南西から)  
 (2) 竪穴式住居跡 S H005 全景(完掘後、南西から)
- 図版第20 (1) 竪穴式住居跡 S H005 東コーナー付近遺物出土状況(南東から)  
 (2) 竪穴式住居跡 S H005 北東壁中央部付近遺物出土状況(南西から)  
 (3) 竪穴式住居跡 S H005 支柱穴 1 土層断面(北西から)
- 図版第21 (1) 竪穴式住居跡 S H006 全景(南東から)  
 (2) 竪穴式住居跡 S H007 全景(南西から)  
 (3) 竪穴式住居跡 S H089 全景(南西から)
- 図版第22 (1) 掘立柱建物跡 1 全景(南東から)  
 (2) 掘立柱建物跡 2 全景(南東から)  
 (3) 作業風景(南西から)
- 図版第23 (1) 調査地南端(P 5 地点)土層断面(北東から)  
 (2) 落とし穴状遺構 S X405 全景(南東から)  
 (3) 関係者説明会風景(北東から)

図版第24 出土遺物

3. 川向古墳群

- 図版第25 (1) 川向古墳群近景(東から) (2) 川向古墳群から見た周辺の景観(南から)
- 図版第26 (1) 2号墳主体部検出状況(南から) (2) 2号墳主体部完掘状況(南から)  
 (3) 3号墳第1主体部裏込め土断ち割り状況(北から)  
 (4) 3号墳第1主体部礫検出状況(北から)
- 図版第27 (1) 3号墳第1主体部完掘状況(北から)  
 (2) 3号墳第2主体部裏込め土断ち割り状況(西から)  
 (3) 3号墳第2主体部礫検出状況(西から)  
 (4) 3号墳第2主体部完掘状況(西から)
- 図版第28 (1) 2号墳弥生土器出土状況(西から)  
 (2) 3号墳第1主体部鉄器出土状況(東から)  
 (3) 3号墳第2主体部鉄器出土状況(北から)
- 図版第29 (1) 4号墳木棺検出状況(南から) (2) 4号墳木棺内あぜ設定状況(北から)  
 (3) 4号墳木棺内完掘状況(北から) (4) 4号墳主体部完掘状況(北から)
- 図版第30 (1) 4号墳壺棺検出状況(東から) (2) 4号墳壺棺検出状況(東から)  
 (3) 4号墳壺棺出土状況(東から) (4) 4号墳壺棺完掘状況(西から)

図版第31 出土遺物(1)

図版第32 出土遺物(2)

4. 大畠遺跡第3次

- 図版第33 (1) 調査地全景(北東から) (2) 調査地全景(南西から)

- (3) 調査地全景(北西から)
- 図版第34 (1) 掘立柱建物跡 1 検出状況(南東から)  
(2) 掘立柱建物跡 2・3 検出状況(南南西から)  
(3) 掘立柱建物跡 5 検出状況(西から)
- 図版第35 (1) 掘立柱建物跡 6・7 検出状況(西北西から)  
(2) 東部地区掘立柱建物跡群検出状況(南南西から)  
(3) 竪穴式住居跡 4 検出状況(南西から)
- 図版第36 (1) 流路跡11検出状況(東から) (2) 流路跡11検出状況(北東から)  
(3) 流路跡11内流木検出状況(西南西から)
- 図版第37 (1) 流路跡12全景(北東から) (2) 流路跡12くびれ部(西から)  
(3) 流路跡12くびれ部(北北西から)
- 図版第38 (1) 土器棺13検出状況(東から) (2) 土器棺14検出状況(南東から)  
(3) S X 105検出状況(東から)
- 図版第39 出土遺物(1)
- 図版第40 出土遺物(2)

#### 5. 興戸宮ノ前遺跡第3次

- 図版第41 (1) 調査区全景(垂直写真、上が南)  
(2) 木樋蓋撤去後(南から)
- 図版第42 (1) 井戸 S E 69(南から) (2) 井戸 S E 69井戸枠(南から)  
(3) S D 01土層断面(南から)
- 図版第43 (1) 木樋蓋撤去前(南から) (2) 木樋改修後の蓋(北から)  
(3) 木樋上部構造出土状況(北から)
- 図版第44 (1) 木樋上部構造出土状況(東から) (2) 木樋土層断面(南から)  
(3) 木樋取水口部分(東から)
- 図版第45 (1) 木樋取水口部分柱穴(北から) (2) 木樋蓋撤去後(南から)  
(3) 木樋蓋撤去後(東から)
- 図版第46 (1) 曲物 S X 68検出状況(南から) (2) S D 05不明木製品出土状況(東から)  
(3) S K 32曲物底板出土状況(南から)
- 図版第47 出土土器(1) S E 69・包含層
- 図版第48 (1) 出土土器(2) S D 03・04  
(2) 出土木製品(1) S D 14出土墨書木板
- 図版第49 出土木製品(2) S E 69・S X 68・S D 14
- 図版第50 出土木製品(3) S E 69・S X 68・A:S D 05・B:S X 68・C・D:S X 66

# 1. 橋爪遺跡第5次発掘調査概要

## 1. はじめに

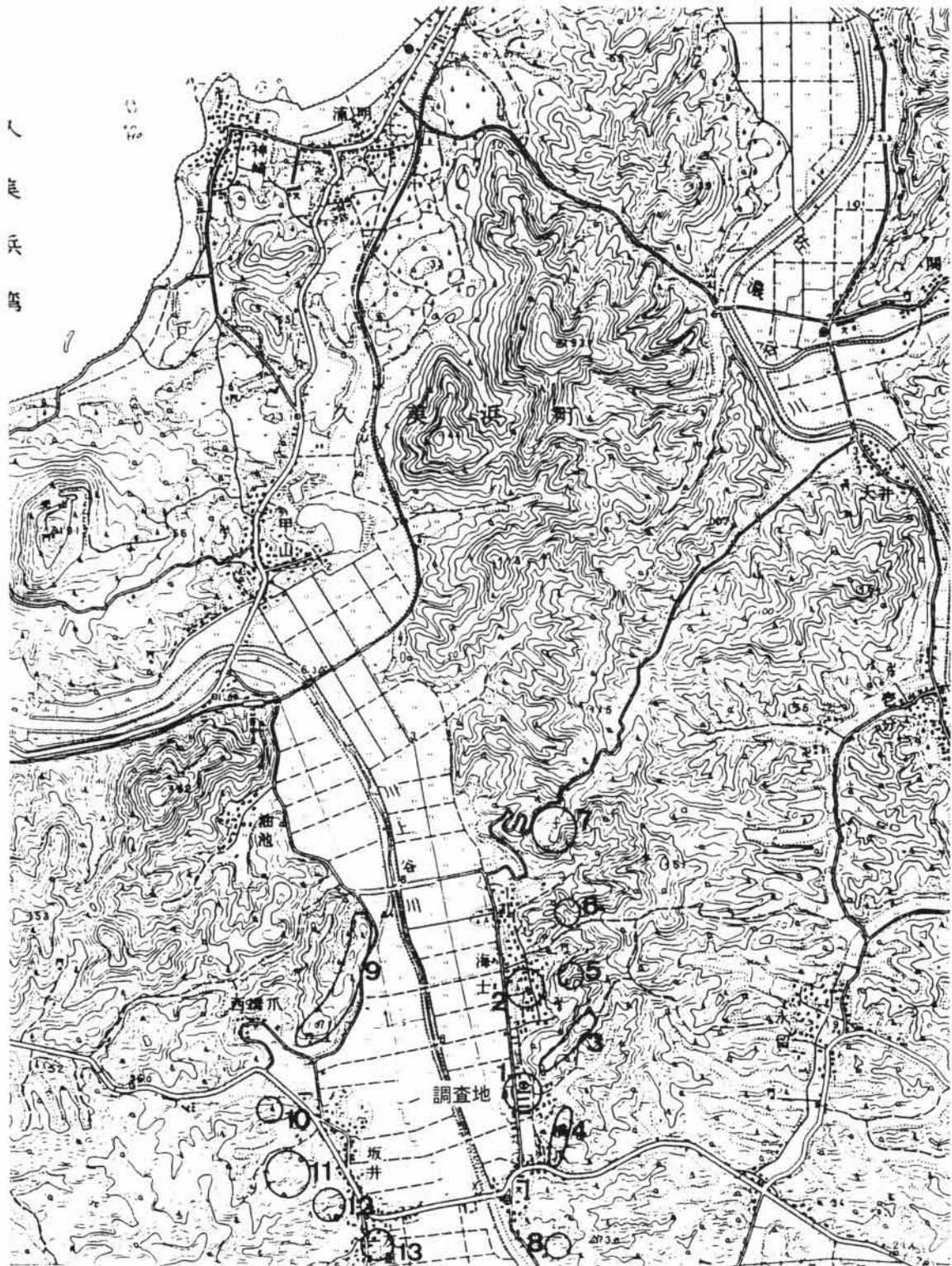
この調査は、京都府熊野郡久美浜町橋爪65番地に所在する京都府立久美浜高等学校の新校舎建築工事に伴うものである。橋爪遺跡は、大正12年に遺物が採集されて以来、昭和42年の第1次調査に続いて4度の調査が実施されている(第2図)。その結果、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての、川上谷川水系はもとより丹後地域を代表する拠点集落であると考えられている。昭和42年第1次調査では、上下2層に分かれる遺物包含層から、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての遺物が多量に出土した。続く第2次調査(昭和55年)では、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて3時期の遺構を確認している。この調査において、土器が良好な状況で出土し、それまで資料不足であった丹後地域における弥生時代の土器編年の指標となっている。また、この調査で瀬戸内中部のものと思われる分銅型土製品が出土している。第3次調査(昭和56年)では、田下駄などの多量の木製品が出土した。さらに、昭和62年には、第4次調査が実施された。この年の調査では、2か所で調査を行ったが、削平などにより顕著な遺構は検出できなかった<sup>(注1)</sup>。今回の調査地は、第5次調査として、第2次調査地の北側に隣接する地点で実施した。

調査は、校内の北側に新たに新校舎(福祉実習棟)を建設するのに先立って、実施することとなった。発掘調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、平成10年5月12日から7月3日まで実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同調査員村田和弘が担当した。調査面積は、約420m<sup>2</sup>である。なお、調査にあたっては、久美浜町教育委員会、府立久美浜高等学校、京都府教育委員会、地元各地区区長をはじめ多くの方々のご協力を得た。また、地元有志の方々および学生諸氏には、約2か月もの間、発掘作業に従事していただいた<sup>(注2)</sup>。記して感謝の意を表す。なお、発掘調査にかかる経費は、全額京都府教育委員会が負担した。

## 2. 位置と環境

橋爪遺跡の立地する地形は、過去の分布調査および地形観察から次のようなことがわかっている。久美浜町には、佐濃谷川、川上谷川、久美谷川の河川によって形成された3つの広大な谷平野が存在する。調査地周辺の遺跡として、川上谷川下流域には、北には弥生時代～奈良時代に遺物出土する海土遺跡や、殿垣古墳群、だあか古墳群、丘坂古墳群などの古墳群が存在し、東の丘陵上には八幡山古墳群、茶臼ヶ岳古墳群が存在している(第1図)。また、対岸の丘陵には、陵神社古墳群や岡田古墳群、大久保谷古墳群などが存在している。この川上谷川が形成する沖積地と河川沿いの丘陵上には、多くの遺跡が存在している<sup>(注3)</sup>。

橋爪遺跡は、もっとも安定した町内最大の谷平野である川上谷川流域に位置している。当遺跡



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |             |            |           |            |           |
|-------------|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 橋爪遺跡     | 2. 海土遺跡    | 3. 八幡山古墳群 | 4. 茶臼ヶ岳古墳群 | 5. だあか古墳群 |
| 6. 殿垣古墳群    | 7. 丘坂古墳群   | 8. 御社山古墳群 | 9. 陵神社古墳群  | 10. 岡田古墳群 |
| 11. 大久保谷古墳群 | 12. 高西谷古墳群 | 13. 友重遺跡  |            |           |

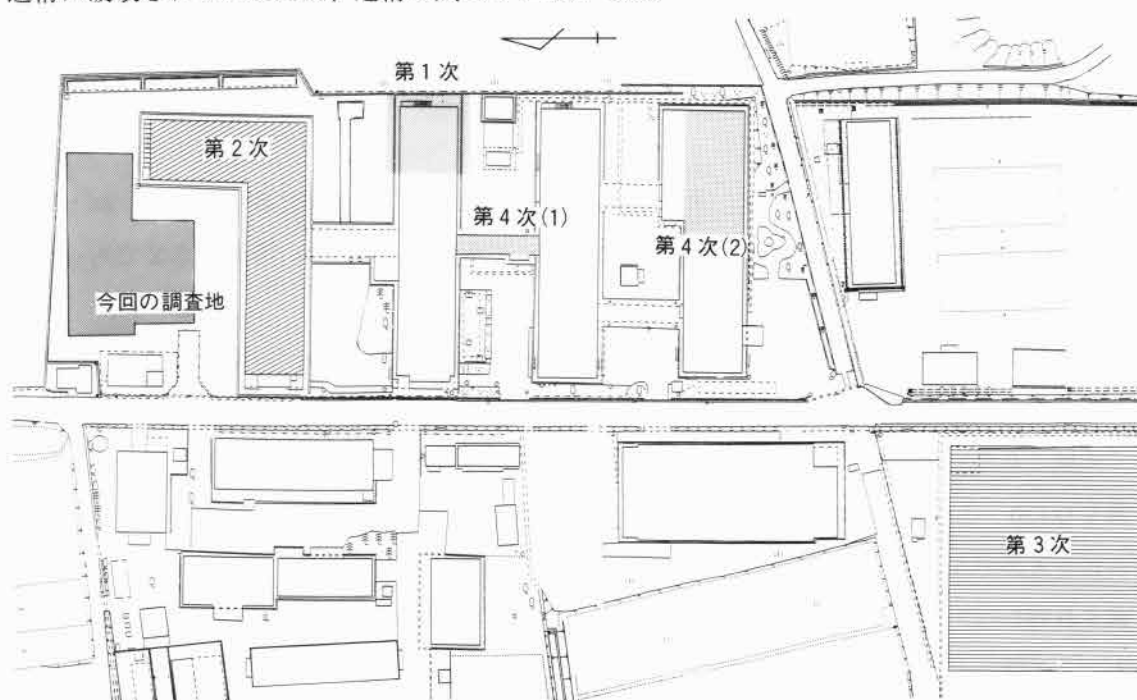
は、川上谷川右岸の段丘面上に立地している。現在の海拔は、約5～6mを測る。現在の地形は、久美浜高校建設の際に、西へのびる2つの丘陵端部を切り崩し、盛土による整地をしているため、旧状をとどめていない。段丘自体も、階段状に削られ、現在は畑地化されており、丘陵のどの部分まで削ったのか、現在では不明である。また、現在は、遺跡内を南北に公道が通り、その西側一帯はさらに約0.5～1m下がっている。第3次調査では湿地となっており、流路を検出したが、弥生時代の顕著な遺構は検出できなかった。しかし、傾斜のある段丘面一帯で遺物の散布が認められることから、遺跡は段丘面一帯に広がるものと推測される。

### 3. 調査の経過

今回の調査地は、校内の北端に位置する。調査は、新校舎建設範囲内に約420㎡の調査トレンチを設定した。当初は重機による掘削を行った。そして、トレンチの東側部分で深さ約0.6m、西側部分では深さ約1.1m掘り下げたところで遺物包含層を確認した。検出面の海拔は、約4mを測る。包含層の確認以後は、人力による掘削作業を行った。

遺物包含層は、調査トレンチほぼ全域に広がっており、この層には、奈良時代後期～平安時代前期と思われる須恵器・土師器が少量含まれるほか、弥生時代中期の土器や石器などが多量に含まれていた。包含層は、約20cmの堆積であった。

この包含層の上層には、校内の整地のための厚い盛り土層があり、その下層には畑地の耕作土を確認した(第4図)。また、この場所には以前、高校の寄宿舎や駐輪場があり、それらの解体された廃材が各所に投棄されていた。その投棄土坑(第3図の攪乱)によって、トレンチ内の包含層や遺構面が、破壊されていた。特に調査トレンチの東部は、そのほとんどが投棄穴による攪乱で遺構は破壊されていたため、遺構は残っていなかった。



第2図 調査トレンチ位置図(略図)

遺物包含層の上面では、トレンチの東部で土坑や柱穴・ピットを検出した。これらの遺構から、奈良時代後期～平安時代前期の土器が出土した。遺構を検出した東側部分は、地形的にみると西側より一段高い段丘上に立地している。この時期の遺構は、トレンチの東部でしか検出されなかった。さらに、遺物包含層内のこの時期の遺物についても、トレンチの東部に集中して含まれており、奈良時代後期～平安時代前期において段丘上を利用していたことがうかがえる。

トレンチの北西部で、包含層上面を精査した際、北東から南西の方向に向かう2条の溝を検出し、トレンチの南西部の南端に東西溝1条を検出した。これらの溝は、古い時期のものではなく、畑地化された際に設けられたものである。これらの溝の中には、竹製の暗渠排水が残っていた。北西部の溝2条は、それぞれ階段状に削られた段差部分に設けられていることから水路路であったようである。畑地の段差はトレンチの北壁の断面で確認することができた(第4図)。

包含層上面の遺構を検出し、記録のための遺構平面図を作成した後、包含層の掘削作業を行った。包含層を除去したところ、数多くのピットや土坑・溝を調査地全域で検出した。それ以降、検出した遺構を掘り進めていった。検出した遺構は、出土した遺物から、弥生時代中期のものであると判断した。

#### 4. 遺 構 の 概 要

遺物包含層を除去したのち、検出した弥生時代の遺構について説明する。遺構は、小規模なピットを多数、そして、円形や不定型な形をなす土坑や南北溝・東西溝などを検出した(第3図)。

**ピット035** このピットの周辺には、同じような規模のピットが集中している。このピットは、楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。ここからは、土製の玉が1点出土している。

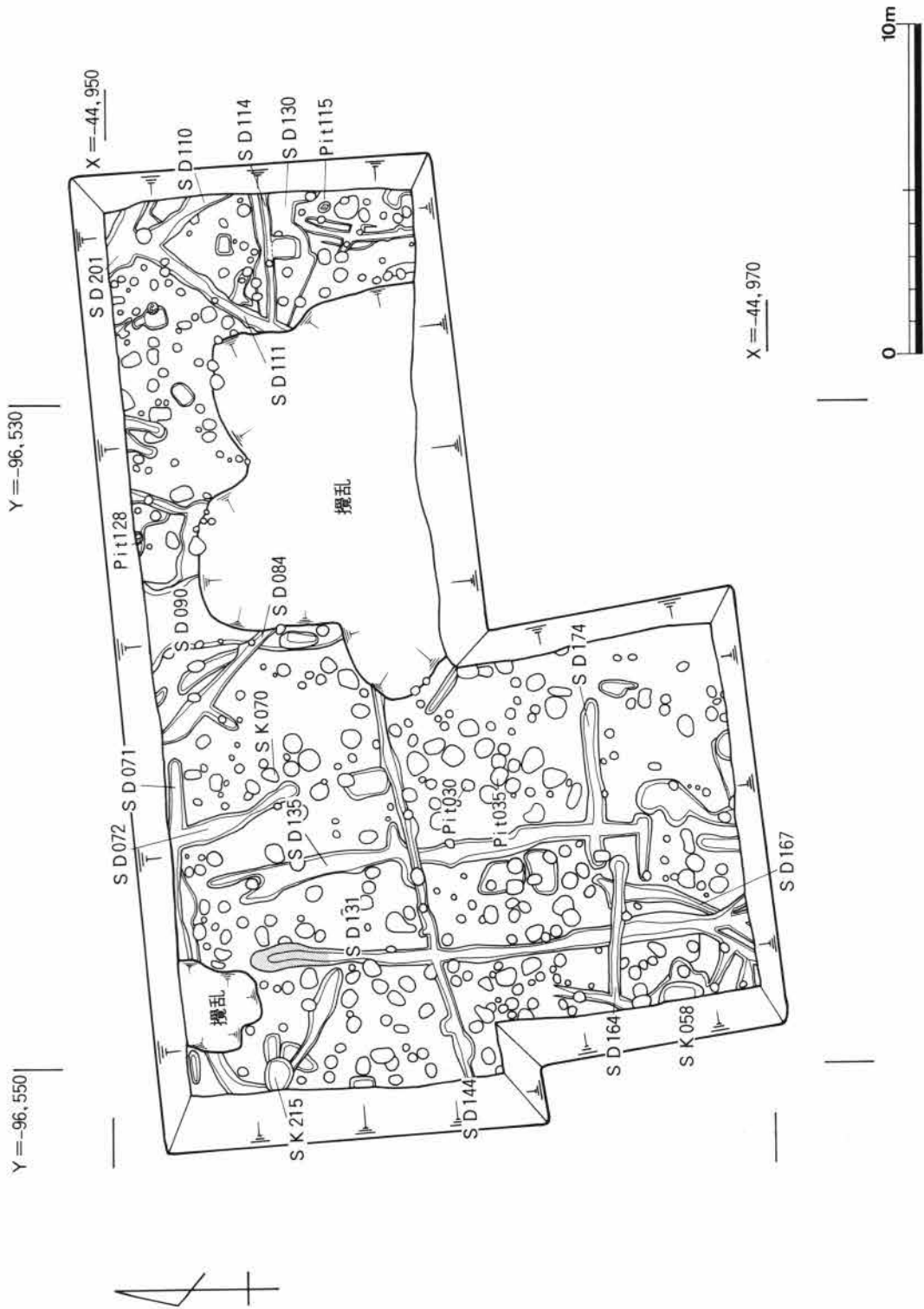
**土坑SK058** この土坑は、調査トレンチの南西部にある。この土坑は方形を呈し、南北の幅は約1.5mであった。この土坑は、他の土坑と比べて深く、約35cmであった。この土坑の底からは、多くの弥生時代中期の甕の破片などが出土した。この土坑は、トレンチの端で検出したため土坑全体を掘ることができなかった。

**溝SD090** この溝は、調査トレンチのほぼ中央を南北方向に通る溝である。幅約2m・深さ約10cmの溝であるが、南側が攪乱によって大部分が破壊されているため、溝がどこまであったかは不明である。

**溝SD114** 調査地の東側部分で東西方向を向く幅約30cmの溝である。この溝は、SD130内に掘られたものである。溝の深さは、約20cmと浅いものであった。また、この溝の西側も攪乱によって破壊されているため、この溝がどこまであったのかは不明である。

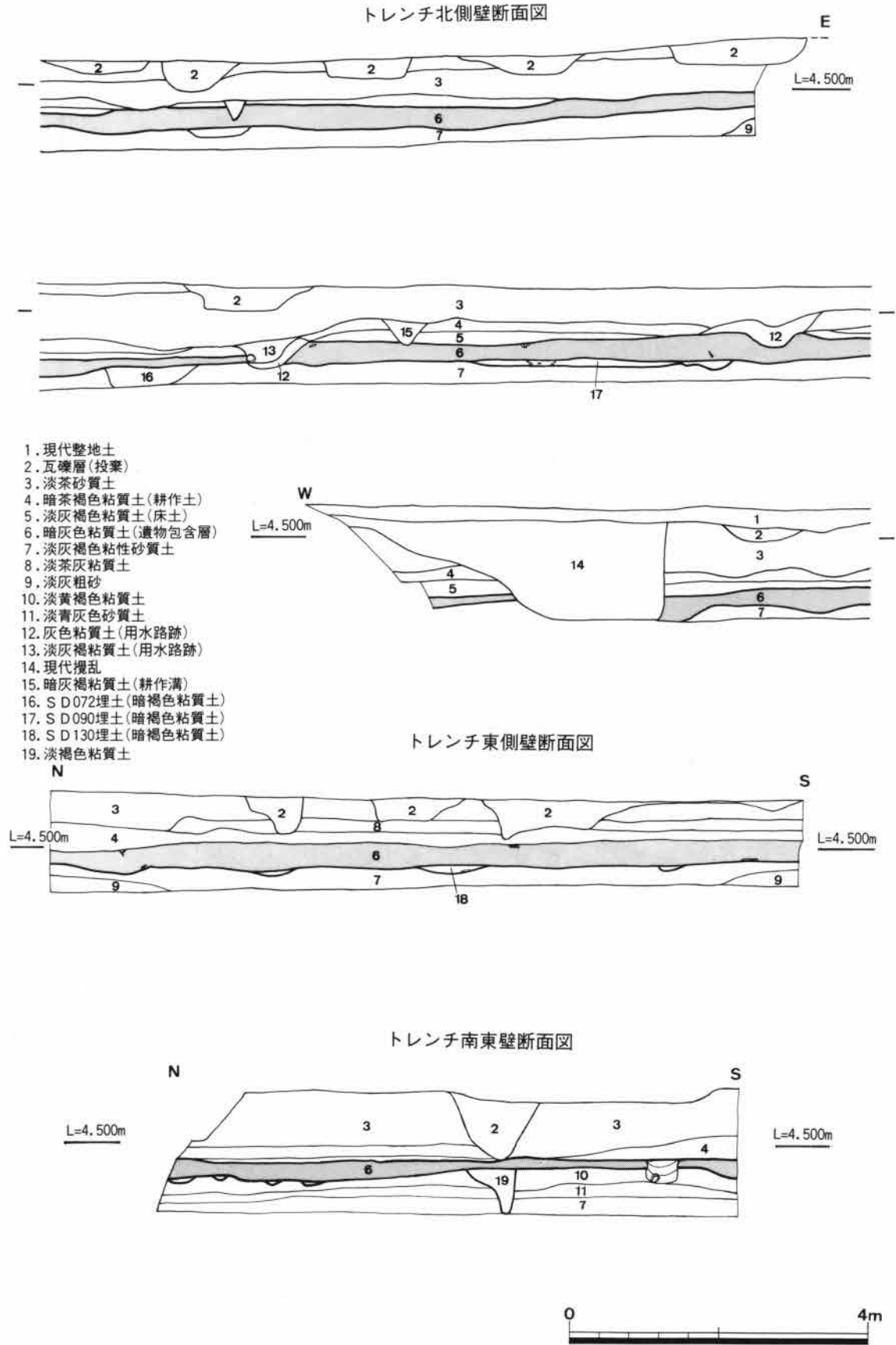
**溝SD130** この溝は、幅約1.7mで、深さ約15cmを測る。この溝は、SD114より古い時期に掘られたものである。

**溝SD131** この溝は、調査地の西側部分でSD135に平行する南北の溝である。幅は約1mである。この溝は、北側で途切れており、その部分には多量の弥生時代中期の土器が投棄されていた(第5図)。溝の深さは、南側で約15cm、北側の土器溜まり部分は約25cmを測る。また、大きな



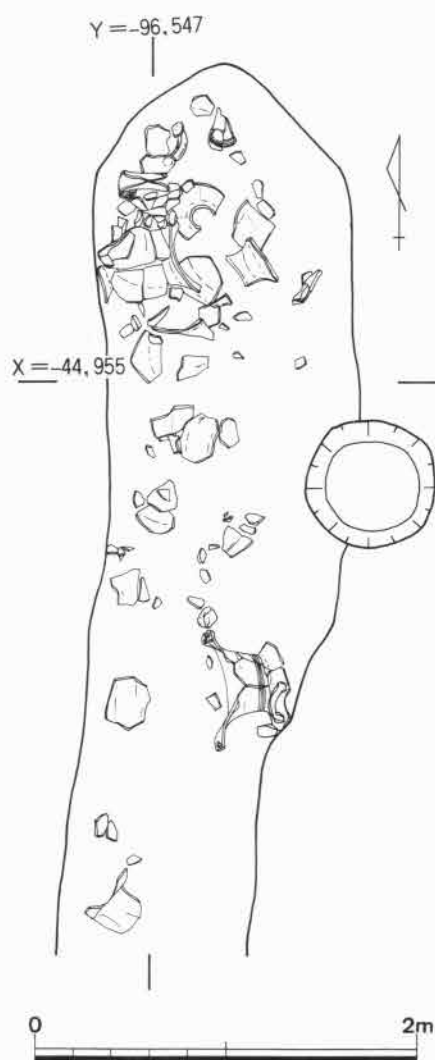
第3図 調査トレンチ遺構平面図(1/200)





1. 現代整地土
2. 瓦礫層(投棄)
3. 淡茶砂質土
4. 暗茶褐色粘質土(耕作土)
5. 淡灰褐色粘質土(床土)
6. 暗灰色粘質土(遺物包含層)
7. 淡灰褐色粘性砂質土
8. 淡茶灰粘質土
9. 淡灰粗砂
10. 淡黄褐色粘質土
11. 淡青灰色砂質土
12. 灰色粘質土(水路跡)
13. 淡灰褐色粘質土(水路跡)
14. 現代攪乱
15. 暗灰褐色粘質土(耕作溝)
16. S D 072埋土(暗褐色粘質土)
17. S D 090埋土(暗褐色粘質土)
18. S D 130埋土(暗褐色粘質土)
19. 淡褐色粘質土

第4図 土層断面実測図(1/80)



第5図 S D131土器溜まり実測図(1/40)

土器の破片がみられることから、水の流れは南から北に向かって流れていたか、もしくは土器の投棄場所であったと考えられる。

**溝S D135** この溝は、S D131の東側約2.5mに平行する溝である。幅は、約1.2m、深さは約15cmであった。この溝も北側で途切れている。この溝からも、S D131と同時期と思われる遺物が出土している。

**溝S D144** この東西方向の溝は、S D131・135と交差するように掘られている。この溝は、S D131・135より新しい時期に掘られた溝である。

## 5. 出土遺物

今回は、主に弥生時代の遺物を報告をする。出土した遺物は、遺物包含層から出土したものと、弥生時代中期後半の遺構から出土した遺物である。遺構から出土したもので、一括資料として溝S D131の出土遺物を載せた。この溝からは、多くの土器が集中して出土した。また、土坑S K058から出土したのも併せて掲載した。遺物番号1～19・52～55は包含層、20～30・57はS D131、31～38はS K058から出土したものである。その他には、他の遺構から出土した良好な資料を載せておいた。さら

に、石器や砥石などの石製品も出土した。

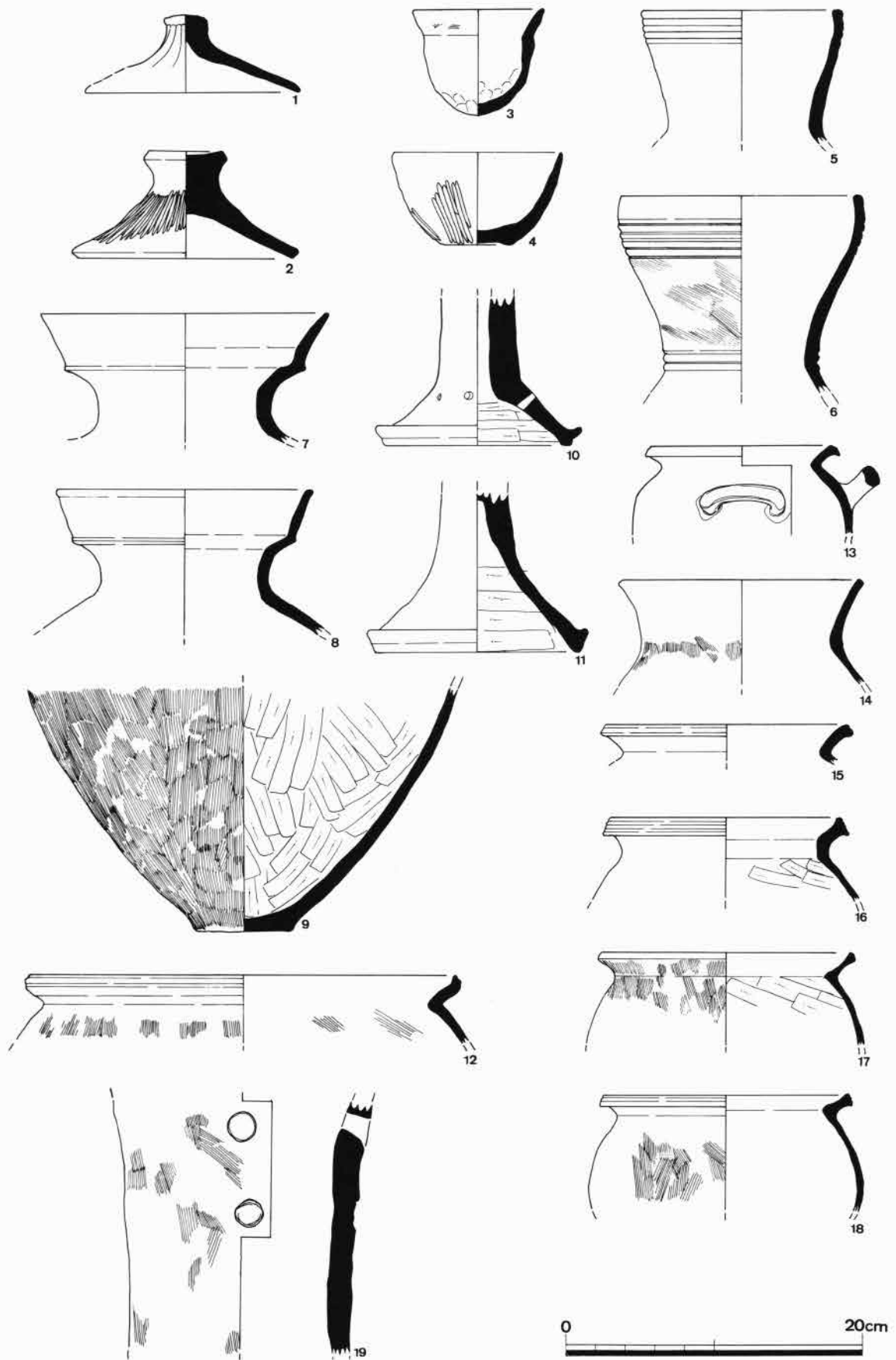
遺物番号19のような器種不明の土製品がある。粘土紐で巻き上げていく製法で、接合部をなでている。外面には、把手の接合痕らしきものがみられる。

そのほかには、遺物番号57の縄文土器などが出土しているが、1点のみであった。この土器片は、溝S D131の下層から出土しているが、埋没時の混入かは確認できなかった。

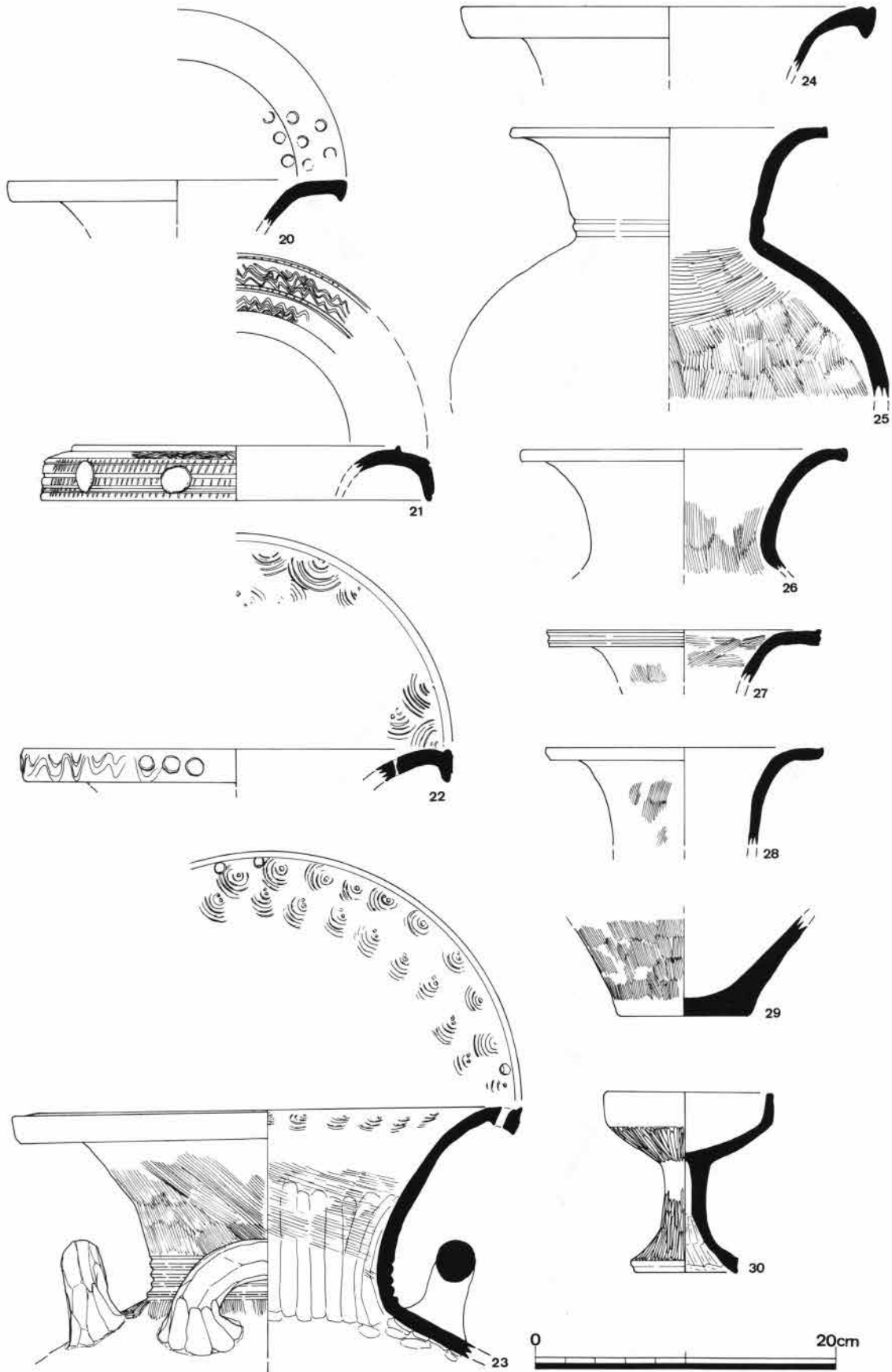
それぞれの遺構からの出土遺物の詳細については第6～10図と付表1を参照して頂きたい。

## 6. ま と め

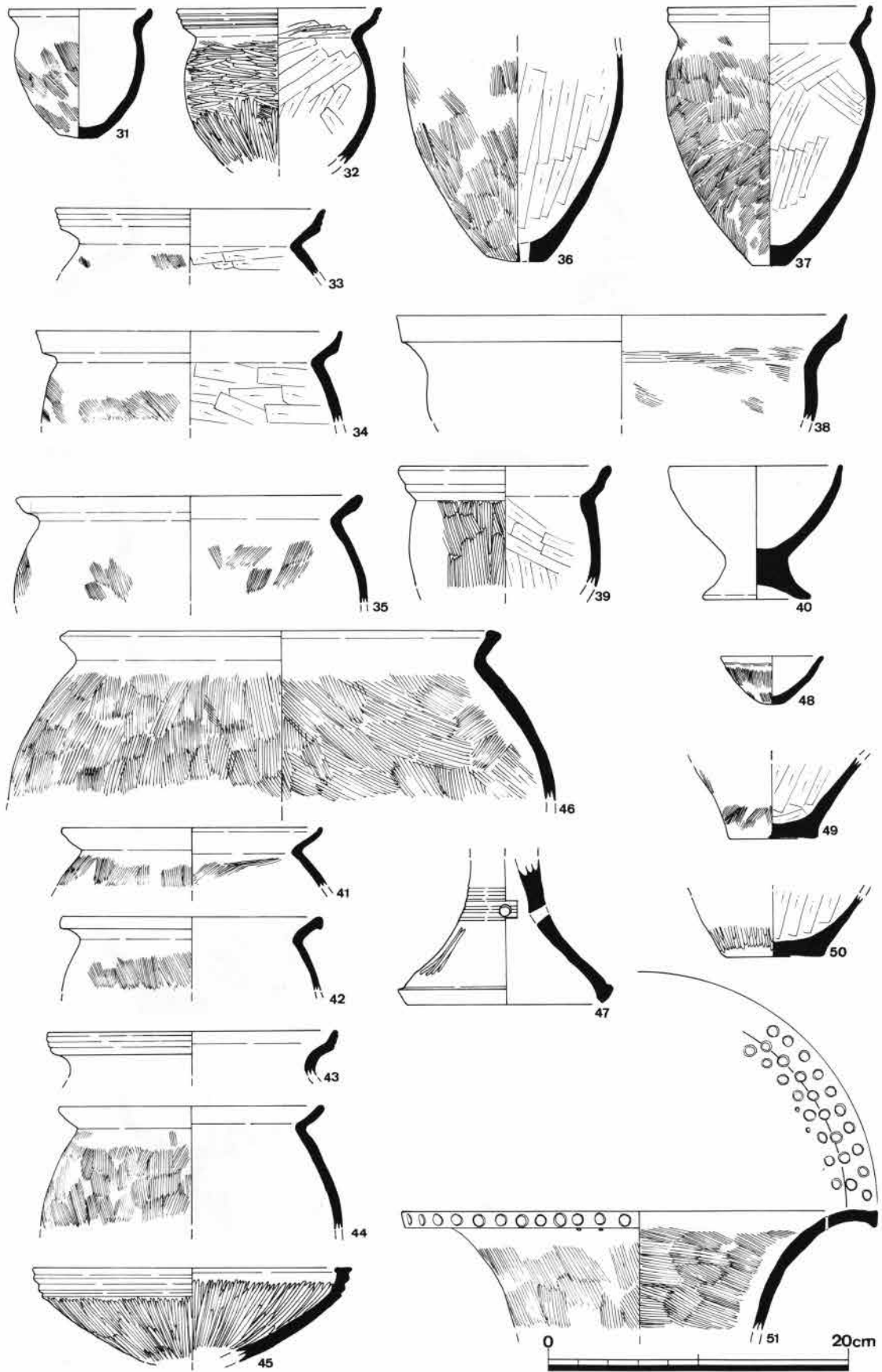
今回の調査は、橋爪遺跡の第5次ということで、久美浜高校内の北端部分で調査を実施した。その結果、約20cmの弥生時代中期～平安時代までの遺物を含む包含層と、多くのピットや柱穴と思われる小穴、土坑、溝などの遺構を検出した。また、それらの遺構からは、多量の遺物が出土した。検出したピットや小穴の位置関係から、建物の復元を試みたが、掘立柱建物を形成するような復元ができなかった。しかしながら、今回のように、多数のピットや小穴が集中していることは事実であり、この地に何棟かの建物が存在したと思われる。これらの建物の復元は、今後の



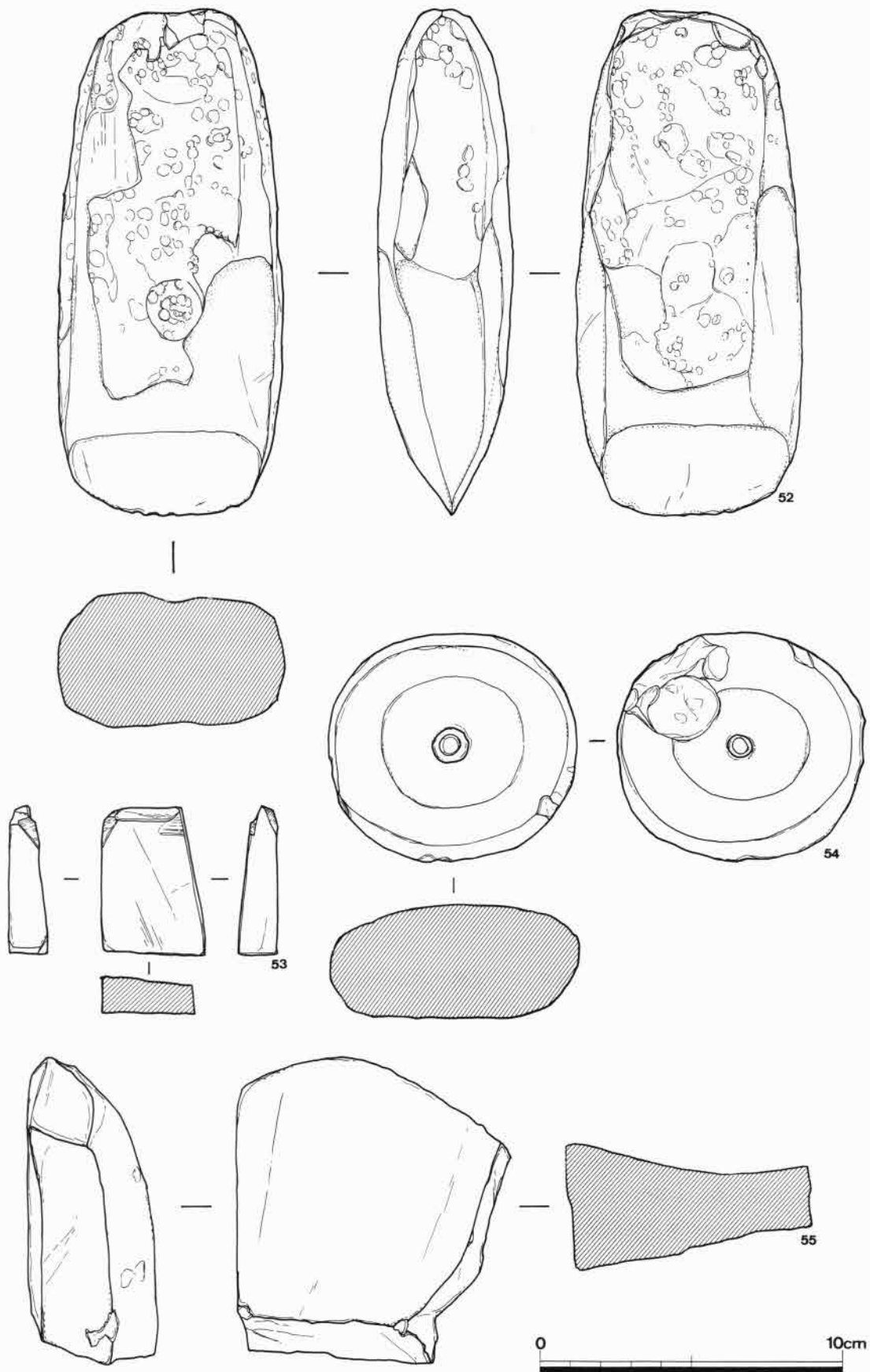
第6図 出土遺物実測図(1) (1/4)



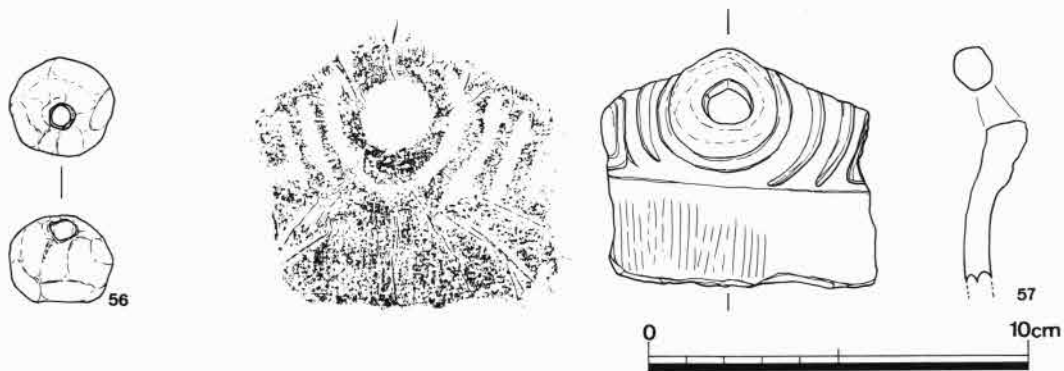
第7図 出土遺物実測図(2) (1/4)



第8図 出土遺物実測図(3) (1/4)



第9図 出土遺物実測図(4) (1/2)



第10図 出土遺物実測図(5) (1/2)

課題としたい。また、南北溝と東西溝が、平行に通っているところから、何らかの区画のために計画的に掘られている可能性が考えられる。

出土遺物としては、多量の弥生時代の遺物が出土した。この遺跡の出土遺物は、丹後地域の弥生土器編年の基準資料であり、今回出土の土器もそれらを補う良好な資料となるであろう<sup>(GEJ)</sup>。

今回の調査トレンチ内では、集落の区切りになるような溝や濠などの遺構もなく、第2次調査地と同様に遺構を確認することもできた。よって、当遺跡の範囲は、さらに北側に広がることが確認できた。さらに、段丘上には、奈良～平安時代の遺物も出土し、その時期の遺構と思われるものも検出できた。この時期にも、この地に居住域が広がる可能性が指摘できる。これにより、橋爪遺跡は、複合遺跡として今後検討していく必要があると考える。今後、この遺跡や近接地での調査で、この遺跡の規模や性格・役割などの解明の新たな糸口が得られることに期待する。

(村田和弘)

注1 高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』京都府教育委員会) 1968

石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1980

戸原和人「橋爪遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

細川康晴「橋爪遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注2 岸本久幸・井舎千代美・大西絹子・日下部好弘・西山恵美・岡田敏明・岡田美弥子・丸山晏男・西住 篤・辻 岩男・山岡恒美・山本芳野・吉村初恵・井尻たづ子・大江稔弘・山崎頼人・小倉志麻・山田 論・永埜ヤス子・山本 絹・野口美乃

注3 『京都府久美浜町遺跡地図』(『京都府久美浜町文化財調査報告』第18集 久美浜町教育委員会) 1996

注4 『京都府弥生土器集成』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989

付表1 橋爪遺跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	残存率(%)	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	包含層	蓋	80	ナデ	ケズリか	面取り
2	包含層	蓋	90	ナデ・ミガキ	ケズリ	
3	包含層	小型鉢	40	ナデ	ナデ	
4	包含層	小型鉢	70	ナデ・ミガキ	ナデ	
5	包含層	壺	20	ナデか	ナデか	沈線
6	包含層	壺	20	ナデ・ハケメ	ハケメ	沈線
7	包含層	壺	20	ナデ	ナデ	ハケメか
8	包含層	壺	20	ナデか	ナデ	ハケメか
9	包含層	壺	50	ナデ・ハケメ	ケズリ	
10	包含層	高坏	40	磨減	ケズリ	四方透かし
11	包含層	高坏	40	ナデか	ケズリ	
12	包含層	甕	15	ハケメ	ハケメ・ナデ	把手
13	包含層	甕	15	ナデか	ナデか	
14	包含層	甕	15	ハケメ・ナデ	ナデ	
15	包含層	甕	20	ナデ	ナデ	沈線
16	包含層	甕	20	ハケメ	ケズリ	沈線
17	包含層	甕	20	ハケメ	ケズリ・ナデ	
18	包含層	甕	20	ハケメ	ケズリ・ナデ	
19	包含層	不明	不明	ハケメ	ナデか	粘土紐巻き上げ
20	S D 131	甕	10	ナデ	ナデ	竹管紋
21	S D 131	甕か	15	列状紋	波状紋	
22	S D 131	甕	20	波状紋	扇形紋	
23	S D 131	大型甕	40	ハケメ	扇形紋	把手
24	S D 131	甕	15	磨減	ナデか	
25	S D 131	甕	30	ハケメか	ハケメ	沈線
26	S D 131	甕	20	磨減	ハケメか	
27	S D 131	甕	20	ハケメ	ハケメ	沈線
28	S D 131	甕	15	ハケメか	ハケメか	
29	S D 131	甕	15	ハケメ	ナデか	
30	S D 131	高坏	100	ミガキ・ナデ	ナデ	脚部内面ケズリ
31	S K 058	小型甕	90	ハケメ	ナデ	
32	S K 058	甕	80	ミガキ	ケズリ・ミガキ	
33	S K 058	甕	20	ハケメ	ケズリ	
34	S K 058	甕	25	ハケメ	ケズリ	
35	S K 058	甕	20	ハケメ	ハケメ	
36	S K 058	甕	30	ハケメ	ケズリ	
37	S K 058	甕	50	ハケメ	ケズリ	
38	S K 058	鉢	20	ハケメ	ケズリ	
39	S K 076	甕	30	ミガキ	ケズリ	



番号	出土遺構	器種	残存率(%)	調整(外面)	調整(内面)	備考
40	Pit051	高台付鉢	60	磨減	磨減	
41	S K070	甕	20	ハケメ	ハケメ	
42	S K215	甕	20	ハケメ	ナデか	
43	S D135	甕	15	ハケメ	ナデ	
44	S D114	甕	30	ハケメ	ナデか	
45	S D130	台付鉢	20	ミガキ	ミガキ	
46	S D090	甕	40	ハケメ	ハケメ	
47	Pit030	高坏	40	ミガキ	ナデか	
48	S D084	小型鉢	100	ハケメ	ナデか	三方透かしか
49	S D110	甕	30	ハケメ	ナデ	ミニチュア
50	S K046	甕	20	ハケメ	ケズリ	底部
51	S D090	鉢	20	ハケメ	ケズリ	底部
52	包含層	石斧	100			二次的使用
53	包含層	砥石	100			四面使用
54	包含層	石製品	100			中央に穴
55	包含層	砥石	100			
56	Pit035	土製玉	100			
57	S D131	縄文土器か	10	条痕か	ナデか	混入か

## 2. 奈具岡遺跡第9次発掘調査概要

### 1. はじめに

奈具岡遺跡は、京都府竹野郡弥栄町溝谷に所在する。今回の発掘調査は、主要地方道網野岩滝線の建設工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。同線の建設工事に伴う発掘調査としては、平成5・6年度に奈具岡遺跡や奈具谷遺跡の試掘調査を実施している(文献10・12)。今回の調査は、平成6年度の試掘調査の成果を受けて、面的な調査を実施したものである。

発掘調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員筒井崇史が担当し、多くの調査補助員・整理員・作業員の協力<sup>(注1)</sup>を得た。発掘調査は、平成10年8月18日から平成10年11月13日である。調査面積は1,260m<sup>2</sup>である。本概要報告は、筒井のほか、奈良大学卒業生榎本順子が執筆し、文末に記した。また、本概要報告に掲載した写真は、遺構を筒井が、遺物を調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影した。航空写真は(株)かんこうに、花粉分析は(株)古環境研究所にそれぞれ委託した。

調査期間中は、弥栄町教育委員会・京都府峰山土木事務所をはじめとする関係諸機関から御協力を得た。

なお、本発掘調査に係る経費は、全額京都府土木建築部が負担した。

(筒井崇史)

### 2. 位置と環境

奈具岡遺跡の所在する弥栄町は、京都府北部の丹後半島のほぼ中央に位置する。丹後半島の中央部には標高600mほどの山々が連なって山地が形成される。また、日本海沿岸は、半島先端の経ヶ岬より東側の若狭湾沿岸地域では典型的なリアス式海岸であるが、西側では比較的变化の少ない海岸線が続き、天然の良港が随所に形成される。

奈具岡遺跡の所在する弥栄町は、町内を北流する竹野川の流域に開けた東西約1.5km・南北約6kmの沖積平野を中心としている。竹野川両岸には段丘上に標高40mほどの東西に長い樹枝状の丘陵が延び、丘陵の間を狭長な谷が多く形



第11図 調査地位置図

成される。奈具岡遺跡は竹野川に合流する奈具川と溝谷川に挟まれた東西にのびる丘陵上に位置する。

奈具岡遺跡の立地する丘陵(奈具岡丘陵)の北側には、東西方向にのびる谷(奈具谷)が存在し、さらに北側には比較的細長い丘陵(奈具丘陵)が存在する。奈具丘陵上には、奈具遺跡・奈具墳墓群・奈具古墳群などが立地する。奈具岡遺跡は、東西500m・南北400mの範囲に広がり、遺跡の中央部には、奈具谷からのびる小さな谷が北側から入り込んで、奈具岡遺跡を東西に二分している。奈具岡遺跡内やその南側の丘陵上には、多数の古墳が確認されており、これらは、奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群などと呼称されている(第12図)。

次に、奈具岡遺跡周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は、周辺では確認されていない。また、縄文時代の遺跡も、有舌尖頭器が出



第12図 調査地周辺主要遺跡分布図

- |           |            |            |                |             |          |
|-----------|------------|------------|----------------|-------------|----------|
| 1. 調査地    | 2. 奈具岡遺跡   | 3. 奈具谷遺跡   | 4. 奈具遺跡        | 5. 奈具古墳群    | 6. 奈具墳墓群 |
| 7. 奈具谷古墳群 | 8. 奈具岡古墳群  | 9. 奈具岡西古墳  | 10. 奈具岡北古墳群    | 11. 奈具岡南古墳群 |          |
| 12. 鳥取橋遺跡 | 13. オテジ谷遺跡 | 14. 坂野遺跡   | 15. 坂野丘遺跡      | 16. フキ岡遺跡   |          |
| 17. 城楽寺遺跡 | 18. オテジ谷古墳 | 19. 宮ノ森古墳群 | 20. ゲンギョウの山古墳群 |             |          |
| 21. 普甲古墳群 | 22. 溝谷古墳群  | 23. いもじや古墳 | 24. 愛宕神社古墳群    | 25. 黒部遺跡    |          |

土した奈具岡遺跡(第4次調査地点)や打製石鏃が出土した遠所遺跡(鴨谷地区E地点)などがあるだけで、きわめて少ない。

弥生時代になると、竹野川河床の鳥取橋遺跡(12)や奈具岡遺跡(第2次調査地点)で前期の弥生土器が出土しているが、その数は多くない。しかし、中期になると、竹野川流域の丘陵部に集落や墳墓が営まれるようになる。特に、竹野川東部の丘陵部では、今回調査を実施した奈具岡遺跡(2)をはじめ、奈具谷遺跡(3)・奈具遺跡(4)・奈具墳墓群(6)などが、非常に狭い範囲に集中して営まれる。また、竹野川西岸のオテジ谷遺跡(13)でも竪穴式住居跡が検出されている。

弥生時代後期になると、中期から続く奈具岡遺跡(第1次調査地点ほか)や、竹野川西岸の坂野遺跡(14)で竪穴式住居跡などが検出されている。同時期の墳墓としては、貼り石墓が検出された奈具岡遺跡(第3次調査地点)や、坂野丘遺跡(15)がある。坂野丘遺跡は、坂野遺跡の南に位置し、多量の玉類が出土している。このほかにもフキ岡遺跡(16)・城楽寺遺跡(17)などが知られる。

古墳時代になると、竹野川流域の丘陵上に多数の古墳が築かれる。比較的大型の古墳としては、黒部銚子山古墳・ニゴレ古墳・奈具岡北1号墳がある。黒部銚子山古墳は、発掘調査は行われていないが、全長105mを測る前方後円墳で、円筒埴輪・葺石・段築をそなえる。ニゴレ古墳は、直径約30mを測る方墳で、舟形埴輪や甲冑形埴輪・椅子形埴輪など類例の少ない形象埴輪や衝角付冑・三角板革綴短甲などの鉄製品が出土した。奈具岡北1号墳は、全長約60mの前方後円墳で、伽耶系陶質土器・初期須恵器が副葬されていた。

また、古墳時代のほぼ全期間を通じて、小規模な古墳が築造される。古墳時代前期から中期にかけては、大田南古墳群・オテジ谷古墳(18)・宮の森古墳群(19)・ゲンギョウの山古墳群(20)・普甲古墳群(21)・溝谷古墳群(22)・いもじや古墳(23)・愛宕神社古墳群(24)・奈具岡南古墳群(11)などがある。このうち、大田南5号墳は、長辺19mの小規模な古墳であるが、国内最古の紀年銘である「青龍三(235)年」銘方格規矩鏡が出土しており、注目される。

後期には、太田古墳群・遠所古墳群・奈具谷古墳群(7)などがある。太田古墳群のうち、太田2号墳は直径30mを測る円墳で、埋葬施設からは勾玉・管玉・ガラス小玉などの玉類が出土し、墳丘には埴輪列が確認されている。

古墳時代の集落遺跡は、奈具岡遺跡(第1・2次調査地点)や、竹野川西岸の遠所遺跡で調査された程度で、その実態はほとんど明らかでない。

飛鳥時代以降では、遠所遺跡・ニゴレ遺跡・黒部遺跡(25)などの製鉄遺跡が多く見られる。遠所遺跡は、昭和63年度から平成4年度までの調査で、製鉄炉・鍛冶炉・須恵器登窯・炭窯などが多数確認され、主に6世紀後半と8世紀後半に鉄生産を行っていた。ニゴレ遺跡は、8世紀後半から10世紀初頭の遺構を中心とする。黒部遺跡は、奈具岡遺跡の北側に位置する。遺構の中心は8世紀後半から9世紀初頭にかけてで、遠所遺跡に先行する製鉄炉・炭窯の存在が確認された。

また、文献資料には、羽衣伝説で有名な『丹後国風土記』逸文奈具社条に、「竹野郡船木里奈具村」の地名が見られ、奈具遺跡は「奈具丘」伝承地と考えられる。(植本順子)

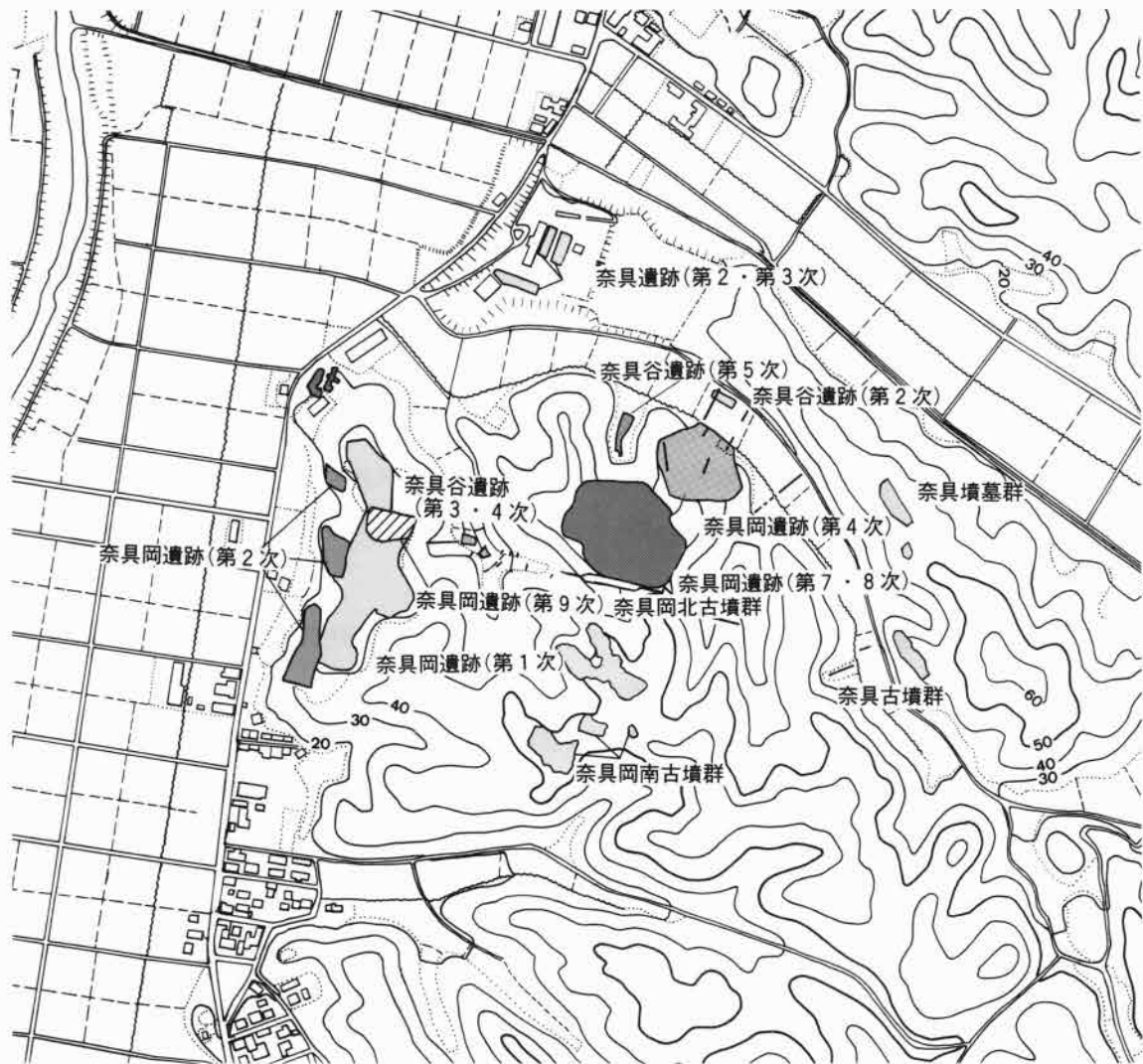
### 3. 過去の調査

奈具岡遺跡は、これまで8回の発掘調査が実施されており、今回の調査は、第9次調査に当たる。ところで、奈具岡遺跡の周辺には、奈具遺跡・奈具谷遺跡・奈具岡北古墳群など、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての遺跡が多く分布する(第13図・付表2)。これらの遺跡は、相互に密接な結びつきがあり、奈具・奈具岡遺跡群と総称されている<sup>(注4)</sup>。

次に、奈具・奈具岡遺跡群のこれまでの調査について簡単に見ていくことにする。

奈具・奈具岡遺跡群に対する発掘調査は、昭和37年に現在の京都府立峰山高等学校弥栄分校の校地造成工事に伴って奈具遺跡の調査が行われたのが最初である(第1次調査)。この調査では、弥生時代中期の土器・石器が出土し、弥生時代の遺跡の存在が明らかになった<sup>(注5)</sup>。昭和46年と昭和54年にも、同分校の校舎の増改築などに伴い発掘調査が行われ、竪穴式住居跡や溝跡・柱穴などが検出されている(第2・3次調査)。出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられ、竹野川流域における当該期の集落遺跡が初めて確認された(文献1・2)。

一方、奈具岡遺跡は、竹野川に面した西側の丘陵上に広がると考えられていたことから、遺跡



第13図 奈具・奈具岡遺跡群調査次数別位置図(1/8,000)

の範囲や性格を把握することを目的として、昭和56年に試掘調査が実施された(第1次調査)。この調査では、弥生時代後期から平安時代後期にかけての遺構・遺物が確認され、特に、弥生時代後期と古墳時代中期の竪穴式住居跡が1基ずつ検出された。また、遺跡が丘陵全体に広がることも明らかになった(文献3)。

昭和59年には、第1次調査地の西側、丘陵の縁辺部約5,500㎡を対象として第2次調査が実施された。この調査では、弥生時代終末期の方形周溝墓、古墳時代前期から中期前半の竪穴式住居跡、古墳時代中期後半から後期前半の古墳・土壙墓などが検出された。遺物は、当該期の遺物のほか、包含層から弥生時代前期の土器片が出土している。この調査によって古墳時代前期から中期にかけての集落が奈具岡遺跡に存在することが確認された(文献4・5)。

翌昭和60年には、第2次調査地から北へ約100mに位置する丘陵の先端で第3次調査が実施され、弥生時代後期の貼り石墓が検出された。また、新たに木棺直葬を内部主体とする3基の古墳からなる奈具谷古墳群が発見、調査された。古墳時代後期に位置づけられる(文献6)。

その後、しばらく奈具・奈具岡遺跡群では発掘調査が実施されていなかったが、「丹後国営農地開発事業」に伴い、平成3年に奈具谷を中心に試掘調査が実施された(奈具谷遺跡第1次調査)。その結果、谷部・丘陵部ともに既知の遺跡の範囲を超えて遺構・遺物の存在が確認された。丘陵部は奈具岡遺跡第4次調査として、また、谷部は奈具谷遺跡第2次調査として、ともに平成4年に実施された(文献7・9)。

奈具岡遺跡第4次調査地は、周知の遺跡の範囲外であったが、調査の結果、弥生時代中期中頃の竪穴式住居跡あるいはテラス状遺構22基を検出し、その多くから緑色凝灰岩製管玉未製品・水晶製管玉未製品・瑪瑙製石針などの玉作りに関係する遺物が出土した。これらの遺構・遺物は中期中頃に限定されることから、担当者の田代 弘は、「専門的な玉作り集団の居住地」の可能性を指摘し、「奈具遺跡から派生した専門的集落」との見解を示した(文献9)。

続いて、主要地方道網野岩滝線の建設工事に伴い、奈具岡遺跡第5・6次調査が実施された。これは、奈具岡遺跡の広がりを確認する目的のもので、奈具岡遺跡を東西に二分している谷部と第1次調査地で遺構・遺物が確認された。また、谷部は、奈具谷遺跡第3・4次調査として実施され、顕著な遺構は検出されなかったものの、多くの木製品が出土した(文献10・12)。

平成7・8年に実施された奈具岡遺跡第7・8次調査では、第4次調査地の西側に位置する袋状の谷部で、第4次調査同様、玉作り関連の遺構・遺物が多数検出された。両次調査あわせて、竪穴式住居跡あるいはテラス状遺構が74基検出され、水晶製玉製品や水晶製玉作りに伴う鉄製加工具、あるいはガラス玉製品などが出土した。また、鉄器生産関連の遺構・遺物も確認されている。出土した土器から、第4次調査地点に続く弥生時代中期後半に位置づけられ、同時期の一大生産拠点であったことが明らかになった(文献17・24)。

以上、奈具岡遺跡の調査を中心に述べてきたが、このほかにも奈具・奈具岡遺跡群の調査は数多く実施されている。注目されるものとして、奈具谷遺跡や奈具墳墓群、奈具岡北1号墳の調査をあげることができる。

奈具谷遺跡は、第2次調査で護岸施設や取水口状の遺構が検出され、第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器や多数の木製品が出土した。また、取水口状遺構の周辺でトチノミの集積が確認され、アク抜きなどのための加工場と考えられている。護岸施設を伴う水路跡は、水田に関連した灌漑用施設と位置づけられている(文献11)。また、平成7年度の第5次調査でも、護岸施設や木道が検出されており、第2次調査と同じく灌漑用施設と考えられる(文献23)。

奈具墳墓群は、奈具岡遺跡の東方に位置する弥生時代中期中頃の墳墓である。調査の結果、5基の墳丘と2基の陪葬墓が検出された。総数19基の主体部が検出され、そのうち5基で土器の破碎供献が確認された。奈具遺跡や奈具岡遺跡の墓域に相当すると考えられる(文献14)。

奈具岡北1号墳は、全長60mを測る前方後円墳で、調査以前には知られていなかった古墳である。2基の主体部が確認され、第1主体部には、陶質土器あるいは初期須恵器12点と土師器4点が供献されていたほか、銅釦2点や鉄矛・鉄剣などの鉄製品が多数副葬されていた。奈具岡北古墳群では、このほかに古墳や弥生墳墓が6基が調査された(文献19・26)。

奈具岡南古墳群は、奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群の南側の丘陵上に営まれた古墳群で、計23基が調査された。古墳時代前期後半から後期中頃にかけて継起的に築造されたことが明らかになった(文献15・22・28)。

#### 4. 調査の経過

第9次調査地は、第1次調査が実施された丘陵上を東西に横切る地点に位置する。調査地の位置する丘陵は、西側に竹野川によって形成された沖積平野を見下ろし、東側に奈具谷からのびる谷がある。この丘陵には西に向かって開析する小規模な谷がいくつか存在する。

今回の発掘調査は、第6次調査の成果を受けて実施した。調査地のほぼ中央は、畑地の開墾による大規模な掘削によって大きく削平されており、現状で比高差1.5m前後の崖面となっている。この崖面から北東側の丘陵平坦部については、第6次調査時に表土掘削が終了しており、遺構面(地山)が露出した状態であった。また、崖面よりも南西側には埋没した谷があり、やはり第6次調査時に遺物包含層が確認されていた。調査に当たっては、丘陵平坦部をA地区、埋没谷部分をB地区と呼ぶことにした。

現地調査は、平成10年8月18日から開始した。A地区では、精査を行って、遺構の検出に務めた。B地区では、8月19日から27日にかけて重機による表土掘削を実施した。また、谷底を確認するために断ち割りを行った。

A地区では、精査の結果、竪穴式住居跡4基をはじめ、溝跡・柱穴跡などを多数検出した。B地区では、遺物包含層上面まで堆積層を除去した後に精査を行い、地山上で溝跡・柱穴跡を検出した。しかし、遺物包含層上面あるいは、遺物包含層下層では、顕著な遺構は検出されなかった。遺構のうち、時期が判明するものは、大半が弥生時代後期と古墳時代中期のものである。その他にも、古墳時代後期や平安時代に属する土器片が出土している。遺構は、平板で略測を行いながら遺構番号をつけ、必要に応じて1/10あるいは1/20の平面図・断面図作成と写真撮影を行った。

なお、今回の調査では、弥生時代の玉作り関連の遺物、あるいは古墳時代以降にみられる製鉄・鍛冶関連の遺物の出土も予想されたため、竪穴式住居跡の埋土の洗浄作業を行った。しかし、上記の関連遺物は全く出土せず、白玉1点と炭化米を検出したにとどまる。

おむね遺構の検出・掘削作業が終了した10月29日には、ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。11月5・6日には、B地区の谷を完掘するために重機を搬入して谷底まで掘削した。その結果、谷底で時期不明の落とし穴と思われる遺構を2基検出した。11月10日には、関係者を対象とした説明会を実施し、関係者20名ほかの参加を得た。11月12日にはすべての作業が終了し、翌13日に機材等の撤収を行い現地調査を終了した。

## 5. 調査の概要

### (1) 基本層序

A地区は、表土下30~60cm前後で地山に達する(第14図P1・P2)。A地区の遺構は、いずれも地山上で検出した。B地区のうち北東側は、大きく削平されており、わずか15cmで地山となり(第14図P3)、遺構も全く検出されなかった。B地区の南西側では、遺物包含層の上面まで重機掘削を行い(現地表下約1.3m)、さらに谷地形の堆積層を断ち割って、谷底と思われる地山を確認した(現地表下約2.8m)。

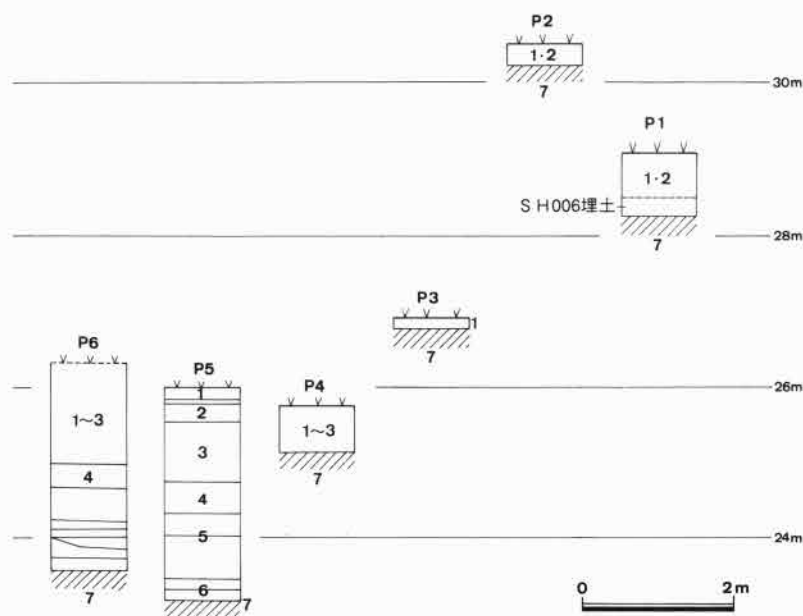
谷の堆積状況は、大きく7層に分けることができる。上から、表土(第1層)・淡茶褐色土(床土・第2層)・茶褐色土(第3層)・黒褐色粘質土(第4層)・黒灰色シルト質土(第5層)・茶褐色粘質土(第6層)・黄褐色粘質土(地山・第7層)である(第14図P6)。

第3・4層は遺物包含層であるが、特に第4層上半で弥生時代後期から古墳時代中期の遺物が多数出土した。第3層では、上記の遺物のほか、平安時代の須恵器片などが出土した。第5・6層はいずれも無遺物層である。また、調査終了間際実施した谷地形の完掘作業でも、堆積状況を確認している(第14図P

6)。なお、第5・6層と後述する落とし穴状遺構S X405から試料5点を採取して、花粉分析を行ったが本概要報告で言及することはできなかった。

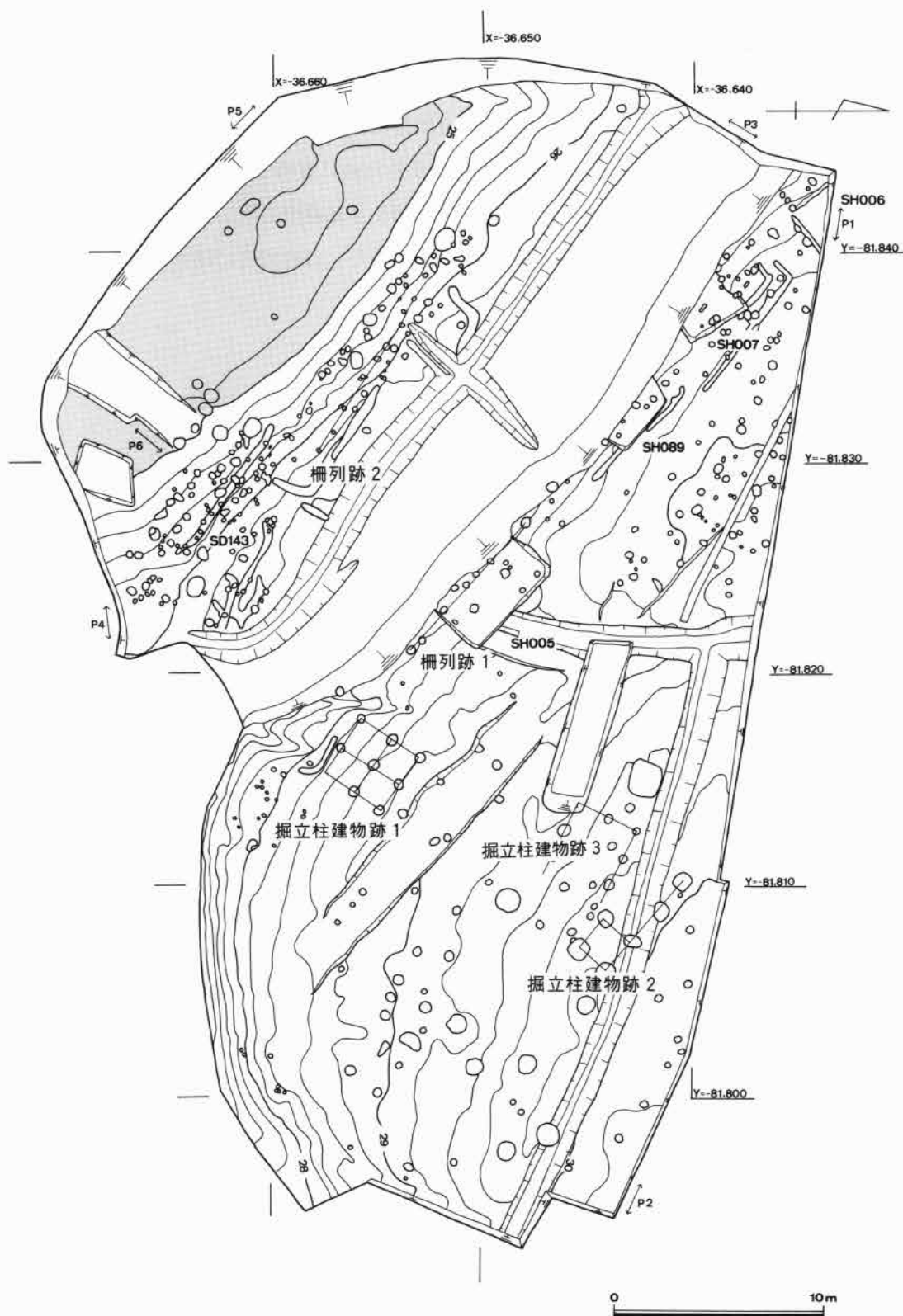
### (2) 検出遺構

今回の調査では、竪穴式住居跡4基、掘立柱建物跡3棟、柵列跡2基、落とし穴状遺構2基、溝跡・柱穴多数を検出した。なお、今



第14図 調査区内土層柱状図





第15図 遺構配置図

回の調査地内には第1次調査のグリッドが複数含まれており、第1次調査で確認された2基の竪穴式住居跡は、今回の調査で検出された竪穴式住居跡SH005・SH006に相当すると思われる。

以下、主要遺構の概要について報告する。

① 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は、いずれもA地区において検出されたが、畑地の開墾や調査地外にのびるなどの理由から、全容をうかがえるものはない。

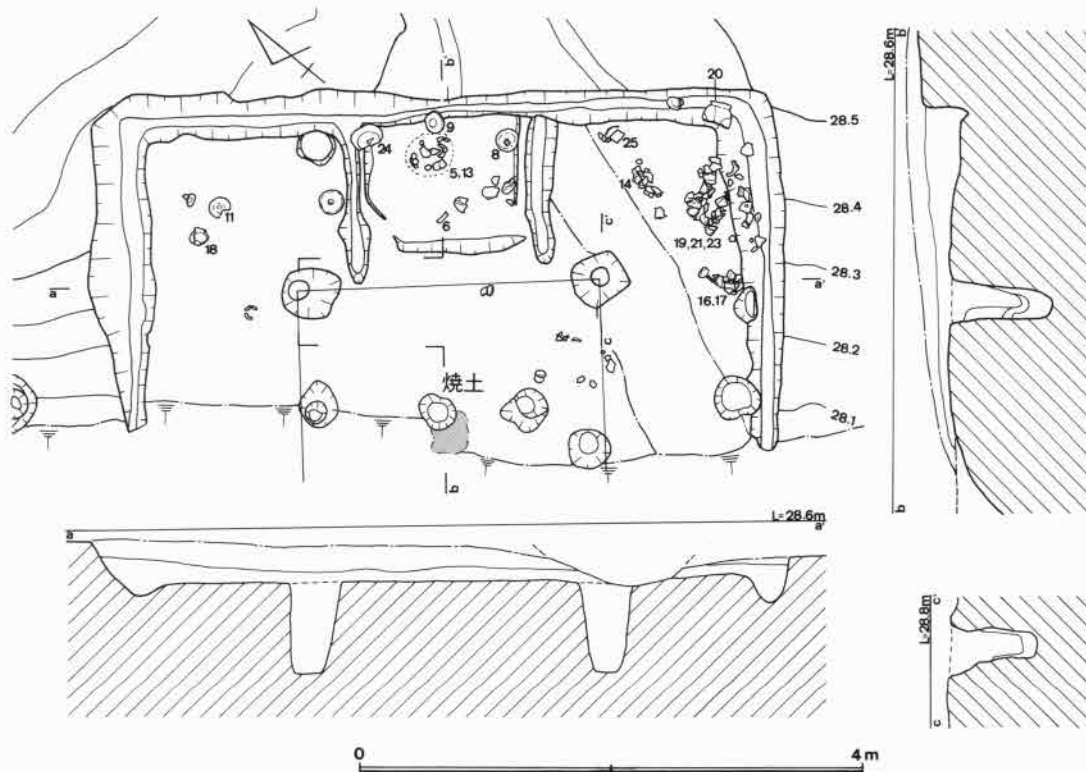
竪穴式住居跡 S H005(第16図) 北東辺5.3m・南東辺(残存長)2.8m、深さは最大0.4mを測る。コーナー部分が2か所検出されており、ほぼ直角に折れることから、平面形は方形を呈すると思われる。遺構の埋土は、大きく灰茶褐色土(上層)と黒褐色粘質土(下層)の2層に分けられる。

住居跡は半分ほどが開墾によって失われているが、完周する周壁溝、支柱穴2基、間仕切り溝2条、炉跡と思われる焼土などを検出した。このほかにも多数の柱穴を検出したが、いずれも竪穴式住居跡に伴うものではないと判断した。

支柱穴の間隔は、2.4mを測る。2条の間仕切り溝に挟まれた空間は、他の床面に比べて、わずかに深い(床面よりも約8cmほど低い)。他の部分と空間の利用方法が異なるために間仕切り溝が設けられたと考えられる。また、床面を断ち割ったが、貼り床などは確認できなかった。

なお、この住居跡は、第1次調査で検出された2号住居跡に相当すると思われる(文献3)。

S H005からは、比較的多数の土器が出土した。特に下層から出土した土器群は、住居跡が廃絶する直前に廃棄されたと考えられ、特に、東コーナー付近で甕8点(16・17・19~21・23・25)他がまとまって出土した。このうち、20は周壁溝に落ち込んだ状態で出土しており、他の土器も重なるような状況であった。間仕切り溝に囲まれた区画からは、甕1点(24)・高杯5点(5・6・8・9・13)が出土した。このほかにも甕(18)・高杯(11)などが床面からわずかに浮いた状



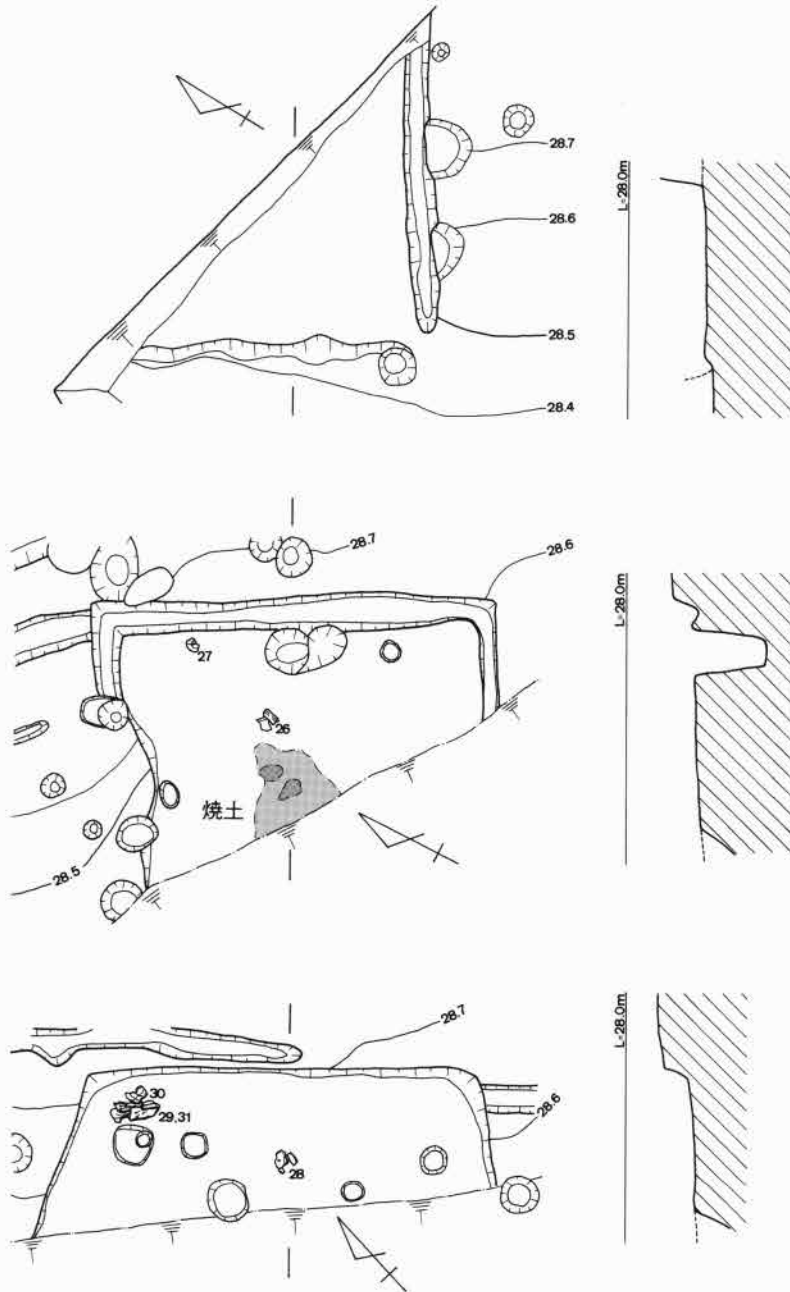
第16図 竪穴式住居跡 S H005実測図

態で出土した。上層からは、土師器片のほか、須恵器片(1~3)も出土した。また、住居内の埋土を洗浄した結果、滑石製の白玉1点と炭化米2粒を検出した。

出土遺物から古墳時代中期前半から中頃にかけての住居跡と考えられる。

**竪穴式住居跡 S H 006(第17図上)** 方形を呈すると思われる竪穴式住居跡の南コーナーを確認しただけなので、全体の規模は不明である。南東辺(検出長)2.3m・深さ約0.1mを測るが、南西側は削平されている。周壁溝を確認したが、支柱穴や炉跡(焼土)は確認されなかった。また、周壁溝から炭化米2粒が出土した。

この住居跡は、第1次調査で検出された1号住居跡の南半に当たると考えられる(文献3)。



第17図 竪穴式住居跡 S H 006・007・089実測図

埋土中から細片化した遺物が少量出土したのみである。小片のため図示するには至らなかったが、第1次調査の成果とあわせて、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

**竪穴式住居跡 S H 007(第17図中)** 北東辺3.1m・北西辺(残存長)2.2m・深さ0.1m前後を測る。S H 005同様、南西側を畑の開墾によって削り取られている。確認できた2つのコーナーが直角であることから、平面形は方形を呈すると思われる。幅20cm前後の周壁溝を有するが、北西辺の途中で途切れる。周壁もこの部分で内側に張り出すような形状を呈する。床面で柱穴を4基検出したが、支柱穴とは考えられず、もともと、支柱穴はなかったと考えられる。住居跡の中央に炉跡と思われる焼土を検出した。

床面直上から弥生土器2

点(第22図26・27)が出土したほか、埋土中から細片化した遺物が少量出土した。

出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H089(第17図下) 北東辺3.1m・北西辺(残存長)1.4m・深さ0.2m前後を測る。S H005・007同様、南西側を畑の開墾によって削り取られている。確認できた2つのコーナーが鈍角であることから、平面形が多角形である可能性も考えられるが、詳細は不明である。床面で複数の柱穴を検出したが、いずれも主柱穴とは考えられず、S H007同様、もともと、主柱穴はなかったと考えられる。また、周壁溝・炉跡も検出されなかった。

S H007同様、出土遺物は少ない。床面直上から弥生土器4点(第22図28～31)が出土した。ほかに細片化した土器片が出土している。

出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

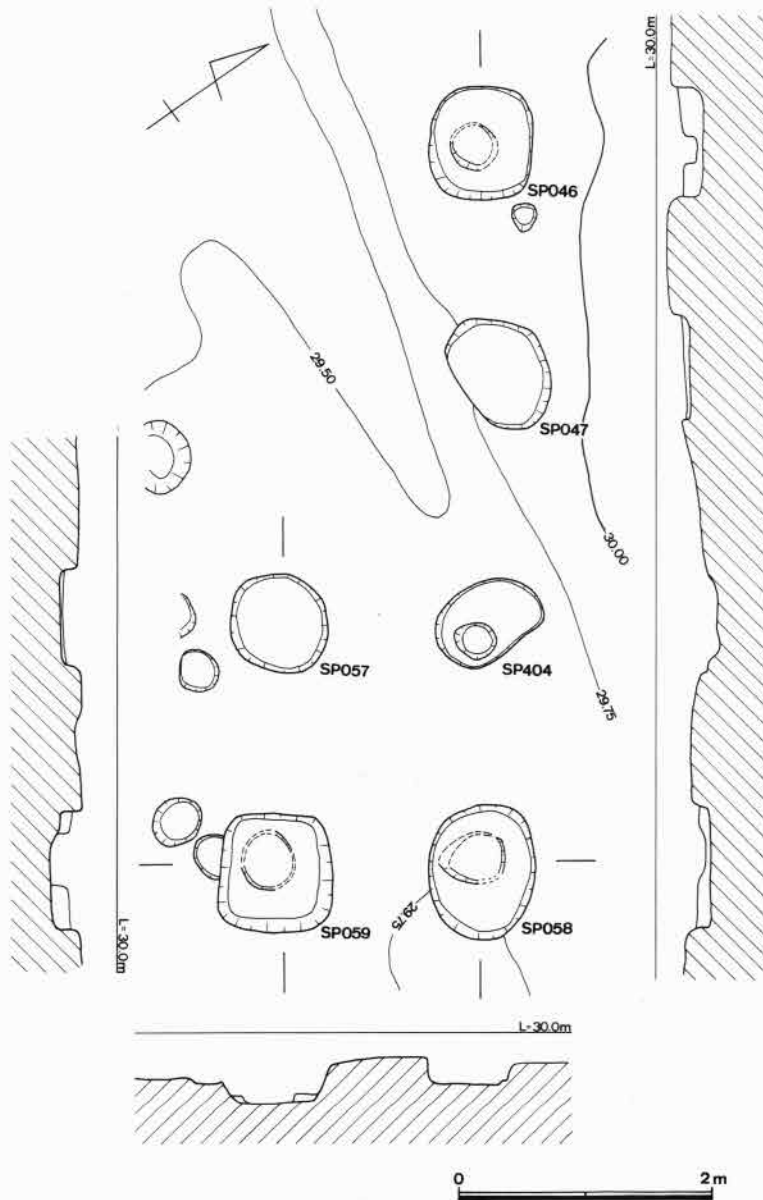
今回検出された竪穴式住居跡の概要は以上の通りであるが、このほかにも多数の溝跡を検出した。溝跡のうち、S D008・S D009・S D011・S D288などは、竪穴式住居跡の周壁溝の残欠と考えられる。また、竪穴式住居跡の周壁溝か、掘立柱建物跡に伴う排水溝が明らかでないが、S D142・S D143・S D145・S D146なども建物跡に伴う溝跡と考えられる。このうちS D143からは弥生土器2点(第22図32・33)が出土している。

本来はもっと多くの竪穴式住居跡が存在したと考えられる。

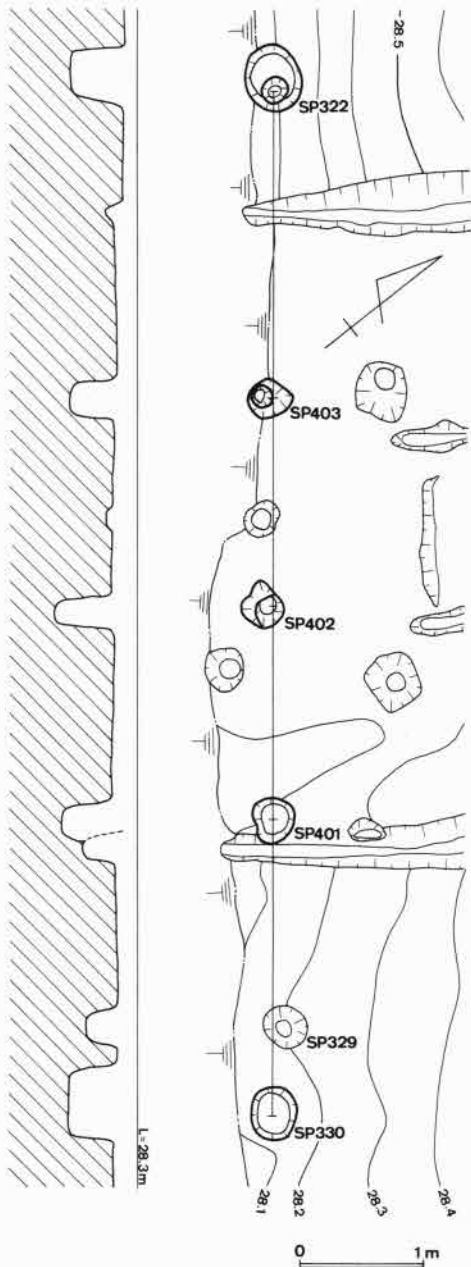
②掘立柱建物跡・柵列跡

今回の調査では、300か所以上の柱穴を検出した。この内、掘立柱建物跡として3棟、柵列跡として2列が復原できた。

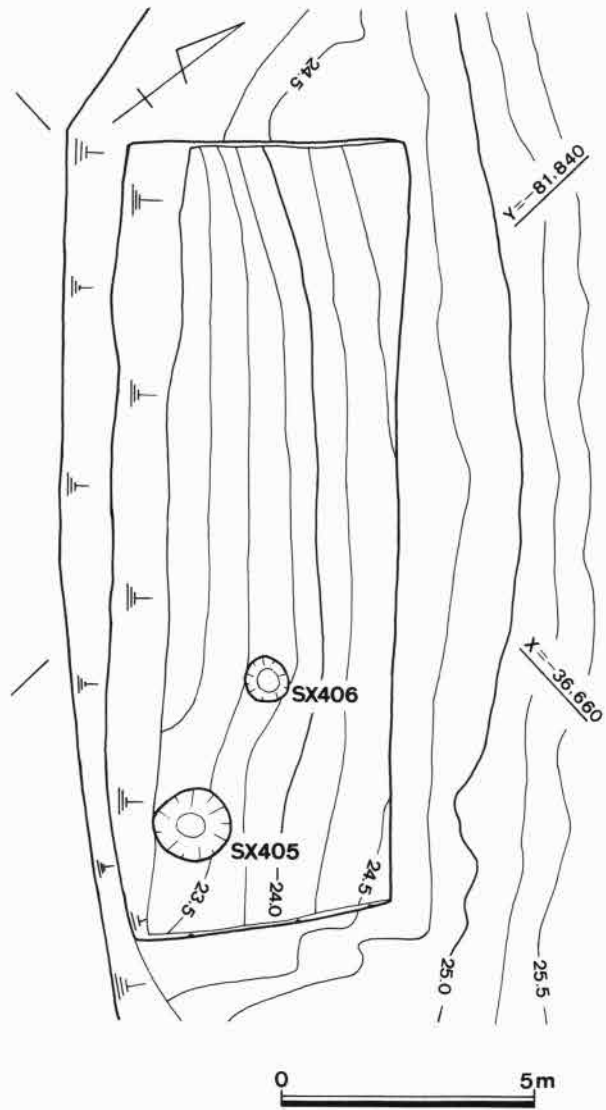
掘立柱建物跡1 2間×2間の総柱の建物跡と考えられる。南東隅の柱穴はすでに失われたらしく確認できなかった。主軸



第18図 掘立柱建物跡2実測図



第19図 柵列跡1実測図



第20図 下層遺構配置図

はN46°Wである。いずれの柱穴からも出土遺物はなく、時期は不明である。

**掘立柱建物跡2 (第18図)** 1間×3間分を確認したが、どのような建物跡であるかは、検出できた柱穴の数が少ないため、不明である。主軸は、N42°Wである。柱穴は一辺70~90cmを測る隅丸方形を呈し、直径30cm前後の柱痕を確認できたものもある。出土遺物は、少量の土器片が出土したのみで、時期は不明である。

**掘立柱建物跡3** 2間×2間以上の建物跡である。南東辺で梁間の中央の柱穴跡が検出されなかったことから2間以上の建物跡と考えられる。主軸は、N54°Wである。出土遺物はなく、時期は不明である。

**柵列跡1 (第19図)** 竪穴式住居跡S H005に重複して、直線に並ぶ柱穴跡5か所を検出した。傾斜変換点に位置することから柵列跡と考えられるが、南西側が大きく削平されていることから

掘立柱建物の柱列跡の可能性もある。主軸は、N40°Wである。柱間寸法は、柱穴SP322から南東方向へ順に2.4m・1.7m・1.7m・2.3mを測る。柱痕もSP322で確認した。出土遺物としては、SP322から弥生土器の破片(第22図35・36)が出土している。

柵列跡1は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

柵列跡2 柵列跡2は、SD145・SD146によって「L」字状に区画された内側に、溝の方向に一致して5個の柱穴が一直線に並ぶ。比較的傾斜地にあることから掘立柱建物の柱列跡の可能性も残る。主軸は、N48°Wである。柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

### ③落とし穴状遺構

調査地の南半分には埋没した谷地形が存在したため、調査終了直前に、重機を搬入して谷底と思われる地山まで掘削した。その結果、谷底で時期不明の落とし穴状遺構2基を検出した。どちらの遺構からも出土遺物はなかったが、検出状況から縄文時代の落とし穴である可能性を考えた(第20図)。

落とし穴状遺構SX405 長軸1.5m・短軸1.3m・深さ1.1mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。落とし穴の底面では柱穴状の遺構は検出されなかった。遺物は、全く出土しなかった。また、SX405の堆積層から花粉分析用の試料を採取した。

落とし穴SX406 長軸0.9m・短軸0.8m・深さ1.5mを測る。形状は、落とし穴SX405とは同じである。遺物はやはり出土していない。

### (3)出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器など、整理箱にして約18箱ある。出土遺物は、谷部の包含層出土遺物と竪穴式住居跡SH005出土遺物が大半を占める。今回の報告では、SH005をはじめとする主要遺構から出土した土器のほか、B地区包含層出土土器の一部を図示した。詳細は観察表にまとめた(附表3)。

#### 竪穴式住居跡SH005出土遺物(第21・22図1～25)

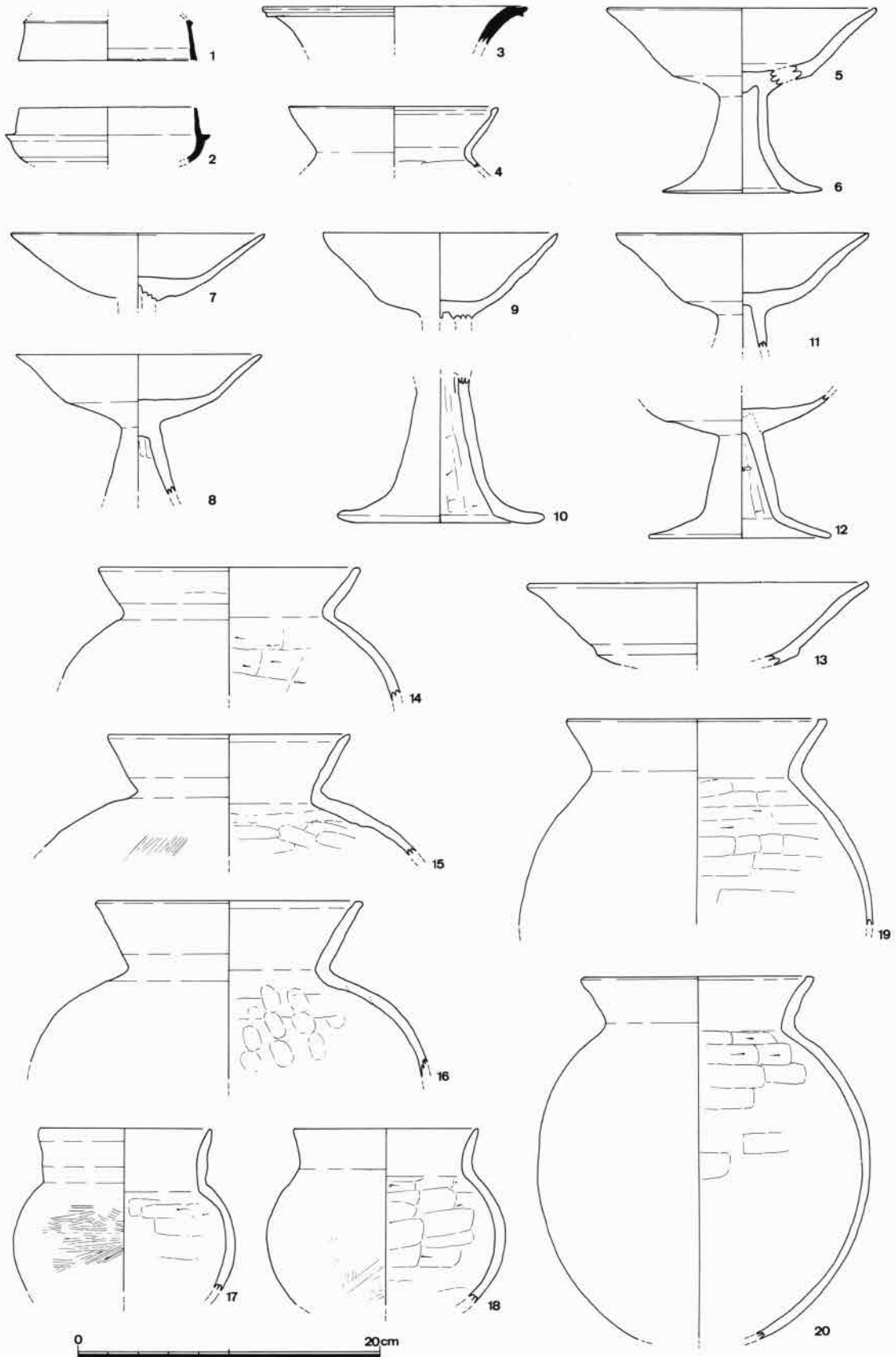
1～3は、SH005埋土上層から出土したもので、いずれも細片である。おそらく住居跡が完全に廃棄された後に流入したと思われる。蓋杯は、陶邑編年のTK208～TK23型式か。

4は、口縁端部内面が肥厚する布留式甕の小片である。埋没過程における混入と考えられる。

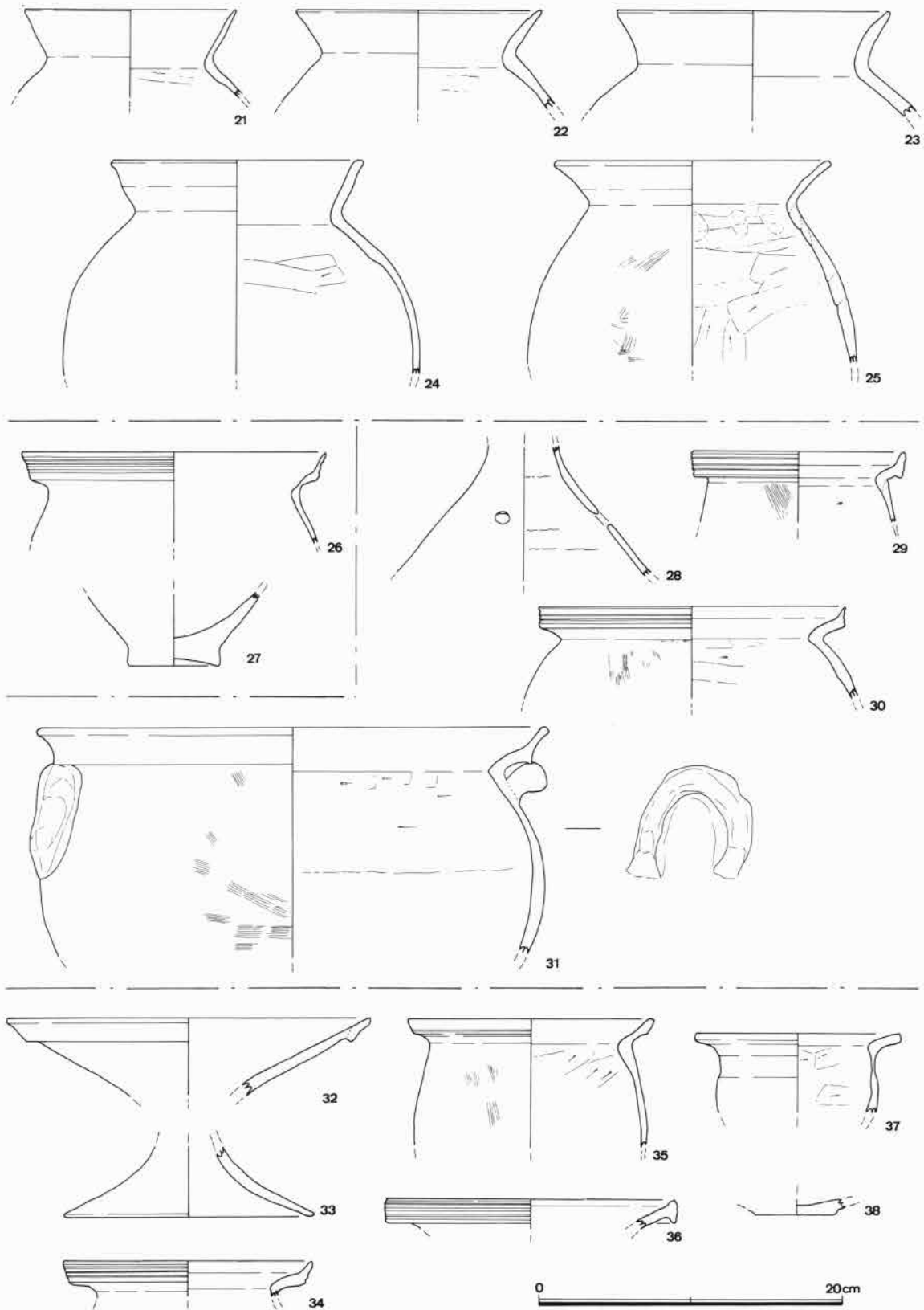
5～25は、SH005下層出土の土師器である。出土状況の項でも述べたように、比較的まとまって出土していることから、一括性が高いと考えられ、胎土や色調に共通した点を見いだすことができる。

そこで、まず、今回の調査で出土した土師器・弥生土器について胎土・色調を分類したい。胎土は、①4mm以下の石英・長石を多く含み、胎土が比較的粗なもの、②金雲母を含み、胎土が比較的精良なもの、③赤色粒が目立ち、胎土が比較的精良なもの、に分類できる。①は、SH005出土土師器において主体的な胎土で、②・③は、弥生土器に多い胎土である。

また、色調は胎土が①の場合、橙褐色系が多く、胎土が②・③の場合、黄褐色系あるいは茶褐色系が多い。以下、SH005出土土師器について見ていきたい。

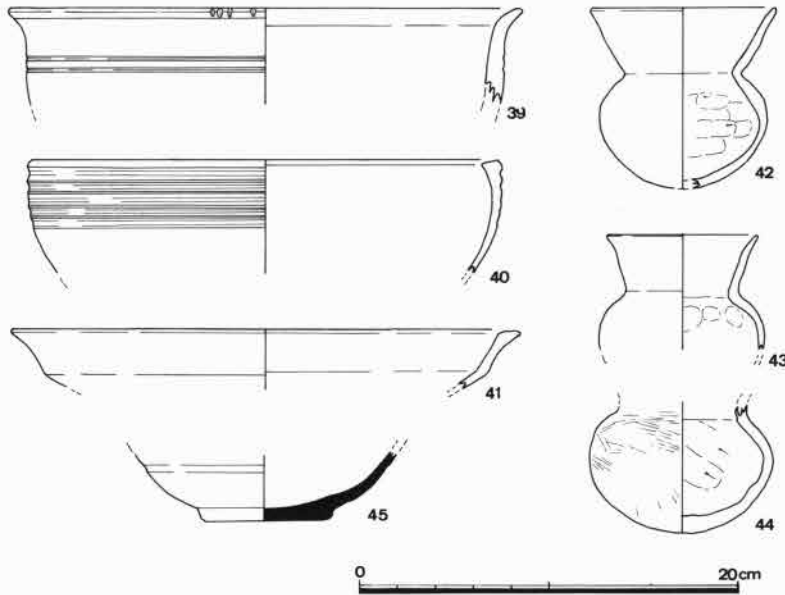


第21図 出土遺物実測図(1)



第22図 出土遺物実測図(2)





第23図 出土遺物実測図(3)

5～13は、高杯である。高杯の杯部を見ると、口縁部と杯底部の間に明瞭な段を有するのは13のみで、他の高杯ではやや丸みを帯びている。13は、小片であるが復原口径25cmを測るやや大型の高杯であるのに対して、他の高杯は口径16cm前後のやや小型の高杯である。

14～16・19～25は、甕である。図示したのは10点であるが、明らかに壺と考えられる

個体を確認できなかったので、甕とした一群の中に壺が含まれる可能性もある。甕は、口縁部の形状から、口縁端部の内面に強いナデを施し、端面を作り、その結果、口縁端部内面が肥厚しているように見える口縁形態A、外反する口縁部に端部を丸くおさめる口縁形態B、直立気味の口縁部で、端部を丸くおさめる口縁形態C、の3つに分類できる。

14・16・19・20・24・25は、口縁形態Aの甕である。ただし24・25は、口縁部内面の肥厚気味な様子は確認できない。各個体とも、胎土は①、色調は橙褐色系である。遺存状況の良好な個体が多い。S H005において主体的な存在と考えられる。15・21・22・23は、口縁形態Bの甕である。小型の破片が多く、S H005では、主体的な存在ではないと思われる。17・18は、ほぼ同形同大の小型の甕である。口縁形態Cで、球形の体部を有する。体部中位以下に煤が付着する。

竪穴式住居跡 S H007出土遺物(第22図26・27)

26は、口縁部が複合口縁状を呈し、口縁部外面に擬凹線文を有する甕である。丹後地域に弥生時代後期に通有な土器である。27は、鉢の底部かと思われる破片である。26・27の胎土は、比較的精良で、1mm以上の砂粒はほとんど含まない。

竪穴式住居跡 S H089出土遺物(第22図28～31)

28は、器台もしくは高杯の脚部の破片で、穿孔が認められる。29・30は甕である。26と同様の特徴を有する丹後地域通有の後期弥生土器である。31は、把手付鉢である。部分的な破片であるため全体の形状をうかがうことはできないが、同様の器形が峰山町古殿遺跡<sup>(注7)</sup>で出土している。

その他の遺構の出土遺物(第22図32～38)

32・33は、S D143から出土した弥生土器の破片である。35・36は、柵列跡1を構成する柱穴 S P 322から出土した弥生土器である。34・37・38は、柱穴跡から出土したものである。34は、柵列跡1の近くの柱穴跡 S P 329から出土した後期弥生土器の甕の破片である。37は、柱穴跡 S P 212から出土した小型の甕か壺と思われる破片である。38は、柱穴跡 S P 345から出土した黒色

土器の底部の破片である。

**B地区包含層出土遺物(第23図39～45)**

39は、弥生時代前期の甕である。40は、弥生時代中期の鉢である。この2点以外に弥生時代中期以前の土器は確認できなかった。41は高杯の破片である。42～44は、小型丸底土器である。以上の土器は、いずれも第4層出土である。45は、第3層出土の須恵器椀である。糸切り底と思われる、平安時代と考えられる。

**6. ま と め**

今回の調査成果については、以上に報告したとおりである。今回の調査成果は、隣接する第1・2次調査の成果にほぼ一致する。これに対して、第4・7・8次調査で検出された弥生時代中期の玉作り作業に関連する遺構・遺物は皆無であった。奈具岡遺跡は、9次にわたる調査によって、弥生時代中期の玉作り遺跡であるとともに弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落遺跡であることが明らかになった。

以下では、これまでに行われた奈具・奈具岡遺跡群の発掘調査の成果に、今回の調査成果を加えて奈具・奈具岡遺跡群の変遷について概観し、まとめとしたい。

まず、弥生時代中期の奈具・奈具岡遺跡群を概観すると、玉作り関連の遺構・遺物は、奈具岡遺跡第4・7・8次調査で確認されており、弥生時代中期中頃から後半に位置づけられる。奈具岡遺跡の周辺にも、トチの実の水さらし場などが確認された奈具谷遺跡や、弥生時代中期の竪穴式住居跡が確認された奈具遺跡、あるいは同じく弥生時代中期の墳墓が確認された奈具墳墓群などがある。



第24図 奈具・奈具岡遺跡群の変遷(1/10,000)

さらに、奈具岡遺跡の所在する丘陵先端でも弥生時代後期初頭と考えられる貼り石墓が検出されている。

弥生時代中期の奈具・奈具岡遺跡群では、奈具谷を挟む南北の丘陵上に多数の遺構が分布しており、丹後地域の弥生時代中期の拠点集落の一つであったと考えられる(注8)(第14図)。

これに対して、弥生時代後期以降の遺構は、今回の奈具岡遺跡第9次調査地をはじめ、同第1～3次調査地や奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群などのように、弥生時代中期の奈具谷を中

心とした遺跡群の広がり比べると、明らかに南西へ移動している。しかも、玉作り作業を行っていた痕跡は、いずれの遺跡でも確認されず、弥生時代後期以降、奈具・奈具岡遺跡群では玉作り作業が行われていなかったと考えられる。また、遺構の密度も弥生時代中期の遺構群が短期間に集中して営まれたのに対して、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構群は、散発的で断続的に集落が形成されたようである。弥生時代後期以降の奈具・奈具岡遺跡群では、弥生時代中期に見られた拠点的な性格は失われたと考えられる。

以上のことから、弥生時代中期と後期を境に、奈具岡遺跡における玉作り作業が廃絶し、奈具谷の南北の丘陵上に広がっていた居住域が、南西側の竹野川に近い丘陵上に移動するとともに、周辺の丘陵上には、奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群など、小規模な古墳を主体とする古墳群が形成されることが考えられる。

集落の廃絶時期については、奈具岡遺跡第2・9次調査とともに、竪穴式住居跡から須恵器が出土していないことが参考になる。つまり、奈具岡遺跡では、丹後地域に須恵器が定着する以前に集落としての営みは終わっていると考えられる<sup>(注9)</sup>。奈具・奈具岡遺跡群では、奈具岡遺跡を除くと、弥生時代後期以降の顕著な遺構は墳墓・古墳に限られるため、奈具岡遺跡における集落の廃絶が奈具・奈具岡遺跡群における集落の終焉と見ることができると考えられる。

(筒井崇史)

注1 奥村牧弘・榎本順子・森川敦子・丸谷はま子・石井 清・石井節子・石嶋文恵・岩佐正一・大江田洋子・尾崎二三代・平林直美・平林秀夫・藤原多津子・藤原敏子・松村 仁・村上五月・森野努・森野美智代・吉岡つや子

注2 奈具谷・奈具丘陵・奈具岡丘陵の名称は、本概要報告において便宜的につけたもので、一般的に使用されている名称ではない。

注3 以下の歴史的環境では参考文献を割愛する。

注4 文献22で使用されている名称である。

注5 正式な報告は行われておらず、文献1に概要が記載されている。

注6 遺構番号の前に遺構の性格を示す略号をつけた。遺構の略号は、竪穴式住居跡：SH、溝跡：SD、土坑：SK、柱穴：SPである。なお、掘立柱建物跡としてよく利用されるSBは今回使用していない。遺構を検出している段階では建物跡との認定が難しかったためである。

注7 戸原和人ほか『古殿遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第9冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1993

注8 弥生時代中期の奈具岡遺跡やその周辺の遺跡については、すでに河野一隆によってまとめられている（文献24 73～75頁）。

注9 丹後地域における須恵器の研究から言えば、陶邑編年のTK208型式以前と考えられる。

#### 奈具・奈具岡遺跡群関連文献

文献1 釋 龍雄ほか『奈具遺跡発掘調査報告書』（『京都府弥栄町文化財調査報告』第1集 弥栄町教育委員会）1972

- 文献2 長谷川達ほか「奈具遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』 京都府教育委員会) 1980
- 文献3 杉原和雄ほか「いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第3集 弥栄町教育委員会) 1982
- 文献4 川西宏幸ほか「京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書」(財)古代学協会 1985
- 文献5 山田邦和「近畿地方北部の古式須恵器—奈具岡遺跡出土須恵器の検討を通じて—」(『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』 (財)古代学協会) 1985
- 文献6 奥村清一郎ほか「奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第4集 弥栄町教育委員会) 1986
- 文献7 岡崎研一「13. 奈具・奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第43号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 文献8 田代 弘「13. 奈具岡遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 文献9 田代 弘ほか「(1)奈具岡遺跡(第4次)」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 文献10 田代 弘「2. 奈具岡遺跡第5次調査地点試掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第59冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 文献11 田代 弘「(4)奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 文献12 柴 暁彦「2. 奈具岡遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 文献13 河野一隆「13. 奈具墳墓群・奈具古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第55号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 文献14 河野一隆「2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 文献15 河野一隆「3. 奈具岡南古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 文献16 柴 暁彦「13. 奈具谷遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第59号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 文献17 増田孝彦「(5)奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 文献18 田代 弘「弥栄町奈具谷遺跡の水さらし場状遺構」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 文献19 増田孝彦「奈具岡北古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第60号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 文献20 河野一隆ほか「2. 奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 文献21 竹原一彦「11. 奈具岡南古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第63号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 文献22 横島勝則ほか「奈具岡南1号墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第6集 弥栄

付表2 奈具・奈具岡遺跡群調査一覧表

遺跡名称	次数	調査期間	報告書	備考
奈具遺跡	第1次			文献1に概要のみ報告
	第2次	1971.11.5.～11.28.	文献1	
	第3次	1979.5.21.～6.30.	文献2	
奈具墳墓群		1994.5.13.～10.13.	文献14	奈具古墳群と同時に調査
奈具古墳群		1994.5.13.～10.13.	文献14	奈具墳墓群と同時に調査
奈具岡遺跡	第1次	1981.8.17.～9.7.	文献3	奈具岡古墳群と同時に調査 奈具岡西古墳と同時に調査 奈具谷古墳群と同時に調査 奈具谷遺跡第3次調査と同時に実施 奈具谷遺跡第4次調査と同時に調査 奈具岡北古墳群と同時に調査 奈具岡北古墳群と同時に調査 今回報告
	第2次	1984.4.16.～6.20.	文献4	
	第3次	1985.8.1.～9.14.	文献6	
	第4次	1992.6.25.～10.22	文献9	
	第5次	1993.12.1.～1994.1.21.	文献10	
	第6次	1994.5.30.～1995.2.16.	文献12	
	第7次	1995.4.11.～1996.2.28.	文献24	
	第8次	1996.4.12.～7.10.	文献24	
	第9次	1998.8.18.～11.13.	本書	
奈具岡古墳群		1981.8.17.～9.7.	文献3	奈具岡遺跡第1次調査と同時に調査
奈具岡西古墳		1984.4.16.～6.20.	文献4	奈具岡遺跡第2次調査と同時に調査
奈具岡南古墳群	第1次	1994.9.9.～12.22.	文献15	
	第2次	1996.4.11.～1997.1.30.	文献28	
	第3次	1996.9.4.～11.22	文献22	
奈具岡北古墳群	第1次	1995.4.11.～1996.2.28.	文献24	奈具岡遺跡第7次調査と同時に実施 奈具岡遺跡第8次調査と同時に実施
	第2次	1996.4.12.～7.10.	文献24	
奈具谷古墳群		1985.8.1.～9.14.	文献6	奈具岡遺跡第3次調査と同時に調査
奈具谷遺跡	第1次	1991.7.1.～7.17.	文献9	奈具岡遺跡第5次調査と同時に調査 奈具岡遺跡第6次調査と同時に調査
	第2次	1993.12.1.～1994.1.21.	文献11	
	第3次	1994.5.30.～1995.2.16.	文献10	
	第4次	1994.5.30.～1995.2.16.	文献12	
	第5次	1995.5.17.～11.10.	文献23	

町教育委員会) 1997

文献23 柴 暁彦「(1)奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

文献24 河野一隆ほか「(2)奈具岡遺跡(第7・8次)」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

文献25 竹原一彦「(3)奈具岡遺跡(試掘調査)」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

文献26 河野一隆「(4)奈具岡北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

文献27 河野一隆「奈具の弥生人」(『古代文化』第49巻第4号 (財)古代学協会) 1997

文献28 竹原一彦ほか「(1)奈具岡南古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第79冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

上記文献一覧の作成は、弥栄町教育委員会編『京都府 弥栄町遺跡地図』(1998)を参照した。

付表3 奈良岡遺跡出土遺物観察表  
 (\*口径は復原口径・器高は残存高を示す、())を付したものは底径、単位cm)

番号	種別	器種	出土位置	法量		技法上の特徴	色調	胎土	焼成	備考
				口径	器高					
1	須恵器	杯蓋	S H005(上)	11.8*	2.8*	口縁部内外面-ロクロナデ	青灰色	良好	堅致	小片
2	〃	杯身	〃	11.7*	3.3*	口縁部内外面-ロクロナデ、底部-回転ヘラケズリ	青灰色	良好	〃	小片
3	〃	壺	〃	17.4*	2.7*	内外面ともロクロナデ	暗灰青色 /暗灰色	良好	〃	小片
4	土師器	甕	S H005	13.7*	4.2*	内外面-ナデ	淡黄褐色	やや粗	良好	
5	〃	高杯杯部	〃	18.0*	4.7*	内外面とも摩滅のため調整不明	橙褐色	1	〃	
6	〃	高杯脚部	〃	(7.5*)	8.2*	内外面とも摩滅のため調整不明、脚柱部内面-ケズリか	橙褐色	1	〃	
7	〃	高杯杯部	〃	16.8	4.3*	内外面とも摩滅のため調整不明	黄褐色	1	〃	
8	〃	高杯	〃	16.0	9.3*	内外面とも摩滅のため調整不明	橙褐色	1	〃	
9	〃	高杯杯部	〃	15.6	5.5*	内外面とも摩滅のため調整不明(外面に一部ハケらしき痕跡あり)	暗橙褐色	1	〃	
10	〃	高杯脚部	〃	(11.5)	9.8*	内外面とも摩滅のため調整不明、脚柱部内面-ケズリか	淡橙褐色	やや粗	〃	
11	〃	高杯	〃	16.8	7.5*	内外面とも摩滅のため調整不明	橙褐色	1	良好	
12	〃	〃	〃	(12.0*)	9.4*	内外面とも摩滅のため調整不明、脚柱部内面-ケズリ	橙褐色	1	良好	
13	〃	高杯杯部	〃	25.0*	5.6*	内外面とも摩滅のため調整不明(外面に一部ミガキらしき痕跡あり)	明橙色	1	良好	小片
14	〃	甕	〃	17.1*	8.9*	外面・口縁内面-ナデ、体部内面-ケズリ	茶褐色	1	良好	
15	〃	〃	〃	15.9*	7.9*	体部外面-ハケ、口縁内外面-ナデ、体部内面-ケズリ	淡黄灰色	2	良好	口縁部にスス
16	〃	〃	〃	17.4*	11.5*	外面・口縁部内面-ナデ、内面-ケズリか	橙褐色/ 黒褐色	1	良好	
17	〃	小型甕	〃	11.3	10.8*	体部外面-ハケ、口縁内外面-ナデ、体部内面-ケズリ	橙褐色	1	良好	体部にスス
18	〃	〃	〃	12.1*	11.7*	外面・口縁内面-ナデ、内面-ケズリか	明橙褐色/ 淡褐色	1か	良好	体部にスス
19	〃	甕	〃	17.0	13.5*	外面・口縁内面-ナデ、体部内面-ケズリ	暗橙褐色	1	良好	
20	〃	〃	〃	14.8	24.1*	外面・口縁内部-ナデ、内面-ケズリ	橙茶色	1	良好	
21	〃	〃	〃	13.9*	5.8*	外面・口縁内面-ナデ、体部内面-ケズリか	淡黄褐色	良好	良好	
22	〃	〃	〃	16.1*	7.5*	外面・口縁部内面-ナデ、体部内面-ケズリか	淡黄褐色	1	良好	
23	〃	〃	〃	18.0*	6.9*	外面・口縁内面-ナデ、体部内面-ケズリか	明黄茶色	やや粗	良好	

24	〃	〃	〃	16.4	13.9*	外面・口縁部内面一ナデ、内面一ケズリ	橙褐色	1	良好	口縁部にスス
25	〃	〃	〃	18.0*	13.1*	体部外面ハケ、口縁内外面ナデ、体部内面一ケズリ	橙褐色／茶褐色	1	良好	体部にスス
26	弥生土器	〃	S H007	20.0*	5.9*	体部外面一摩滅のため調整不明、体部内面一ケズリか	暗黄灰色／淡茶色	2	良好	
27	〃	鉢底部	〃	(6.0*)	4.9*	内外面とも摩滅のため調整不明	淡黄褐色	やや粗	良好	
28	〃	器台脚部	S H089	—	8.5*	内外面とも摩滅のため調整不明	淡黄褐色	2	良好	
29	〃	甕	〃	13.9*	4.5*	体部外面一ハケ、体部内面一ケズリ	淡橙褐色	3	良好	口縁部にスス
30	〃	〃	〃	20.2*	6.0*	体部外面一タテハケ、体部内面一ケズリか	淡茶褐色	2	良好	口縁部にスス
31	〃	把手付鉢	〃	33.4*	14.9*	体部外面一ハケ後ナデ、口縁部内外面一ナデ、体部内面一ケズリ	淡茶褐色	1か	良好	
32	〃	器台杯部	S D143	24.0*	5.2*	内外面とも摩滅のため調整不明	灰黄色	やや粗	良好	
33	〃	器台脚部	〃	(16.4*)	4.6*	内外面ともナデか	灰黄色	良好	良好	
34	〃	甕	S P329	16.4*	2.4*	内外面とも摩滅のため調整不明	黄橙色	やや粗	良好	小片
35	〃	〃	〃	16.0*	8.5*	体部内面一ハケ、体部内面一ケズリ	茶黄色	やや粗	良好	
36	〃	器台	〃	18.8*	2.0*	内外面ともナデか	淡黄褐色	良好	良好	小片
37	土師器	甕	S P212	13.4*	5.3*	外面・口縁内面一ナデか、体部内面一ケズリ	茶黄色	やや粗	良好	
38	黒色土器	椀	S P345	(5.4*)	1.1*	底部一糸切りか	淡黄茶色／淡黒色	やや粗	良好	
39	弥生土器	甕	B地区(4層)	26.9*	5.0*	内外面ともナデか、口縁端部に刻み目あり	灰白色	やや粗	良好	小片
40	〃	鉢	〃	24.6*	6.0*	内外面ともナデか	乳白色	やや粗	良好	小片
41	〃	高杯杯部	B地区(4層)	26.6*	3.0*	内外面とも摩滅のため調整不明		良好	良好	小片
42	土師器	小型丸底	B地区(4層)	9.7*	9.5*	外面・口縁内面一ナデ、体部内面一ケズリ	淡黄褐色	1か	良好	
43	〃	〃	B地区(4層)	8.0*	6.1*	体部外面一ハケ、口縁内外面一ナデ、体部内面一ケズリ後ナデか	淡橙色	やや粗	良好	
44	〃	〃	B地区(4層)	—	—	体部外面下半一ハケ後ナデ、体部上半一ハケ、体部内面一ケズリ	淡橙褐色	やや粗	良好	
45	須恵器	椀	B地区(3層)	(6.2*)	3.7*	内外面ともロクロナデか、底部一糸切りか	灰白色	やや粗	やや軟	

胎土の番号は、本文に一致

### 3. 川向古墳群発掘調査概要

#### 1. はじめに

川向古墳群は、舞鶴市志高川向に所在する。今回の調査は、府道舞鶴福知山線の拡幅工事に伴い、京都府土木建築部の依頼によって昨年度と今年度の2次にわたって調査を実施した。発掘調査は平成9年度が平成9年12月3日～平成10年2月26日で、平成10年度が平成10年4月28日～平成10年7月22日である。なお昨年度調査を実施した第1次調査では、4号墳を調査し、今回の第2次調査では、2号墳と3号墳を調査した。調査面積は併せて1,400m<sup>2</sup>である。調査は、平成9年度が調査第2課第1係長伊野近富、同主査調査員石尾政信・同調査員河野一隆が、平成10年度が、調査第2課課長補佐兼第1係長水谷壽克、同調査員河野一隆・福島孝行が担当して実施した。調査に係る経費は、全額京都府土木建築部が負担された。調査は人力で表土掘削、精査、遺構掘削を行い、調査後の地形測量を空撮図化で行った。調査に当たっては、地元の川向・志高地区を始め、多くの方々に作業員として、ご協力いただいた。また平成9年2月25日には関係者説明会を、平成10年7月15日には現地説明会を行い、地元を中心に多数の方々が参加された。

#### 2. 位置と環境

**地理的環境** 川向古墳群は、由良谷を東流してきた由良川が北東に流れを変える屈曲部の右岸に位置し、標高約30m、由良川の水面からの比高差約20mの丘陵上に立地する。この地点の下流で久田美川と合流し、久田美集落の所在する谷地形が東南に続く。

**歴史的環境** 由良川中下流域では、縄文時代の遺物が由良川の河川改修に伴って発見されているほか、いくつかの遺跡の調査で遺構・遺物が検出されている。由良川の自然堤防上に立地し、川向古墳群の対岸に位置する志高遺跡では、縄文時代早期末～前期末、後期の縄文土器などの遺物と、炉跡が検出されている。志高遺跡よりやや上流の桑飼下遺跡では、縄文時代後期の集落跡が検出されている。

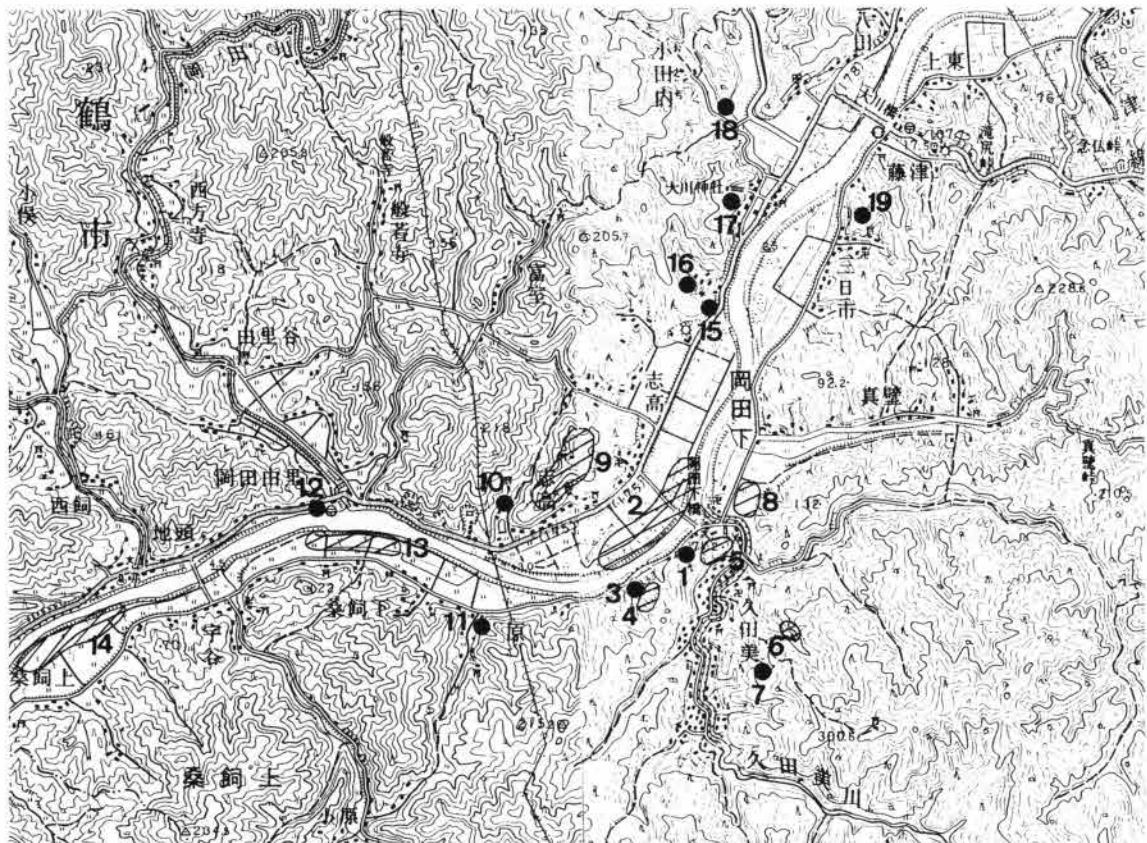
弥生時代に入ると志高遺跡・桑飼上遺跡を中心として展開する。志高遺跡では、カキ安地区において、弥生時代前期新段階と見られる柱穴群が検出されており、この地域への弥生文化の到来を示している。中期前葉の集落の様子は不明だが、中期中葉・後葉には、居住域を転々と移しながら居住域と墓域とを造営し続けている。後期に入ると更に居住域を移し、墓域は丘陵上(シゲツ墳墓群)に移る。志高遺跡の調査報告の段階では、川向古墳群は後期前葉の志高遺跡の墓域(シゲツ東墳墓群=墓域4)になると予想されていたが、後述するように、川向古墳群は、弥生時代終末から古墳時代前期中葉にかけての遺跡であることが明らかとなった。後期後葉には新たな居住域が営まれるが、洪水によってすぐに廃絶する。弥生時代後期末には遺構はほとんどなくなり、



遺物によってかろうじてその存続を知りうる程度である。桑飼上遺跡もまた自然堤防上の遺跡であるが、中期中葉から集落が出現する。竪穴式住居を中心に方形周溝墓を若干交えながら展開し、奈良時代まで継続する集落遺跡である。水無月山遺跡は、志高遺跡と桑飼上遺跡の中間地点にある由良川左岸の丘陵上に立地する墳墓遺跡である。ここでは、後期前半の区画溝を持たない土墳墓群が検出されている。

古墳時代前期に入ると、志高遺跡では土坑などが検出されており、桑飼上遺跡では竪穴式住居跡が検出されている。しかし、両遺跡の周辺で、前期古墳では前方後円墳、円墳、方墳のいずれも検出されていなかった。今回の調査でこの墳墓遺跡の空白の時期を埋める成果が得られた。また、志高遺跡の対岸にあるということも重要である。古墳時代中期は、志高・桑飼上両遺跡とも衰退し、調査された中期古墳も無い。古墳時代後期では、桑飼上遺跡で竪穴式住居が再び営まれ、後背の丘陵上に上村古墳群が造営される。しかし、志高遺跡は少量の遺物を出土するのみで、衰退したままである。

飛鳥・奈良時代にはシゲツ窯跡で飛鳥時代の須恵器窯が検出され、桑飼上遺跡では奈良時代の規格性の高い掘立柱建物群が検出されている。



第25図 調査地および周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |           |           |           |           |            |            |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 川向古墳群  | 2. 志高遺跡   | 3. シゲツ窯跡  | 4. シゲツ墳墓群 | 5. 久田美城跡   | 6. 寺谷廃寺跡   |
| 7. 医王寺跡   | 8. 久田美遺跡  | 9. 志高城跡   | 10. 薬師谷古墳 | 11. 小原中世墓  | 12. 水無月山遺跡 |
| 13. 桑飼下遺跡 | 14. 桑飼上遺跡 | 15. 小津田経塚 | 16. 小津田古墳 | 17. 微光山古墳群 | 18. フジ古墳   |
| 19. 由里下古墳 |           |           |           |            |            |

平安時代末以降では、志高遺跡検出の龍泉窯青磁碗を副葬した中世墓、林溪寺裏山中世墓、医王寺跡の宝篋印塔などや、真下源五兵衛が城主の久田美城跡などの中世山城が散在する。

### 3. 調査の概要

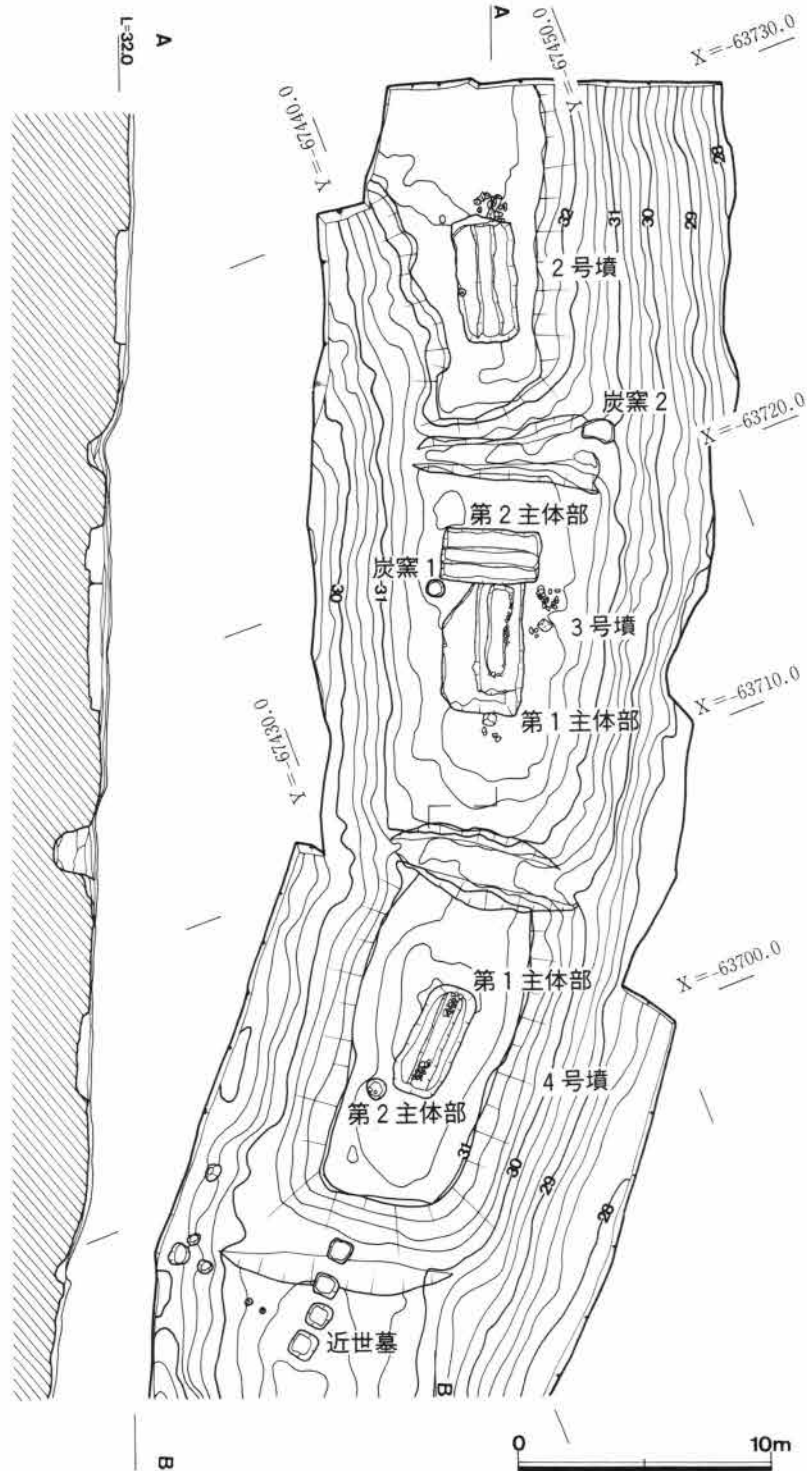
今回の調査は、前述したとおり府道の拡幅工事に伴うもので、工事によって消失する丘陵上に古墳主軸に沿ってトレンチを設定し、調査を実施した。以下に調査概要を述べていく。

#### (1) 2号墳

**墳丘** 2号墳は長辺約8.5m・短辺約7mの平面形が台形を呈する方墳で、高さは約1.2mを測る。2号墳の丘陵上部側は、地山が若干高くなっており、岩盤が露出している。その後背部には区画溝が認められないため、地山をカットした墳丘上平坦面の南西端までを墳丘と考えた。墳丘上平坦面は南北の長軸で7.5m・北側短軸3.7m・南側短軸7.9mの台形である。

墳丘の東西両側面には目立った成形は認められず、墳丘上部平坦面より下部については自然地形を利用していると考えられる。このため、側面についての墳丘裾は存在しない。墳丘上に堆積している土は上から茶褐色腐植土の表土、暗黄褐色粘質土、淡橙褐色粘質土である。この内、墳丘上平坦面南西隅の暗黄褐色粘質土から弥生後期の壺または鉢の底部が出土している。

墳丘の北東側、3号墳と



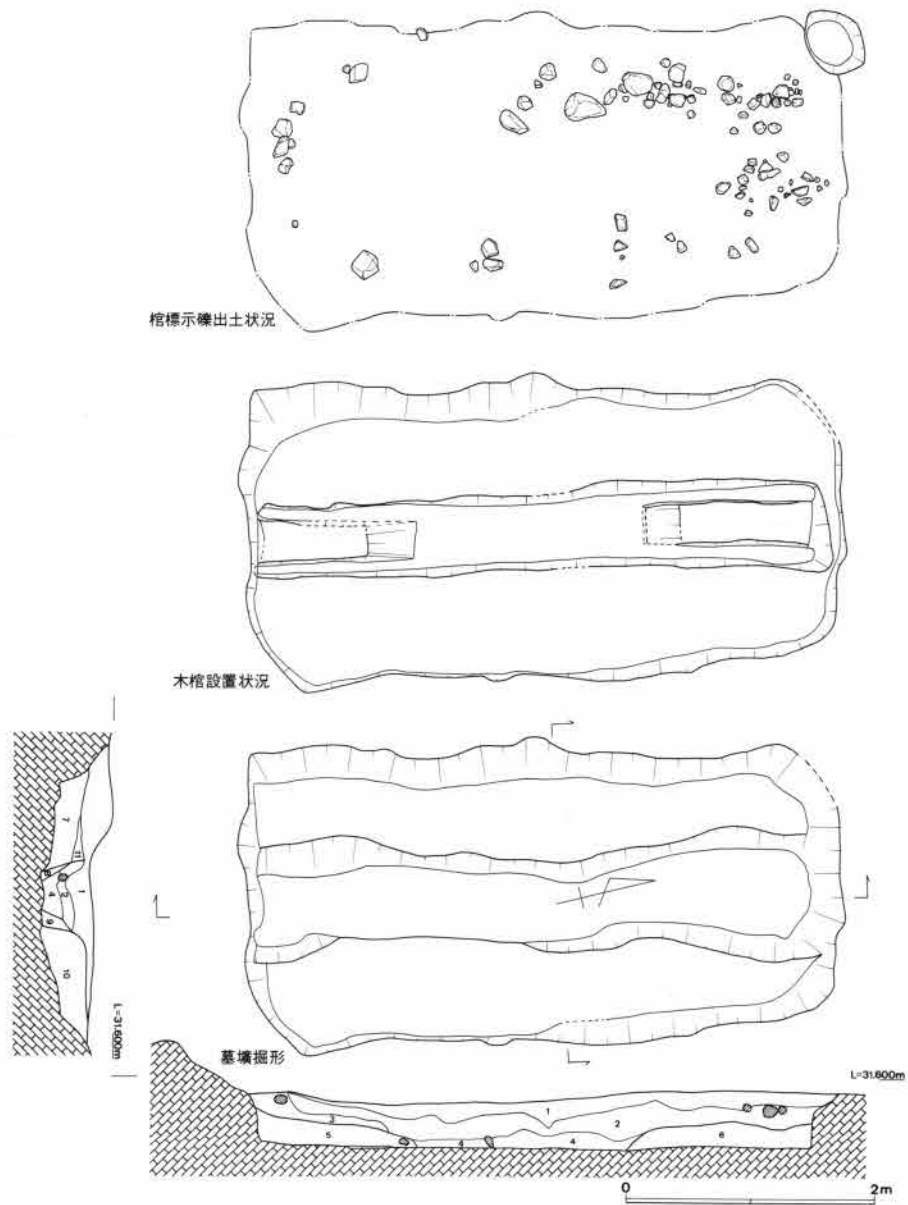
第26図 2～4号墳調査区平面・断面図(1/300)

の間には区画溝が掘削されている。上端での幅1.8m・深さ0.9m。この溝の床面に後述する炭窯2を検出した。埋土は上から順に茶褐色腐植土の表土、暗黄褐色土の流土、濁黄褐色土の3号墳からの流土、暗茶褐色土の2号墳からの流土、黄灰色粘質土が堆積している。この内、最下層の黄灰色粘土からは土師器片が少量出土したが、細片であり図化できるものはない。

**主体部** 2号墳の主体部は墳丘上平坦面中央部に組合式箱形木棺を直葬している。墓壙は、長さ4.8m・幅2.3mであり、一段墓壙の中央を約5cm掘りくぼめて木棺を据え、木棺の両脇に木棺を支えるための裏込め土を入れている。木棺の小口は墓壙の小口部にほぼ接しており、木棺の規模は長さ4.4m、幅は0.6mを測る。棺内には裏込め土の内側に沿って非常に柔らかく、黄褐色のシルト層が見られ

た。この土は小口側には見られず、また、この土に挟まれた部分の北寄り、南寄りの40cmほどが強く突き固めてあり、木棺の形状は土色の变化と、埋土の硬軟の差から、「H」形であると考えられる。「H」形とした場合、小口板の間隔は2.2mとなる。また木棺の小口板に接する部分には礫を埋め込んであって、組合式木棺の小口板が倒れないよう工夫されている。側板の小口部が墓壙に接する部分は溝状に掘りくぼめられ、側板が入るよ

うに、また、倒れ



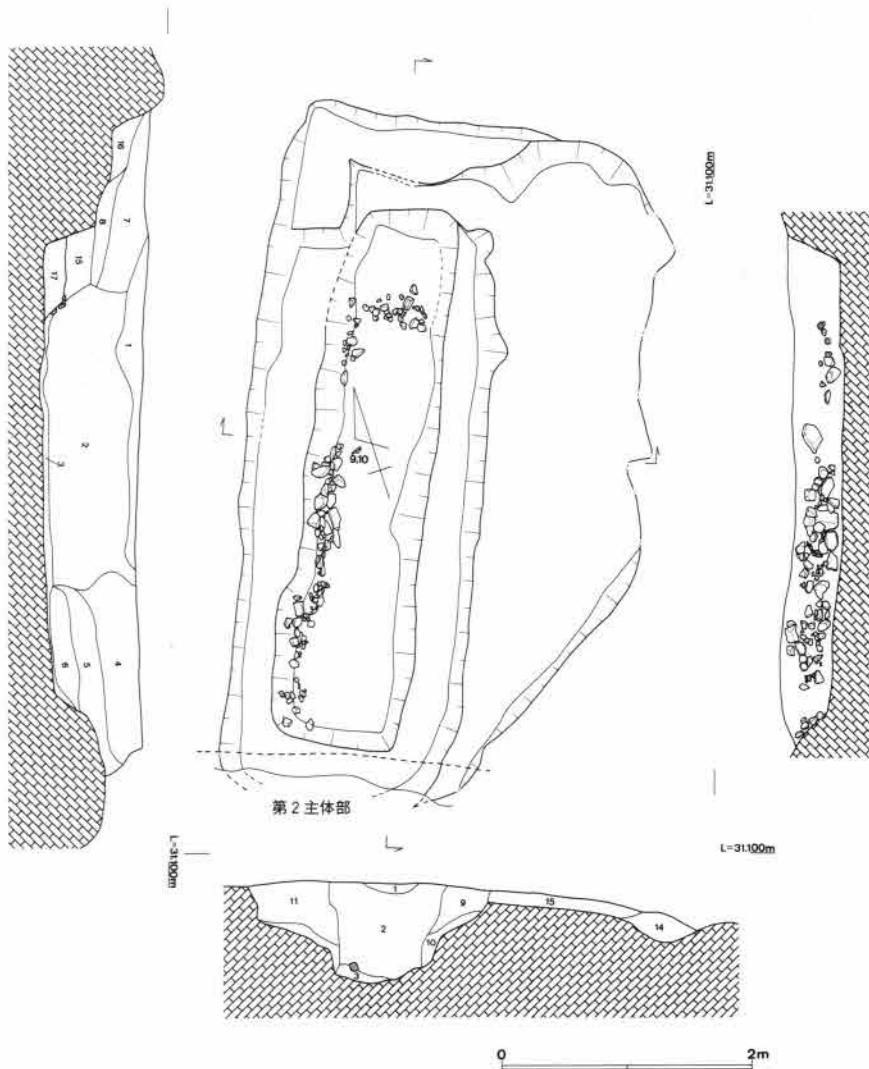
第27図 2号墳主体部実測図

- 1. 黄褐色シルト 2. 暗黄褐色シルト 3. 黄褐色シルト 4. 黄褐色砂混じりシルト
- 5. 黄褐色粘質シルト 6. 黄褐色砂混じりシルト 7. 黄褐色粘質シルト
- 8. 暗黄褐色シルト 9. 暗黄褐色シルト 10. 黄褐色シルト 11. 黄褐色シルト

ないように工夫している。木棺をある程度埋め戻してから拳大の礫を木棺に沿って北側を中心に配置している。礫の大きさには大小があり、小児の人頭大のものから拳大よりやや小さいものである。礫の形は亜円礫から亜角礫である。こうした棺表示法は舞鶴市と野田川町の境にある霧ヶ鼻1号墳第1主体でも見られ、由良川流域に特徴的な埋葬法の可能性がある。棺内埋土はすべてふるいにかけてが、微細な土器片や1cm大の炭化物以外は、墓壙内・棺内から遺物は出土しなかった。

## (2) 3号墳

**墳丘** 3号墳は長辺約15.5m・短辺約8mの平面形が長方形を呈する方墳で、高さは約1mを



第28図 3号墳第1主体部実測図

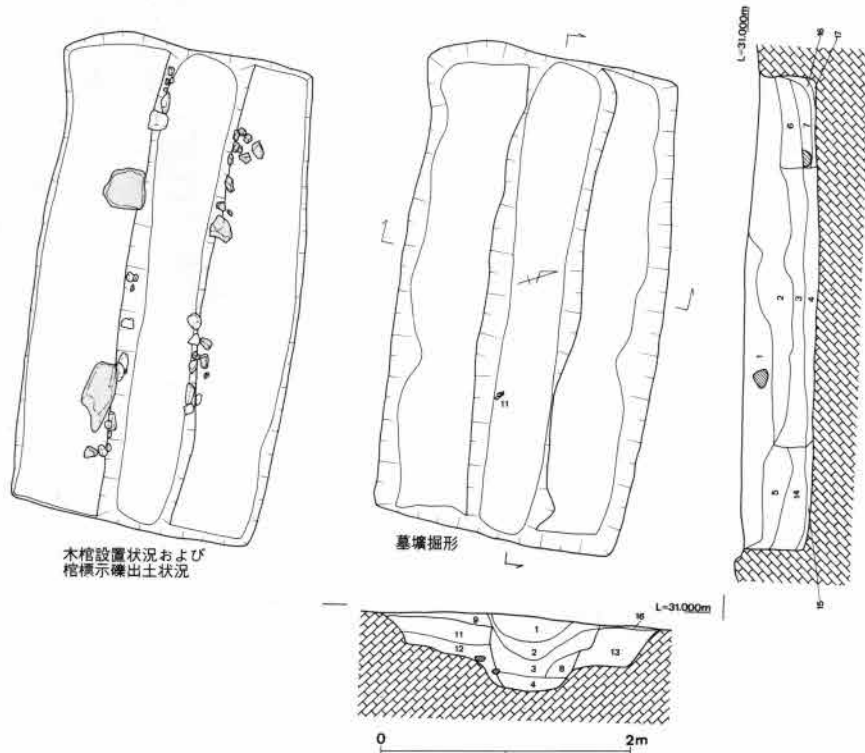
- |                    |                       |                |           |
|--------------------|-----------------------|----------------|-----------|
| 1. 暗褐色シルト          | 2. 黄褐色シルト             | 3. 明黄褐色シルト     | 4. 黄褐色シルト |
| 5. 黄褐色粘質シルト        | 6. 黄褐色シルト(しまっている)     |                |           |
| 7. 黄褐色シルト(しまっている)  | 8. 黄褐色粘質シルト           |                |           |
| 9. 暗黄褐色シルト(しまっている) | 10. 褐色砂混じりシルト(しまっている) |                |           |
| 11. 褐色シルト          | 12. 褐色シルト(しまっている)     | 13. 黄褐色砂混じりシルト |           |
| 14. 黄褐色シルト         | 15. 褐色シルト             | 16. 褐色シルト      | 17. 褐色シルト |

測る。墳丘平坦面は北東から南西の長軸で13.8m、短軸で6.7mの長方形を呈する。墳丘上平坦面中央やや東よりには、北東から南西に向かって溝状に落ち込む自然地形があり、墳丘平坦面はこれを埋め立てて整地した上で、墓壙を掘り込んでいる。墳丘側面には人為的な改変は見られず、墳丘上平坦面より下部は自然の斜面を利用する。2号墳との間と同様に、4号墳との間には区画溝が稜線に直交して掘削され、上端部の幅は3m、下端部の幅は1.5mを測る。埋土は上から茶褐色腐植土の表土、暗黄褐色粘質土、暗橙色土、

暗褐色粘質土、濁橙褐色粘質土、濁黄褐色粘質土である。

**主体部** 3号墳の主体部は墳丘上平坦面中央部に組合式箱形木棺を直葬するものを2基確認した。第1主体部は墳丘上部平坦面のほぼ中央に二段墓壙を掘る。墓壙の規模は長さ5.1m以上、幅2.1m。深さは約0.8mを測る。墓壙の北西側及び北東側小口部に岩盤の露頭があり、この部分は地山を削り残している。二段目の規模は長軸4.3m・短軸1.0m・深さ0.5mを測る。ここに木棺を直葬していた。木棺の規模は長さ約3.9m・幅約0.8mを測る。木棺の形状は土層の観察から「H」形木棺であると考えられる。木棺の両長側板と墓壙との隙間には3～5cm大の礫が詰め込まれていた。また北小口部は埋土を突き固めているが、さらに小口板に触れる部分には2～4cm大の礫を詰めて小口板を支えている。木棺中央部西寄りの棺底からは鉄刀1点、小型の袋状鉄斧1点が出土した。この2点は相接していたため錆着しており、この鉄器の下部には、棺材ないし鉄器を収めた箱の木質が付着していた。第1主体部の墓壙上では、供献土器群を検出した。土器はいずれもほぼ完形に復元できる。器種は小型丸底壺2点、小型の器台2点、高杯1点である。

第2主体部は第1主体部に直交して配置され、第1主体部を切って作られている。規模は長さ3.9m・幅2.1mを測る。2段目の規模は長軸3.9m・短軸0.7mを測る。二段墓壙に木棺を納め、裏込めの土とともに拳大の礫を墓壙と木棺の隙間に入れている。木棺の規模は長さ3.9m・幅0.6



第29図 3号墳第2主体部実測図(トーン部は棺標示礫)

- |                    |                    |                      |                     |
|--------------------|--------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 黄褐色シルト          | 2. 明黄褐色砂混じりシルト     | 3. 黄褐色シルト            | 4. 暗黄褐色粘質シルト        |
| 5. 黄褐色シルト(しまっている)  | 6. 黄褐色シルト          | 7. 暗黄褐色砂質シルト(しまっている) |                     |
| 8. 暗黄褐色シルト         | 9. 黄褐色シルト          | 10. 黄褐色シルト           | 11. 暗黄褐色シルト(しまっている) |
| 12. 暗褐色シルト(しまっている) | 13. 暗褐色シルト(しまっている) | 14. 褐色砂混じりシルト        |                     |
| 15. 明黄褐色粘質シルト      | 16. 褐色シルト          | 17. 明黄褐色極細砂          |                     |

mを測る。木棺の形態は「H」形を呈し、西側の小口部には拳大の礫を混入し、小口板を支えている。木棺の両側板と墓壙との間には拳大の礫が詰められていた。木棺内には、棺上から転落したと思われる小型の鉄斧が1点出土した。木棺をある程度埋めた後に、10~40cm大の礫を木棺に沿って配置していた。

(福島孝行)

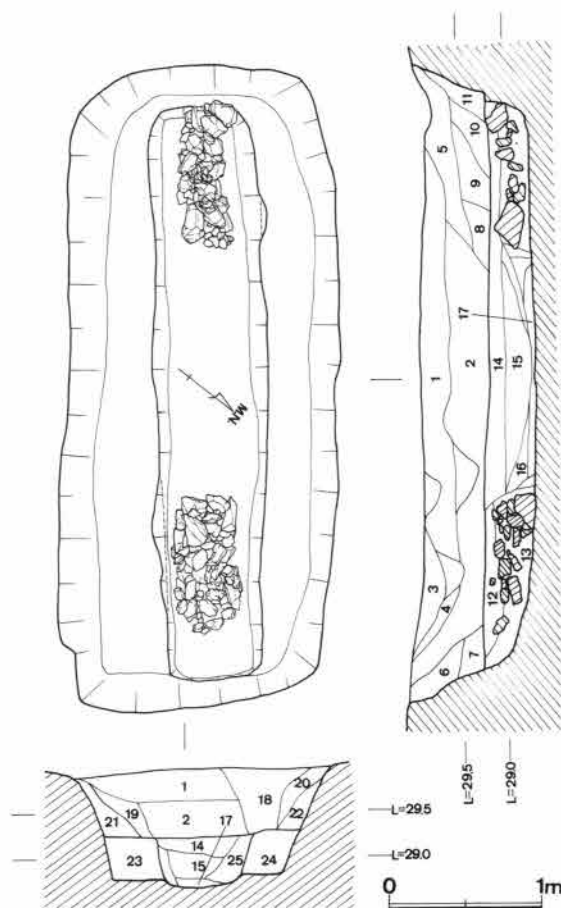
### (3) 4号墳

**墳丘** 平面形は長辺約16m・短辺約13mを測る長方形を呈する方墳である。墳裾は自然の丘陵へと自然に続くために、墳丘の高さは明確にはできないが、概ね1.5m以上を測る。墳丘は

地山である花崗岩の岩盤を削り出して整形し、由良川に面する西側は急な斜面を造り出す。また、古墳の北側は、幅約2.5m・深さ約0.8mの溝によって切り離されている。また、溝の底面からは若干量の炭と焼土が検出された。なお、墳丘流土を掘削中に鼓形器台片が出土した。

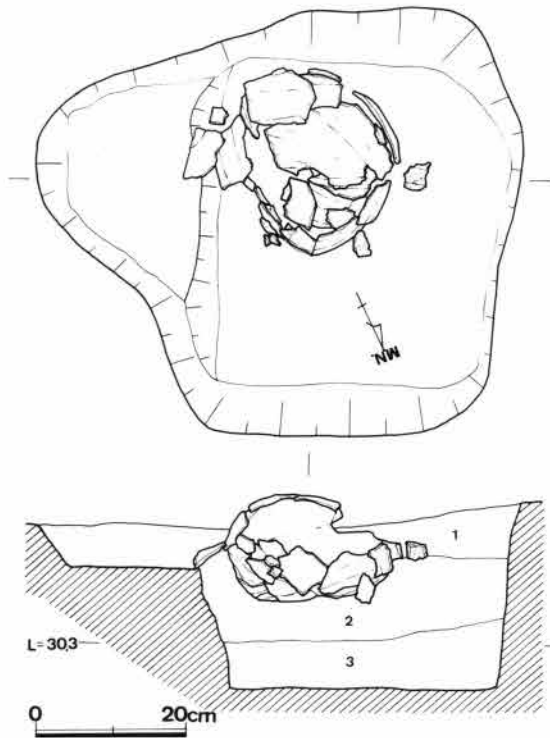
**主体部** 墓壙長約4.4m・同幅約2.5m・同高さ約0.4mを測る墓壙内に、木棺長約3.95m・同幅約0.7m・高さ約0.35mの木棺を直葬したものである。棺主軸は、古墳長軸とほぼ平行して、N55°Eである。墓壙の小口部分は掘り抜きのままであり、長側は墓壙壁との間に裏込めを施しているために、一見すると二段墓壙を呈する。しかし、計画的なものではなかったためか、墓壙主軸と木棺主軸とは、ずれている。棺底はゆるやかな「U」字形を呈し、底板は無かったようである。

この木棺を特徴付ける構造は、短側小口部分に山石の角礫を積んだ棺側板固定構造が見られることである。棺の板材の厚さは5cm程度で、「H」形に組み合わされた箱形木棺であったと推定される。しかし、棺材の遺存は認められず、褐色粘質土の立ち上がりによって確認されるのみであった。石積みは木棺に持たせ掛けるかのように、立石の状態で検出された。石積みは、北側が長さ0.9m、南側



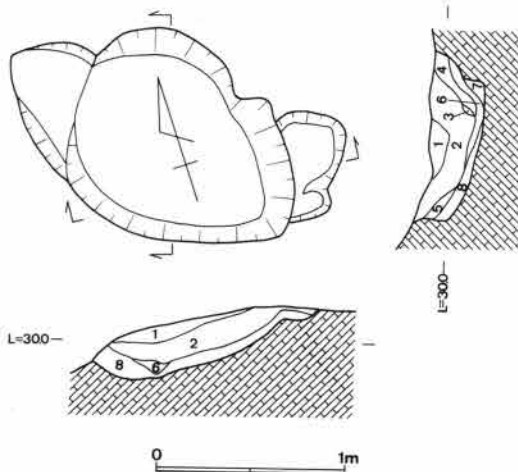
第30図 4号墳主体部平面・断面図

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. 淡茶褐色混礫土  | 2. 淡褐色粘質土   |
| 3. 暗黒褐色腐植土  | 4. 暗黄褐色粘質土  |
| 5. 淡茶褐色粘質土  | 6. 暗黄褐色混礫土  |
| 7. 黄灰褐色混礫土  | 8. 暗褐色粘質土   |
| 9. 暗黄褐色土    | 10. 淡褐色土    |
| 11. 暗褐色混礫土  |             |
| 12. 淡茶褐色混礫土 | 13. 暗灰褐色粘質土 |
| 14. 淡橙褐色粘質土 | 15. 淡褐色粘質土  |
| 16. 暗黄灰色砂質土 | 17. 淡橙褐色土   |
| 18. 黄褐色混礫土  | 19. 黄灰色砂質土  |
| 20. 淡褐色混礫土  | 21. 暗黄灰色砂質土 |
| 22. 暗黄灰色粘質土 | 23. 濁黄褐色粘質土 |
| 24. 明黄褐色粘質土 |             |



第31図 4号墳出土壺棺平面・断面図(1/10)

1. 黄褐色砂質土
2. 淡褐色砂質土
3. 暗黄褐色土



第32図 炭窯2 実測図

1. 暗褐色砂混じりシルト(炭化物多く含む)
2. 暗黄褐色シルト(炭化物少量含む)
3. 赤褐色シルト(焼土)
4. 暗褐色砂混じりシルト
5. 暗褐色シルト
6. 暗橙色砂混じりシルト
7. 黒褐色シルト(炭化物多く含む)
8. 黒褐色シルト(炭化物多く含む)
9. 赤褐色シルト(焼土)

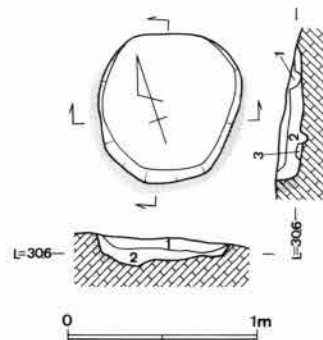
が1.0mを測るが、北側の方が使用石材の数も多く、しっかりと積まれている。被葬者は、両石積みに挟まれた部分に納められたと想定され、その部分の内法は、約1.6mである。頭位は石積みの状況や木棺幅などから想定して、北頭位であったと推測される。なお、副葬品は確認できなかった。

**壺棺墓** 木棺墓の北東コーナーに近い部分に1基の壺棺墓を検出した。これは、南東側に舌状の張り出しを持つ長方形を呈した墓壙に、底部を南に向け、口縁部を打ち欠いた壺を、別の壺破片によって蓋をして埋葬したものである。墓壙は、長さ約0.45m・同幅約0.25mを測る。壺棺はこの墓壙の底まで接するものではなく、張り出し部に底を載せた状態で検出された。

(河野一隆)

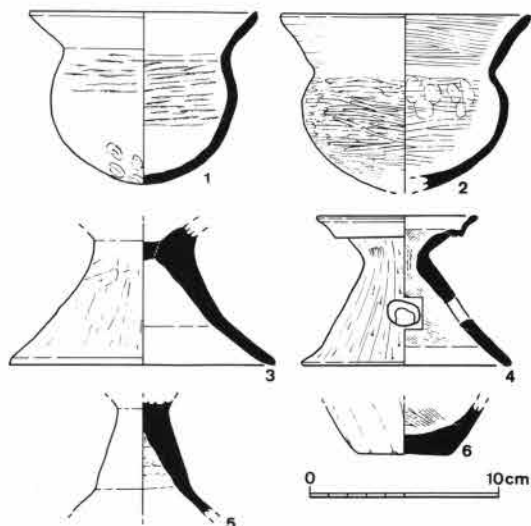
#### (4) 炭窯

墳丘斜面を精査中に、2基の炭窯と思われる遺構を検出した。いずれも不整形で、炭窯1は、壁面が特に強く酸化・還元している。1は長軸0.8m・短軸0.7m、2は長軸1.2m・短軸1.0mを測る。埋土は、赤褐色の焼土を若干量含むシルト質で、炭を含んでいる。



第33図 炭窯1 実測図

1. 暗褐色砂混じりシルト(焼土塊・炭化物多く含む)
2. 黒灰色砂混じりシルト(焼土塊・炭化物多く含む)
3. 暗赤褐色粘質シルト



第34図 2・3号墳出土土器実測図(1/4)



第35図 出土弥生土器

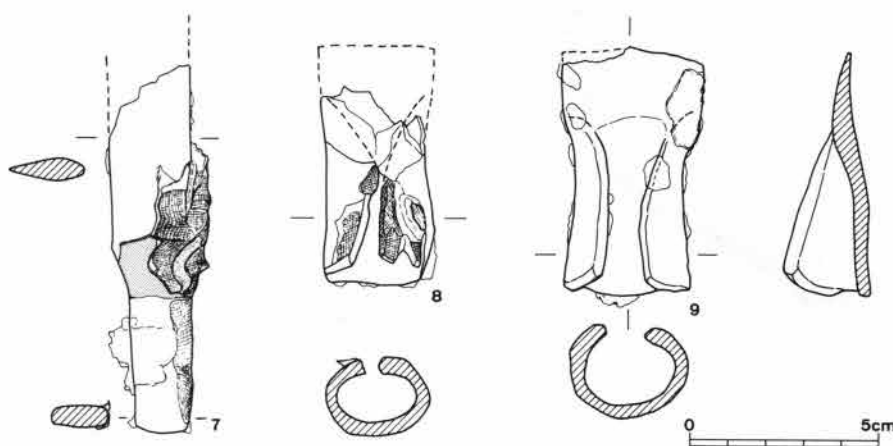
(5) 出土遺物

① 弥生土器

2号墳墳丘上流土から弥生時代後期の壺または鉢の底部(6)が出土した。底部径4.8cm。平底でやや内弯しながら器壁が立ち上がる。外面調整は摩滅のため観察は困難だが、縦方向の板状工具によるナデ調整が見られる。内面調整はハケ調整である。焼成はやや軟質で、胎土は白色砂粒を少量含む。色調は淡黄褐色である。

② 土師器

3号墳墓墳上で供献土器群が出土した。1は2・4の上部より出土した小型丸底壺である。外面には指頭圧痕が認められ、体部の内・外面の上半には粗いハケ目が残る。口径12.1cm・器高8cmである。2は4と対になる小型丸底壺である。口径12.8cm・残存高9.2cmを測る。底部がやや尖り底気味で、球形の体部、口縁部は直線的に外方へのびる。器壁はやや厚手である。外面調整は横方向の粗いミガキで



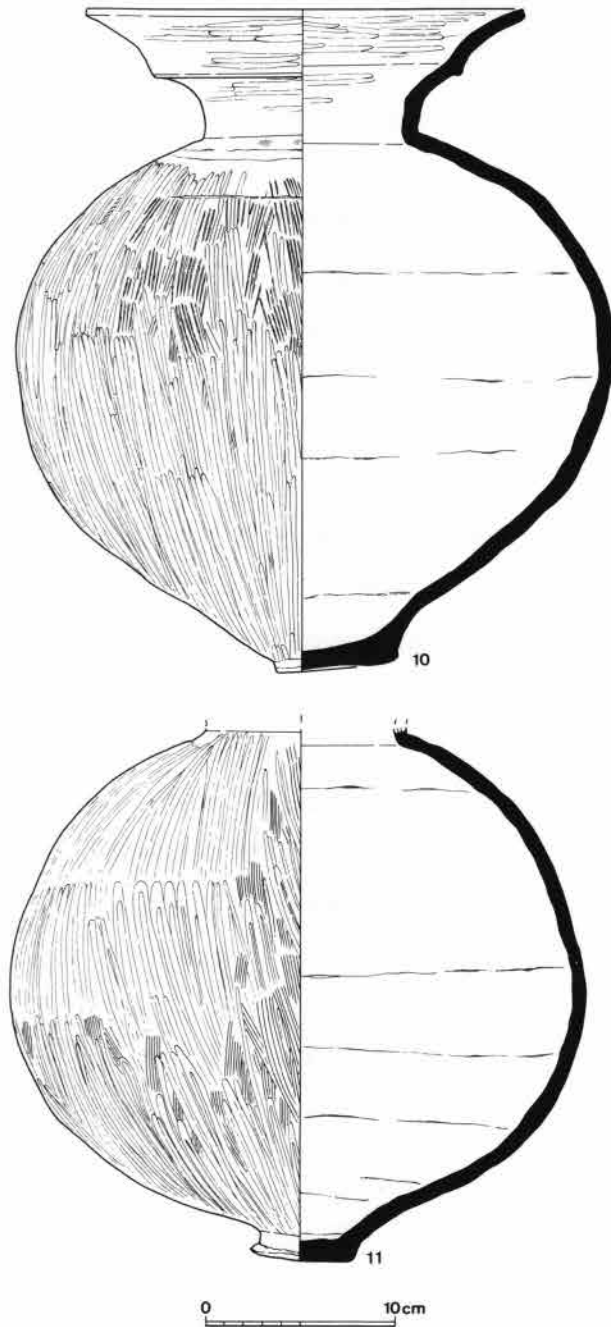
第36図 出土鉄製品実測図(1/2)

あり、口縁部の内面調整はミガキである。色調は暗褐色、焼成はやや硬質で、胎土には少量の白色鉱物粒を含む。3は高杯脚部と判断されるが、杯部は全く遺存していない。

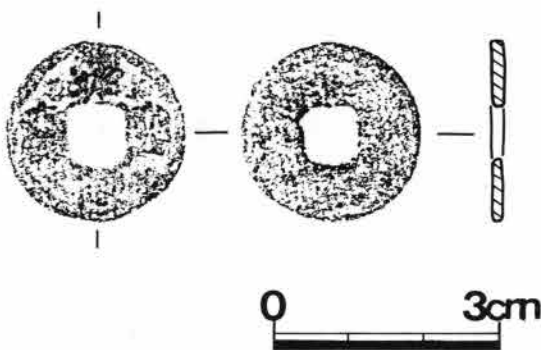
裾径14.2cmを測り、外面はヘラケズリによって調整される。4は小型の器台である。口径8.4cm・器高7.9cm・底部径10.8cmを測る。直線的に広がる脚部と、複合の口縁とから成る。外面にヘラケズリ、内面にハケ調整を施す。5は高杯脚部であり、内面にしぼり痕を残すが、風化が著しく、細部の検討は困難である。

4号墳第2主体部から出土した土器棺(10・11)は、精製の二重口縁壺であるが、壺棺として使用した時に口縁部が打ち欠かれたために、11は口縁部の破片が全くない。10は口径(推定)23.2cm、胴部最大径31.6cm・高さ31.6cm・底径34.8cmを測り、11は高さ28cm・胴部最大径30.6cm・底径





第37図 4号墳出土壺棺実測図(1/4)



第38図 出土熙寧元宝実測図

3.2cmを測る。いずれも突出底で、外面は縦方向の丁寧なミガキによって仕上げる。色調は両者とも、暗橙褐色である。

③鉄器

3号墳第1主体部から鉄斧1点と、鉄製刀子1点が出土した。7は刀子である。刃部幅2.2cm・厚み0.6cm・茎幅1.5cm・厚み0.6cmを測る。刃部は腐食のため残っていない。関から茎にかけて布に覆われており、背関が存在するか否かは不明である。8は小型の有袋式鉄斧である。腐食により刃部は残っていない。袋部の幅は2.8cm、上部に刀子から連続する布の痕跡が残っている。袋部は折り返すのみで、密着していない。刀子と鉄斧は並べて置かれたため、錆着している。この二つの鉄器の下部には木棺かまたは鉄器を収めた箱と思われる木質が付着していた。

3号墳第2主体部棺上から鉄斧1点が出土した。9は小型の有袋式鉄斧である。長さ6.5cm・刃部幅3.8cm・袋部幅3.4cmを測る。袋部は折り返すのみで密着しない。

(福島孝行)

④銭貨

4号墳墳頂の流土掘削中に1点の北宋銭(熙寧元宝)を検出した。径2.4cm、孔の大きさは一辺0.8cm四方を測る。摩滅が大変著しく、文字の判読が困難である。熙寧元宝は1068年に初鑄されたが、本例は字体のくずれから、やや時期は下るものと考えられる。

(河野一隆)

(6)埋葬施設に関する考察

①礫で棺表示する古墳について

川向2号墳主体部および3号墳第2主

体部では木棺をある程度埋め戻した段階で、木棺の位置を示すかのように拳大から小児の人頭大の礫を置く状況が見られた。これらの石は墓壙を完全に埋め戻した段階では見えなくなってしまう。こうした例は従来あまり意識されていなかったため、取り上げられていないが、今回2例を追加することとなったため、若干の整理をしておく。

周辺事例では宮津市と野田川町の境に所在する霧ヶ鼻1号墳第1主体部で見られる<sup>(注1)</sup>。霧ヶ鼻1号墳は霧ヶ鼻古墳群中最も低位に位置する方墳で、一辺17～19mを測る。墳丘北西側の2/3を削平されており、中心主体は既に失われている。南西側に残った周辺主体部の内、最も規模の大きな第1主体部は長軸3.85m・短軸1.9mを測る隅丸長方形の2段墓壙気味の墓壙に、長軸2.5m・短軸0.5mの箱形木棺を収めている。報告書の実測図によると、木棺を据えてから控え積みを行い、木棺を10cmほど埋め戻した段階で、木棺痕跡の周囲で南西部から北西部にかけて約15～30cm大の石を置いている。時期はこの墓壙内出土の土器棺の壺から布留式の前葉に比定される。

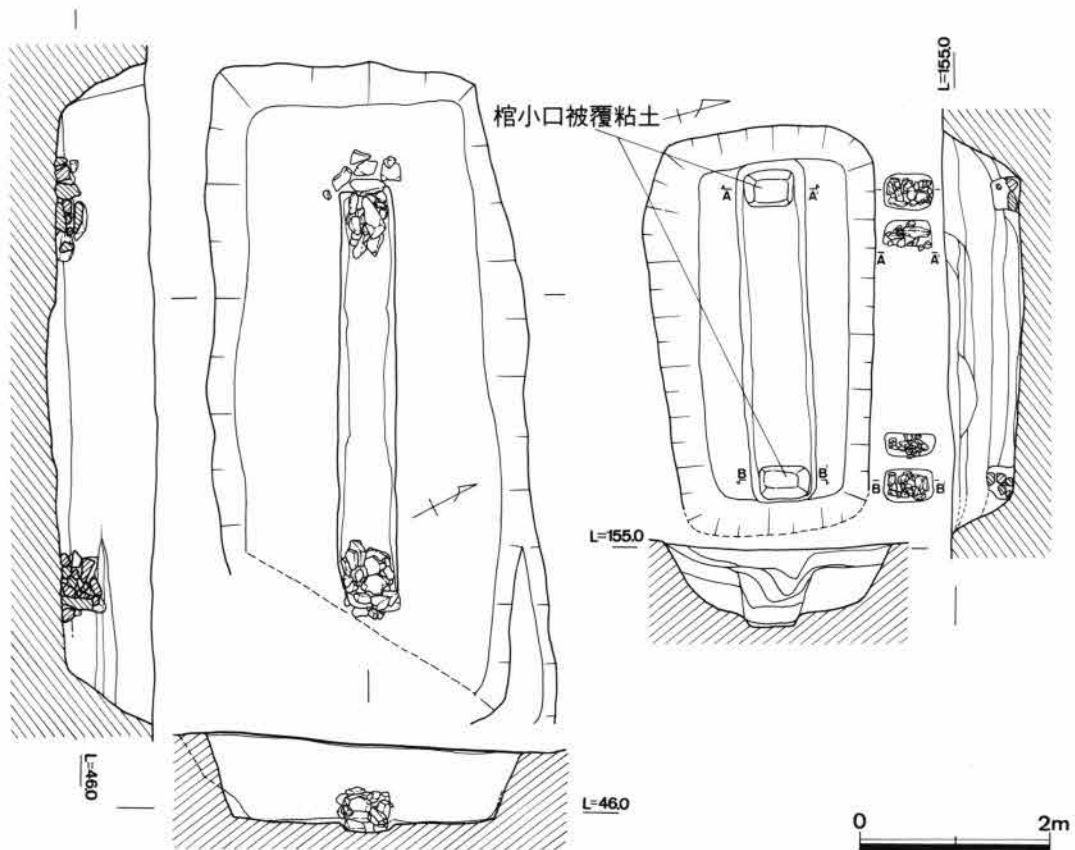
今回管見に入った例はこの1例のみである。通常棺ないし墓壙の標示石すなわち標石は、拳大から小児の人頭大の礫1ないし2個程度を棺上ないし墓壙上に置くことが多いが、今回検出した例は木棺の位置を明示しようという意図が読みとれる。霧ヶ鼻1号墳例を見ると、この棺標示法は棺の重複を避けるためだけでなく、棺の所在を確定し、追葬時の目印としての利用も考えられる。祖型となる可能性がある例として、野田川町屋敷ノ内D3号墓第2主体部は、弥生後期後葉の区画溝を持つ台状墓の木棺直葬墓であるが、墓壙中に拳大の礫が散乱している<sup>(注2)</sup>。詳しい状況は観察できなかったということであるため断定は避けたいが、今回報告した例に関連すると考えられる。丹後・丹波地域では他に報告例が無く、現状では川向古墳群を含め、野田川から由良川にかけての棺標示法の特例として見ることができそうである。

(福島孝行)

## ②礫で木棺の小口を支える埋葬施設について

川向4号墳の埋葬施設は、礫によって「H」形木棺の両端部を押さえる型式のものである。このような埋葬施設は、近畿地方北部の古墳でしばしば確認できる。近似した例では、宮津市須津に所在する柿ノ木2号墳の、第1・2主体部がこの型式の埋葬施設である。この第1主体部は、長7m・幅3.3mを測る墓壙に箱形木棺を直葬したものであるが、両小口部分を、花崗岩の扁平な礫を立てるようにして押さえ、それを両側から固定するかのように円礫が積み上げられていた。この施設の特徴は、木棺長側板の内外両面から押さえられている点であり、川向4号墳のように、内側を石で、外側を裏込め土によって棺材を固定する方法とは、若干の相違がある。しかし、報告書には明記されていないが、この柿ノ木2号墳にも裏込め土が存在していた可能性が高い。なお、この柿ノ木2号墳は出土遺物が全くなかったために、埋葬施設の類似から5世紀前半に築造時期が当てられているが、この川向4号墳の事例から見て築造年代はさらに遡る可能性が高い。

類例として挙げられるもう一例は、丹後半島の弥栄町鳥取に所在する桐谷1号墳である。これは、丘陵先端を加工した径15mを測る円墳であり、2基の埋葬施設が築かれていた。その内の、第2主体部は、長さ3.5m・幅1.7mで、箱形木棺の両小口部に石積みを持つ。ただし、川向4号



第39図 木棺小口部を礫で押さえる埋葬施設の例(1/80)

1.宮津市柿ノ木2号墳 2.園部町今林2号墳

墳例、柿ノ木2号墳例と異なって、石積みは墓壙底まで及んでおらず、棺上面に浮いた状況である。なお、概報掲載の断面図は、木棺を固定する上で若干の疑問が残り、ここでは、本例も両側小口には裏込め土を施し、上面に礫を置く構造であったと解釈したい。なお、この古墳からは出土遺物が全く見られなかったために、時期を特定できない。以上、川向4号墳の埋葬施設と関連して類例施設を挙げたが、これらが提起する二、三の問題をまとめておきたい。

木棺の両小口に石を用いた施設は珍しいものではなく、奈良県御所市石光山古墳群などで、中期後半以後の古墳に多いことが知られていた。しかし、それらは小口を押さえる程度のものであった。しかし、川向古墳群の場合は3号墳第1主体部で長側に、4号墳では小口側に多量の礫を使用しており、それが裏込め土と一体となって、持ち運びできない棺を構成する。近畿地方北部の木棺直葬墳の調査では、「H」形木棺という表現がしばしば用いられるが、遺骸が納められる木質部分のみでなく、裏込め土・棺固定の礫群なども埋葬施設を構成する重要な部分なのである。木棺と石棺が互換性を持つことから知られるように、日本の古墳時代の棺は遺骸を納めて持ち運ぶことができないものであるならば、棺の材質差は付随的なものに過ぎない。したがって、木棺と石棺の両者が融合した「木石併用棺」を想定することもできる。

このような木石併用棺の事例は、兵庫県豊岡市舟隠3号墳第1主体部で認められる。この古墳は長辺14mを測る方墳で、埋葬施設は陰石製箱形石棺を2基並列したものであったが、北側に位

置する石棺は東隅角部分の長側板材が木板に置き換えられていた。さらに、弥生終末期の木棺にも木石併用棺がある。岡山県山陽町四辻土壙墓では、両長側板を木板、両小口は扁平な板材によって、棺を構成していた。

一方、このような礫で小口を押さえる埋葬施設は、丹波地域の中期中葉以降の古墳で特徴的な、小口を礫と粘土によって閉塞する埋葬施設の祖型と考えられる。小口を礫と粘土で充填した埋葬施設の例として、船井郡園部町今林2号墳第3主体部が挙げられる。今林2号墳は古墳時代中期後半に築かれた径約15mの円墳で、4基の埋葬施設がある。その内、第3主体部は長さ2.7m・幅0.7mの墓壙に箱形木棺を納める。その小口部の構造は、直方体状の石材を小口板に沿って「コ」字形に並べ、やや小さな石材によって内部を充填した上、全体を白色粘土で覆ったものである。このような小口閉塞施設が木棺の両側に設けられている。

このような木棺小口を粘土と礫を併用して押さえる構造は、福知山市池の奥古墳群・綾部市中山古墳など、主に丹波地域の古墳から検出され、いずれも時期は古墳時代中期中葉を遡らない。また、構造にも各差があり、やや古い形態のものほど粘土よりも礫の比重が高く、時期が下るに従って粘土が主体となるように変化するようだ。川向4号墳例のような小口両面を礫によって閉塞するものから、次第に礫の比重が低くなり、中期後半になって粘土と礫を併用する埋葬施設として丹波地域に定着するようになったのであろう。

(河野一隆)

#### 4. ま と め

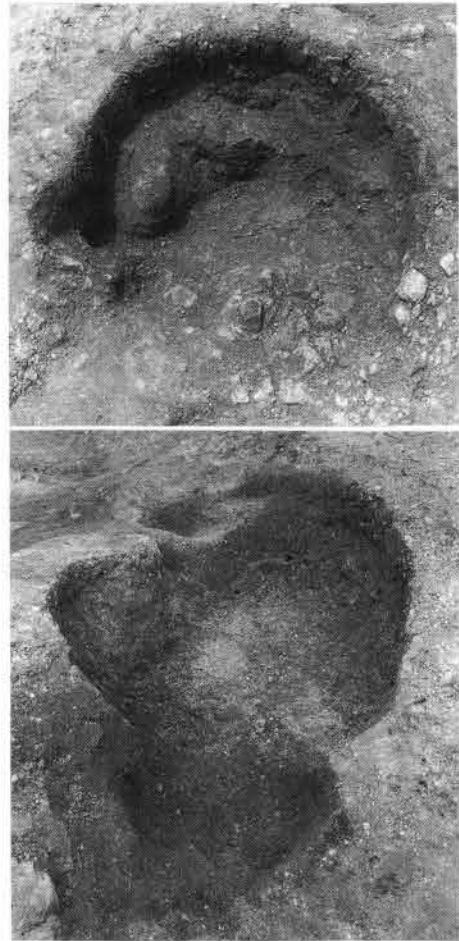
今回の調査では、眼下の由良川自然堤防上に展開する志高遺跡において、検出されていなかった墓域に比定しうる古墳を都合3基調査した。以下にその特徴をまとめておく。

**墳丘について** 川向古墳群の墳丘は3号墳・4号墳は丘陵の稜線に直交する区画溝によって長方形の墳丘を作り出し、墳頂部を長方形に削平して平坦面を造り出している。なお墳丘側面は人為的な造作を行っておらず、自然地形をそのまま利用している。2号墳は丘陵を台形に削平して平坦面を造り出し、3号墳との間には区画溝を掘削している。

**主体部について** 川向古墳群においては、花崗岩の岩盤を深く削り込んで墓壙を造り出すという特徴が共通してみられる。墓壙の深さは2号墳で54cm、3号墳第1主体部で80cm、3号墳第2主体部で60cm、4号墳第1主体部で60cmを測る。岩盤を掘るといふ事情から堅すぎて掘れない部分は掘り残している。さらに2号墳、3号墳第2主体、4号墳では墓壙の長軸いっぱい「H」形の組合式箱形木棺を納めるという特徴が見られる。これに伴い、木棺の長側板が入りきらない場合には、墓壙の小口部を溝状に削って強引に納めている状況が2号墳と4号墳で見られた。考察で触れたが、木棺の小口部を礫で支えたり、木棺を礫で標示したりする特徴が見られる他、木棺の長側板と墓壙の間に礫を詰めるといふ特徴も見られる。3号墳第1主体部においては、竪穴式石室と見まごうばかりにぎっしりと礫が詰め込まれていた。さらに、4号墳を除く3主体部では小口部外側の埋土を強く叩き(踏み)締められていた。

副葬品について 川向古墳群では3号墳第1主体部と第2主体部で鉄製品を副葬していた。第1主体部から出土した刀子は、刃部の先端が失われたため全長は不明であるが、鉄斧とともに布で覆われていた。第2主体部の鉄斧は棺上に置かれていた。こちらは布の痕跡はない。副葬品については豊富とは呼べないが、丹後地域における前期古墳の副葬品の状況を見ると、墳丘長が20m未満の古墳から出土する副葬品は多くても鉄器1～2点と玉類という組合せであり、むしろ鉄器1点ないし副葬品なしという古墳が多い<sup>(注3)</sup>。その中で川向3号墳に埋葬された人物の地位は、丹後地域全体から見ても相対的に高かったと考えられる。鉄斧については、弥生時代終末～古墳時代前期の前葉を中心に出土する小型の手斧である。山口県国森古墳に類例が見られる。

時期について 3号墳第1主体部の墓壙上から出土した供献土器は小型丸底壺の口縁部が体部最大径を凌駕しているものの、体部自体は既に下方へ拡張しており、これらの特徴から畿内の土師器編年に準拠すると、布留2式の新相にあたる<sup>(注4)</sup>と考えられる。志高遺跡の報告書に掲載された志高編年では志高古式土師器I期にあたる<sup>(注5)</sup>。4



第40図 炭窯1(上)・炭窯2(下)完掘状況

号墳第2主体部の土器棺は突出する平底を持ち、口縁部の屈曲部を下方に拡張するなど古い様相が見られる。また共伴した鼓形器台も稜が高く、古い様相を示す。これらから4号墳の土器は庄内式に併行する可能性があり、弥生時代末から古墳時代初頭の墳墓であろう。

結語 従来不明であった古墳時代前期の由良川下流域の埋葬法を知る上で、重要な資料を得ることができた。この地域の古墳時代前期の首長は、弥生時代の水月無山遺跡やシゲツ墳墓群などの台状墓の伝統を色濃く残した在地の首長であったと考えられる。

(福島孝行)

注1 東 高志「霧ヶ鼻古墳群」(『宮津市史』史料編第1巻 宮津市) 1996

注2 下川賢司『香久山城跡・屋敷ノ内古墳群・雲岩寺跡(第3次)発掘調査概報』野田川町教育委員会 1996

注3 丹後の前期古墳における副葬品については改めて議論したい。

注4 寺沢薫『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986

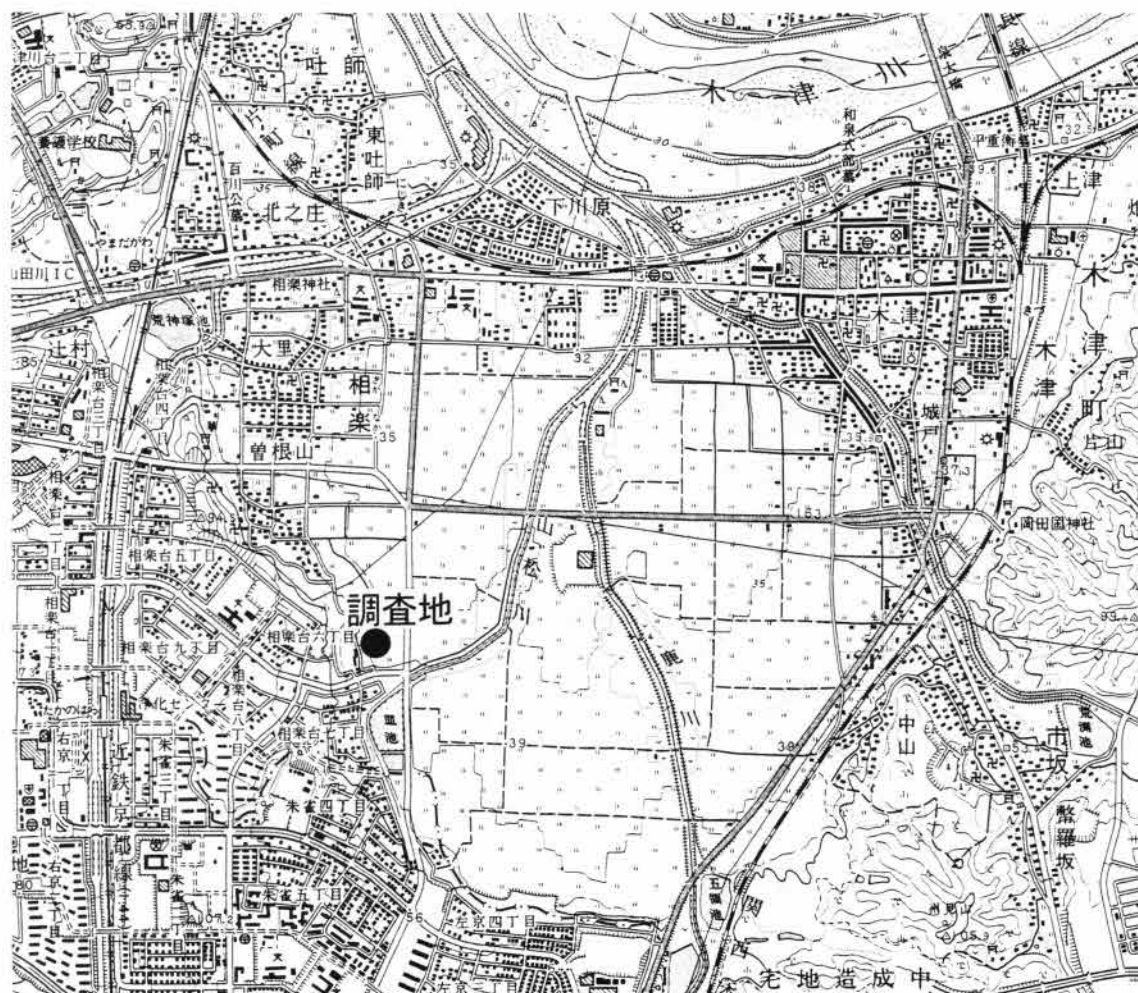
注5 林比佐子「古式土師器の編年」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

## 4. 大島遺跡第3次発掘調査概要

### 1. はじめに

大島遺跡は木津町平野部の西南に位置し、奈良県との府県境に近接している(第41図)。大島遺跡は、昭和57・58年度に二次にわたって木津町教育委員会が主体となって発掘調査が実施され、今回は第3次調査にあたり、前回調査の北東部に位置している(第42図)。1・2次調査では、弥生時代中期の竪穴式住居跡3棟、方形周溝墓1基、奈良時代の掘立柱建物跡35棟以上・井戸、古墳時代中期～後期の土坑が検出されている。特に弥生時代集落は、近接して発見された相楽銅鐸との関連が想定されている。

建設省・日本道路公団が建設している国道24号京奈道路が大島遺跡の北東部に計画されたことから、今回の発掘調査に先立って、京都府教育委員会は、大島遺跡の範囲確認を行うために、試掘調査を実施した。その結果、古墳時代を中心とする遺物の出土が確認され、従来考えられてい



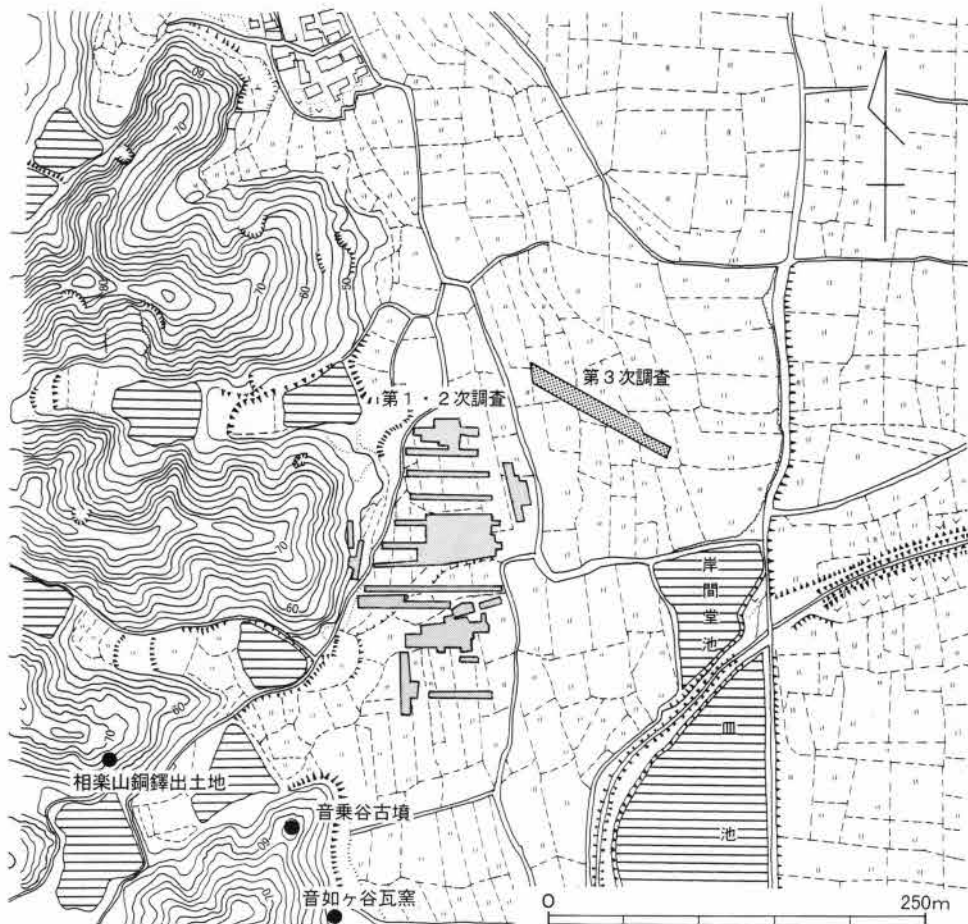
第41図 調査地位置図(1/25,000)

る大島遺跡の範囲よりも東側にまで遺跡が広がっていることが判明した。出土した遺物より、今まで大島遺跡ではよく分かっていなかった古墳時代の集落遺構が検出されることが期待された。今回の調査地は木津町相楽岸間堂地内にあり、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。調査は、調査第2課主幹調査第3係長事務取扱平良泰久、同主任調査員竹原一彦・岩松 保、同調査員柴 暁彦が担当し、本報告は岩松が執筆した。調査期間は平成10年6月23日～10月2日までを要し、調査面積は約1,100m<sup>2</sup>である。現地の調査には、京都府教育委員会、木津町教育委員会、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所、同京奈監督官連絡室、相楽霊園管理委員会、曾根山区町内会の協力を得た。また、現地調査および出土遺物の整理作業には多くの方々の参加を得た。ここに記して感謝の意に替えます。<sup>(注1)</sup>

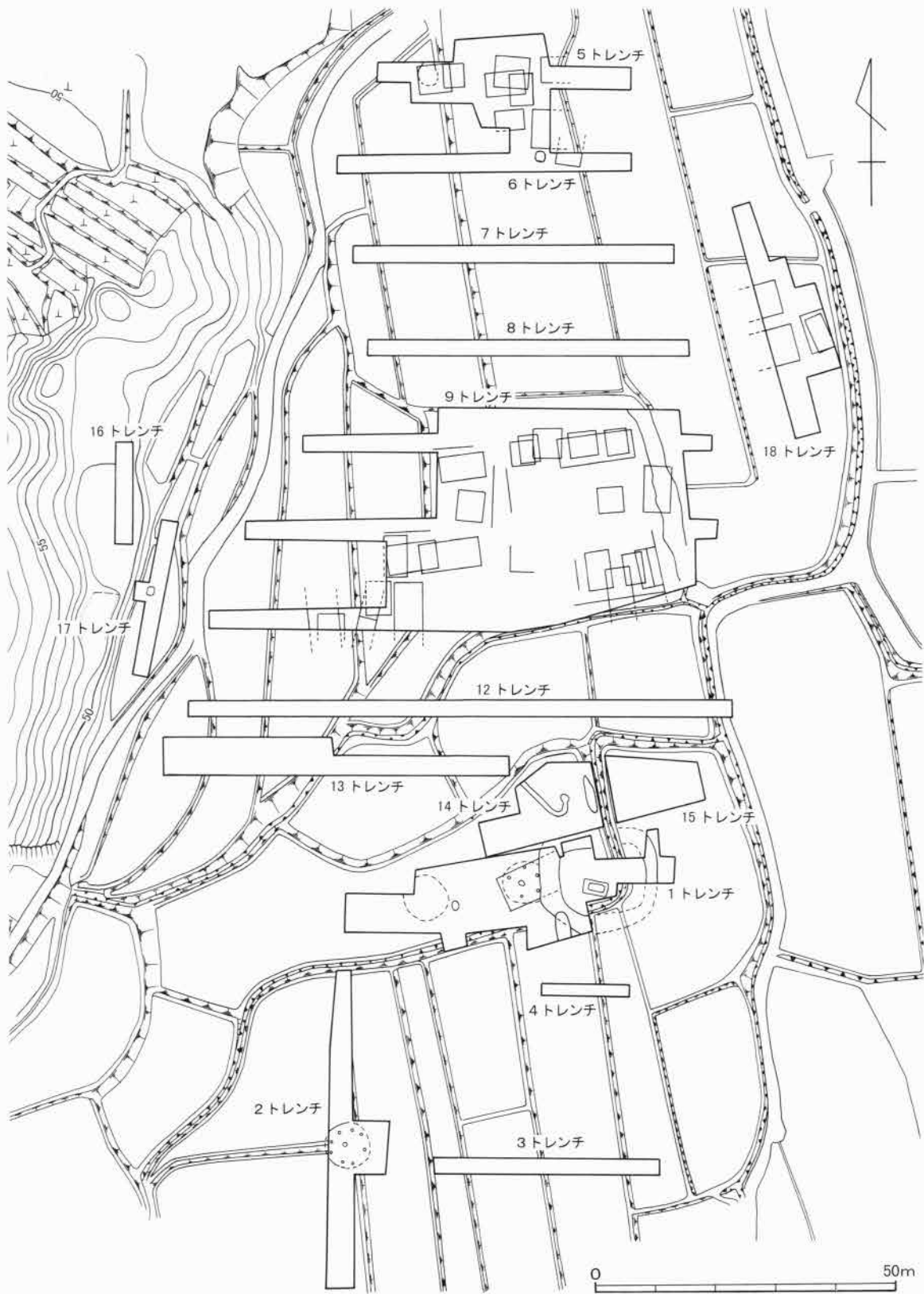
## 2. 過去の調査(第43図)

大島遺跡の周辺地は相楽台ニュータウンの造成が行われていたが、その造成工事中の昭和57年に銅鐸が発見された。その発掘調査中に、調査担当者が付近の排水路工事現場から弥生土器・石器などを発見し、大島遺跡の存在が明らかとなった。そのため、昭和57・58年度の二次にわたって木津町教育委員会が主体となって発掘調査が実施された。

その時の調査では、遺跡は小さな谷を挟んで南北二区に分かれ、南区では弥生時代中期の竪穴



第42図 調査トレンチ位置図



第43図 大島遺跡1・2次調査検出遺構配置図  
(『木津町史』史料篇Iより再トレース・調整)



式住居跡3棟、方形周溝墓1基が検出され、北区では奈良時代の掘立柱建物跡35棟・掘立柱塀8列・井戸2基などを検出している。その他に、調査地北部で、古墳時代中期～後期の土坑、飛鳥時代の掘立柱建物跡と溝が検出されている。このように、調査地の南寄りで確認された谷を挟んだ南北で遺跡の様相は異なり、南側の弥生集落は相楽銅鐸を実際に用いて祭りを行っていた集落と考えられている。それに対して、北側の奈良時代の建物群は、南約300mにある音如ヶ谷瓦窯で同種の瓦が出土していることから、音如ヶ谷瓦窯の造瓦関係施設と考えられている。

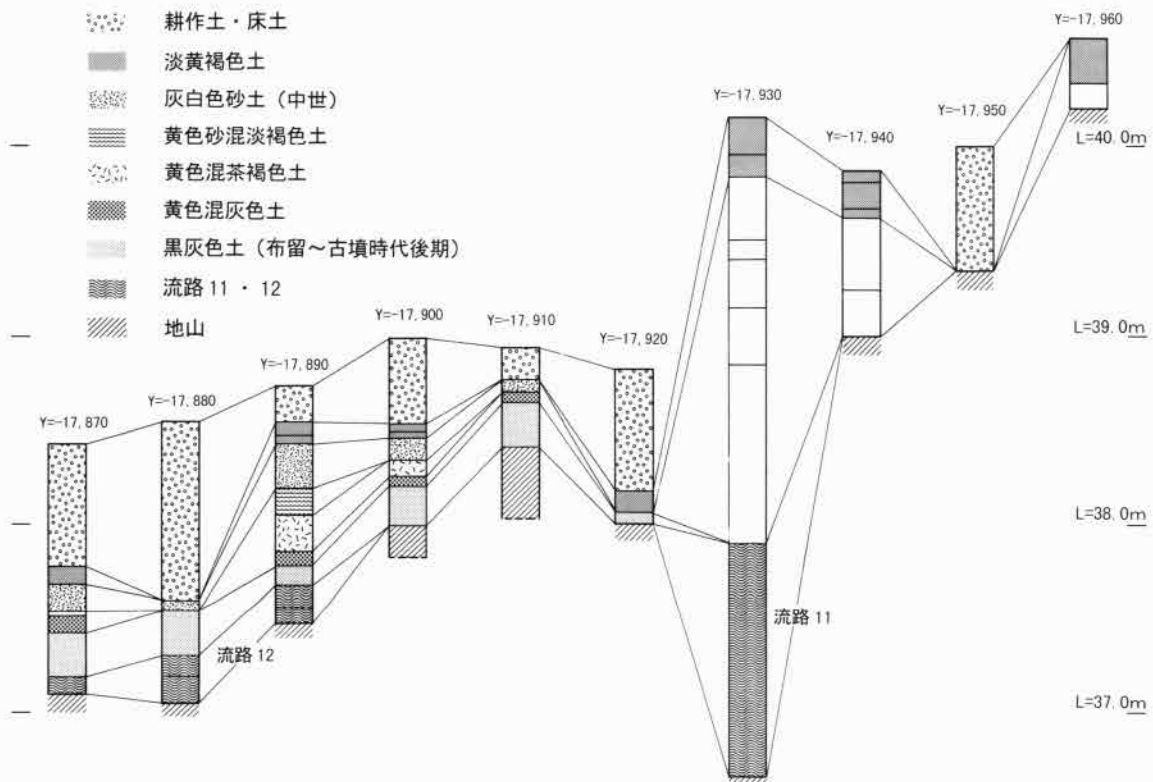
### 3. 調査概要

#### (1) 調査経過と基本土層

調査地は、東西約110m、南北約12mのトレンチを設定して行った。調査地はゆるやかに東へ下る丘陵裾に位置しており、周囲には段々に畑や水田が造られていることから、元々の地形は田畑の造成によってかなり変形を加えられているものと想定された。そのため、西半では、遺構はほとんど削平されて検出できなかったが、東半のよく残っているところでは、2面で遺構を確認した。上位では中世素掘り溝、下位では古墳時代中期～後期の遺構を確認し、さらにこの下位では弥生時代中期～古墳時代後期の流路跡が分布していた。

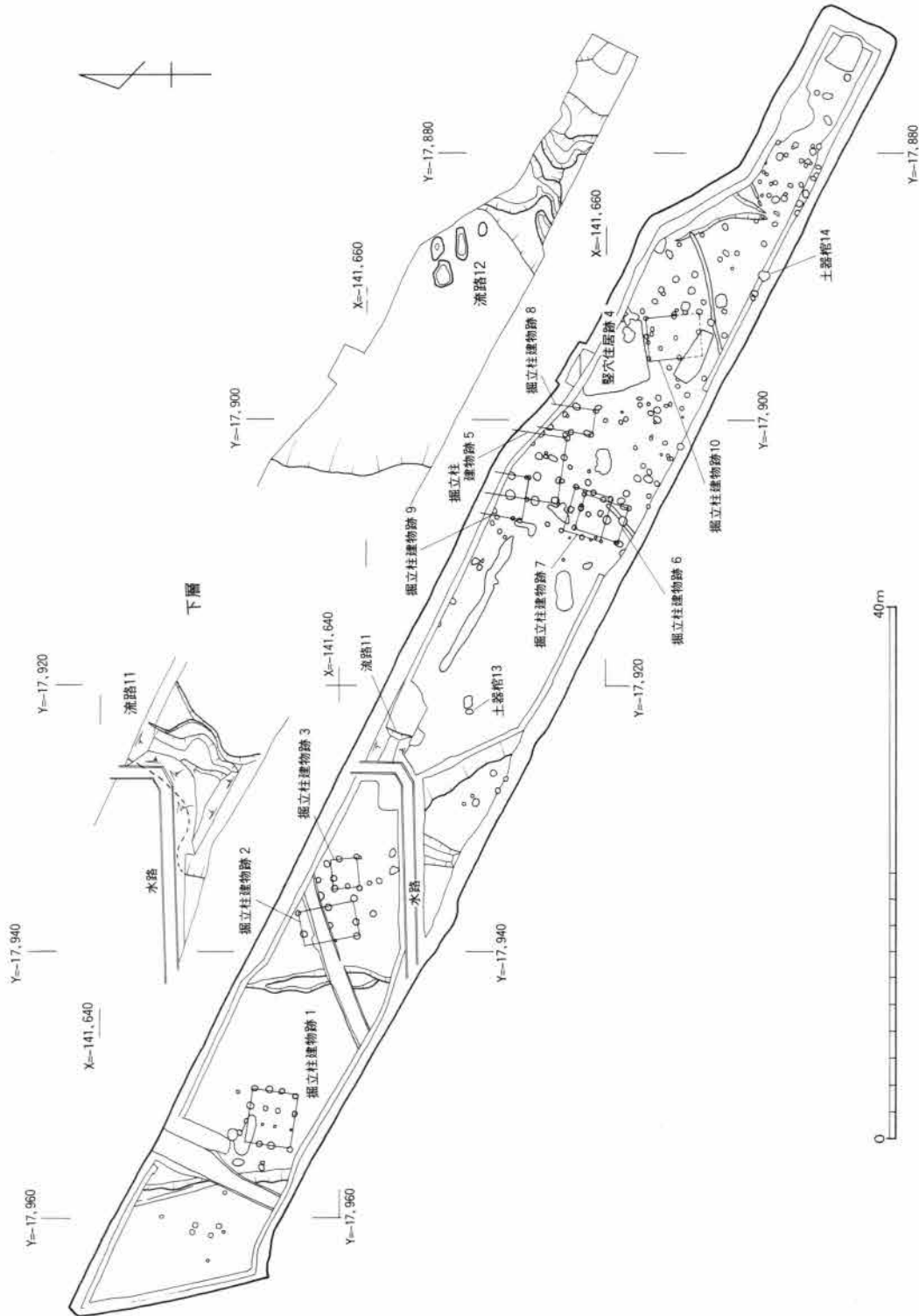
第44図は調査トレンチの南壁の土層柱状図である。Y座標値で10m毎に図示してある。Y=-17,930は丁度流路11に位置しており、これより西側の現地地表は急激に高くなっているのに対して、東側は比較的平坦である。ほぼこの地点の東西で、東地区・西地区と便宜上分けて記述したい。

東地区では、灰白色砂土はほぼ全域に分布しており、この土層中には中世の瓦器片とともに、



第44図 調査地南壁土層柱状図

布留～古墳時代後期の土器片が、比較的多く出土した。この下面では、竪穴式住居跡4の南側で、南北方向の素掘り溝群を小範囲で検出した。その検出した範囲は、現在の水田区画とほぼ一致していた。黄色混茶褐色土上面および黄色混灰色土上面でも柱穴などの遺構の検出に努めたが、最終的には、黄色砂混淡褐色土の上面で検出した遺構を記録した。また、竪穴式住居跡4を検出したY=-17,900付近の北半は南壁部と違って、黄色砂混淡褐色土層が無く、かわりに褐灰色砂質土



第45図 検出遺構平面図

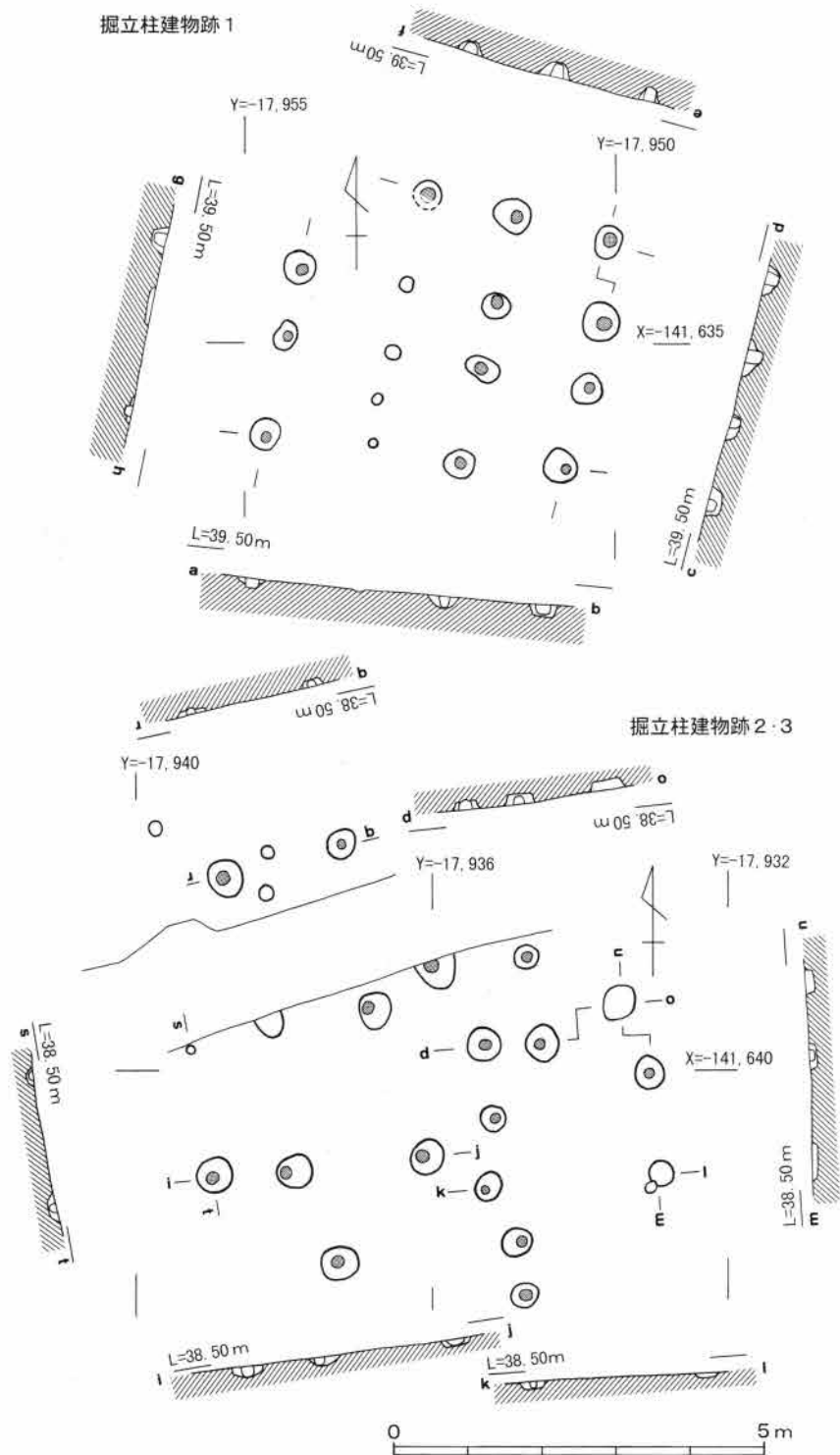
層が堆積していた。黒灰色土はY=-17,920以東に分布して、徐々に東に向けて下っており、この土層よりも下位層は流路12内の堆積土と判断される。

西地区は、現状の棚田の造成のために、旧地表面がかなり削平・盛り土されていたために、共通した土層は確認できなかった。掘立柱建物跡1～3は地山面で検出し、この上位の層中からは、弥生土器や土師器、須恵器の小片が出土しているが、実際の堆積時期を示しているものかどうかは明らかではない。

(2) 検出遺構(第45図)

調査の結果、西半部では遺構の分布は疎らで、掘立柱建物跡3棟に復元される柱穴群をわずかに検出したに止まったが、東半部ではほぼ全面にわたって多数の柱穴・土坑を検出した。以下、主要な遺構の概略を示す。

**掘立柱建物跡1**  
(第46図、図版第34-1) 調査トレンチの西端で検出した建物跡で、3間×3間の総柱の建物跡である。柱穴は丸ピットで、一部の柱掘り方は消失しているが、ほとんど全ての柱穴に柱あたりが残る。柱穴内からは遺物の出土はほとんど無く、弥生土器もしくは土師器の小片が出土している。



第46図 掘立柱建物跡実測図(1)。(トーン部は柱当たり)

掘立柱建物跡 2・3 (第46図、図版第34-2) 掘立柱建物跡 2・3は、ともに不揃いな柱列で、それぞれ2間×2間の規模を有するものと復元している。これらの柱穴からも、時期を決定する遺物の出土は無かった。

これらの掘立柱建物跡は、それぞれの棚田のテラスで唯一見つかった遺構で、この遺構の他には、水田に伴う排水または地境溝と考えられる簡単な素掘り溝を確認しているだけで、顕著な遺構は検出できなかった。時期の決め手に欠くが、後述の東部地区の掘立柱建物跡とは違って丸ピットで掘り方も浅いこと、一部の掘立柱建物跡は柱穴の並びが不揃いなこと、西部地区には掘立柱建物跡以外の雑多な遺構がほとんど無く、生活の匂いがしないことなどから、西部地区の掘立柱建物跡は古墳時代には遡らないものと推定する。この西部地区は、棚田を造成する以前はかなりの傾斜面であったと想定されるが、掘立柱建物跡毎に柱穴の深さが浅くてほぼ揃うので、棚田の造成以後、おそらく、中世以後の農作業小屋といった性格が付与できよう。

東部地区では、多数の柱穴・土坑を検出した。調査地の東端部でも多くの柱穴を検出した。柱穴の中には、柱痕が残るものもあったが、調査範囲が狭いために、掘立柱建物跡に復元できるものは確認できなかった。

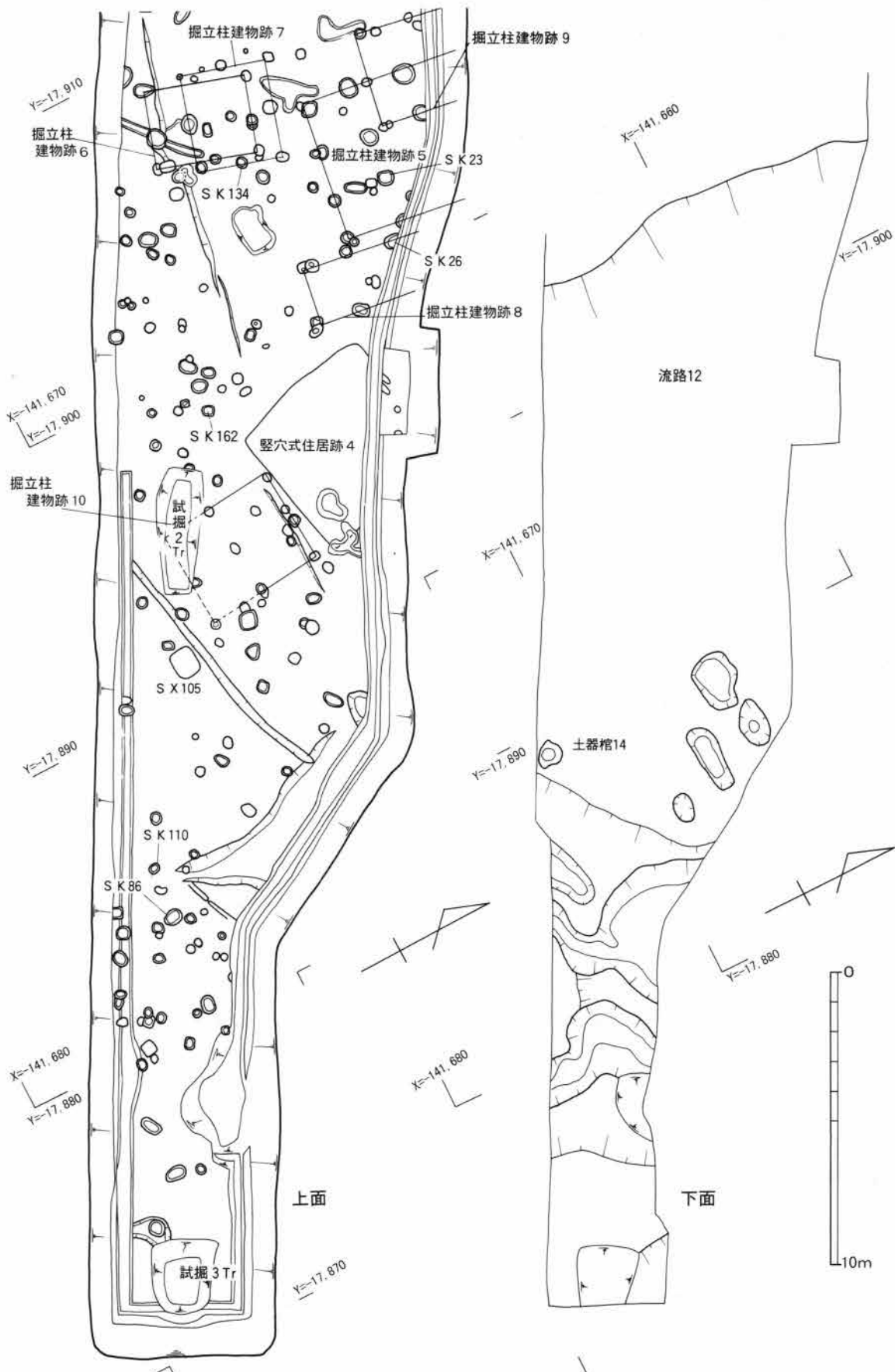
東部地区では、掘立柱建物跡 6棟、竪穴式住居跡 1棟、土器棺 2基、流路跡 2条、柱穴・土坑多数を検出している(第47図)。

竪穴式住居跡 4 (第48図、図版第35-3) 一辺約4.5mの方形で、北東部分は調査地外である。検出高は約5cmと浅いものである。床面では西辺・南辺に沿って壁溝が四重に認められ、少なくとも3回の建て替えがあったと推定される。竪穴式住居跡の埋土の上面で検出したS X 93内には、色調・土質の違いはあるものの、基本的には焼土が充填されていた。竪穴式住居跡との位置関係から、竈からかき出した焼土と考えられる。実際に北側へ拡張しても、竪穴の壁は確認できず、周壁溝と判断される溝が2条検出できただけで、竈の存在を示す焼土や炭の広がりとは全く無かった。S X 93が今回検出した竪穴式住居跡の床面を掘り込んでいないので、数度の建て替えを経た後に、竈が設置されたと考えられる。埋土・床面上から、第52図1～8の製塩土器や土師器が出土している。2・3の土師器は布留式のものであり、8・9の製塩土器は須恵質のもので、秋山浩三氏によると、おおむね6世紀前半のものである。布留式の土師器は流入品とも考えられるが、竪穴式住居跡は少なくとも3回の建て替えが想定されることから、これらの年代幅が竪穴式住居の形成年代と合致すると言うことも可能である。この判断は、隣接地域の発掘調査の成果に期待したい。

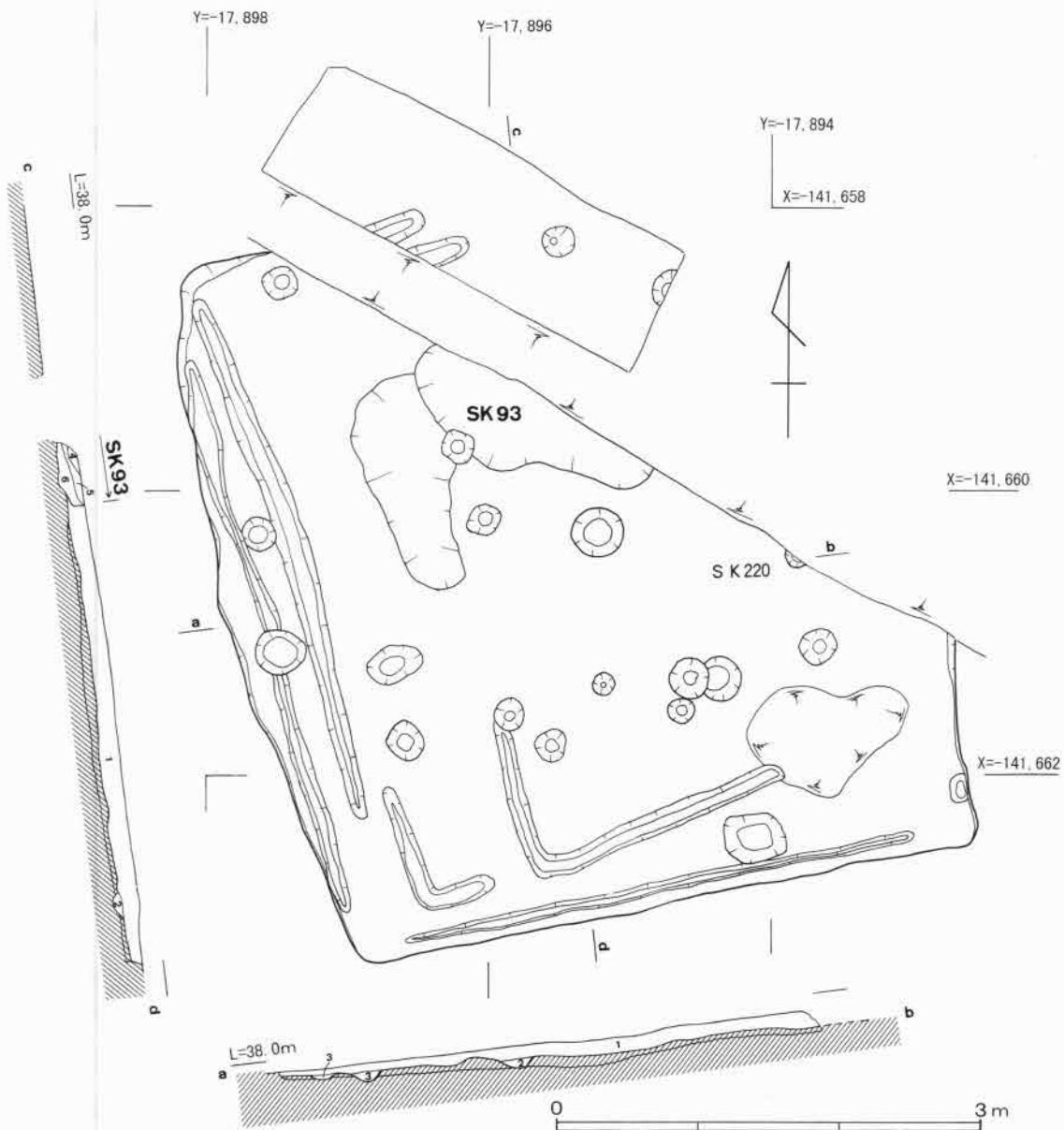
掘立柱建物跡 5 (第49図、図版第34-3) 3間×1間以上で、南側に廂もしくは縁が敷設されている。身舎部分(柱間1.5m)は廂(もしくは縁; 出は1.5～2m)よりも大形の柱穴で構成されている。第52図12・15・16の土師器や有孔円板が出土している。

掘立柱建物跡 6 (第49図、図版第35-1) 1間×2間の身舎(柱間1.5m)の東側に廂もしくは縁(出は1m)が設けられた掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡 7と重なっている。

掘立柱建物跡 7 (第49図、図版第35-1) 2間×2間の掘立柱建物跡で、東西の柱間1.65m、



第47図 東部地区検出遺構図



第48図 竪穴式住居跡4実測図

1. 黄色混淡灰色砂土 2. 灰色砂土 3. 黄茶色砂土 4. 灰色混明褐色土(焼土を多く含む)  
 5. 明褐色土(焼土を多く含む) 6. 茶色混明褐色土(焼土を含む)

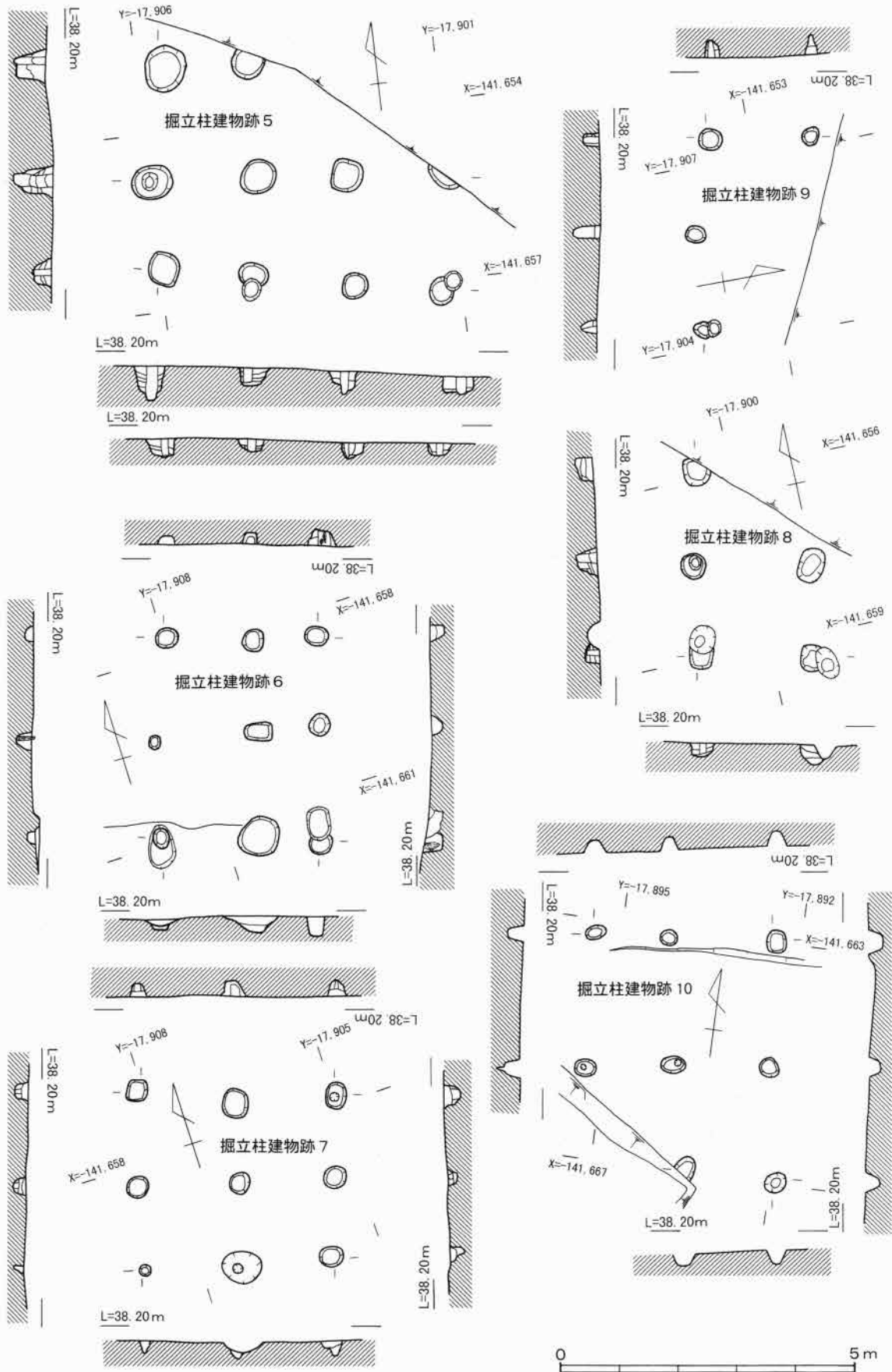
南北の柱間は1.4mである。

**掘立柱建物跡8(第49図)** やや大形の柱掘り方を有する掘立柱建物跡で、規模は2間以上×1間で、柱間は桁行が1.5m、梁間が2mを測る。第52図11の土器が出土している。

**掘立柱建物跡9(第49図)** 2間×1間以上の掘立柱建物跡で、柱間は1.65mを測る。建物の大半は調査地外に伸びる。やや小振りの丸ピットである。

**掘立柱建物跡10(第49図)** 2間×2間の掘立柱建物跡で、東西1.5m・南北2mの柱間を有する。唯一、竪穴式住居跡4の東側で復元できた掘立柱建物跡である。

これらの掘立柱建物跡の柱穴からは、掘立柱建物跡8の柱穴内から第52図11の土師器が図化し得ただけである。この土師器は古墳時代後期のものと考えて大過なからう。図化できない細片で



第49図 掘立柱建物跡実測図(2)

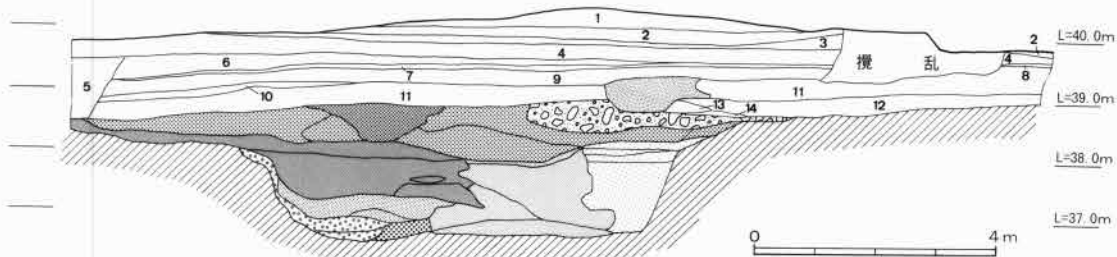
は、掘立柱建物跡10の柱穴からTK47型式の特徴を持つ須恵器杯身片が、東端部で検出した一群の柱穴の一つからは、TK209型式もしくはTK217型式の須恵器杯身が出土している。これらのことから、掘立柱建物跡は、6世紀代全般にわたる古墳時代後期のものと考えたい。

これら、東部地区で検出した掘立柱建物跡の分布は、ほぼ、Y=-17,910を西限としており、これより西側では、柱穴などの遺構もほとんど検出できなかった。この点については、まとめて若干の検討を加えたい。

**流路11**(第50図、図版第36-1~3) 調査地の中央で検出した自然の流路で、幅約7m、最大の深さ約1.2mを測る。第50図は、南壁の土層実測図である。流路内の堆積を子細に観察すると、下位から上位に礫-砂-シルト-粘土の堆積を一単位とした堆積が認められ、この単位を洪水堆積の一単位とするならば、9回以上の洪水が生じたものと判断される。堆積土中には、直径約15cm・長さ3m以上の自然の流木が入っており、洪水時の流量の多さをしのばすものである。内部からは縄文土器片(第56図)とともに、ローリングを受けた須恵器甕腹片が出土したが、出土層位の第10・11層の上では柱穴などの遺構を確認しており、ある時期以降には、新たな流路が形成されたためか、この流路は全くその痕跡が地表から無くなったものと思われる。現地形では調査地の西側の丘陵地は住宅や霊園が分布し、宅地造成前の地形は全く認められないが、造成前の地図を見ると、この調査地の西は谷が分布しており、その谷から流れ出る河川の一部と判断される。

**流路12**(図版第37-1~3) 調査地の東部で検出した流路跡で、東岸はゆるやかに下る傾斜地となっており、埋土には、黒褐色系統の砂質土~粘質土が堆積している。この堆積土中には、弥生時代中期~古墳時代後期の遺物が含まれていた。幅約30mにわたってゆるやかに傾斜し、東岸近くで幅2~5m、最大の深さ約1mを測るえぐれが数条確認できた。このえぐれの中には、弥生土器がほぼ一個体、バラバラになって出土しており(第53図19、図版第37-3)、他の時期の土器片は出土していない。その流れの方向より、相楽銅鐸が出土した谷から、大島遺跡を南北に分断して流れる谷の末端と考えられる。

**土器棺13**(第51図、図版第38-1) 流路11の東で検出した土器埋納坑で、内部には布留式甕が横位に埋納されている。土坑は、ほぼ正南北に穿たれていた長辺57cm・短辺35cmの長楕円形を呈しており、その南側に偏して甕が納められていた。北半の一群は別個体の甕の体部片で、口縁の



第50図 流路11南壁土層図

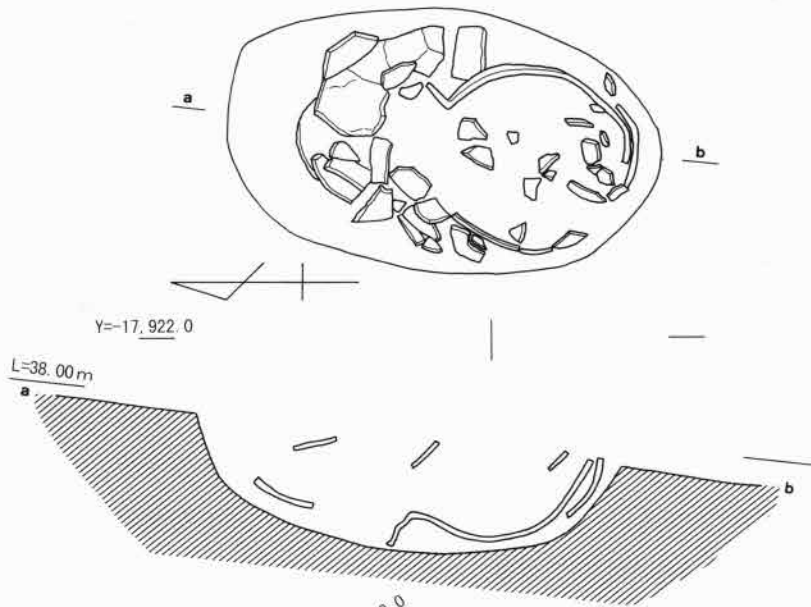
- |               |              |              |             |               |
|---------------|--------------|--------------|-------------|---------------|
| 1. 盛土         | 2. 耕作土(灰色土)  | 3. 明黄褐色土(床土) | 4. 淡黄灰色砂質土  | 5. 造成土(淡茶灰色土) |
| 6. 淡灰色土(旧耕作土) | 7. 明黄褐色土(床土) | 8. 明褐色土(床土)  | 9. 灰色土      |               |
| 10. 灰色混明黄褐色土  | 11. 明黄褐色砂土   | 12. 暗茶褐色土    | 13. 淡黄褐色砂質土 |               |
| 14. 淡灰色砂質土    |              |              |             |               |



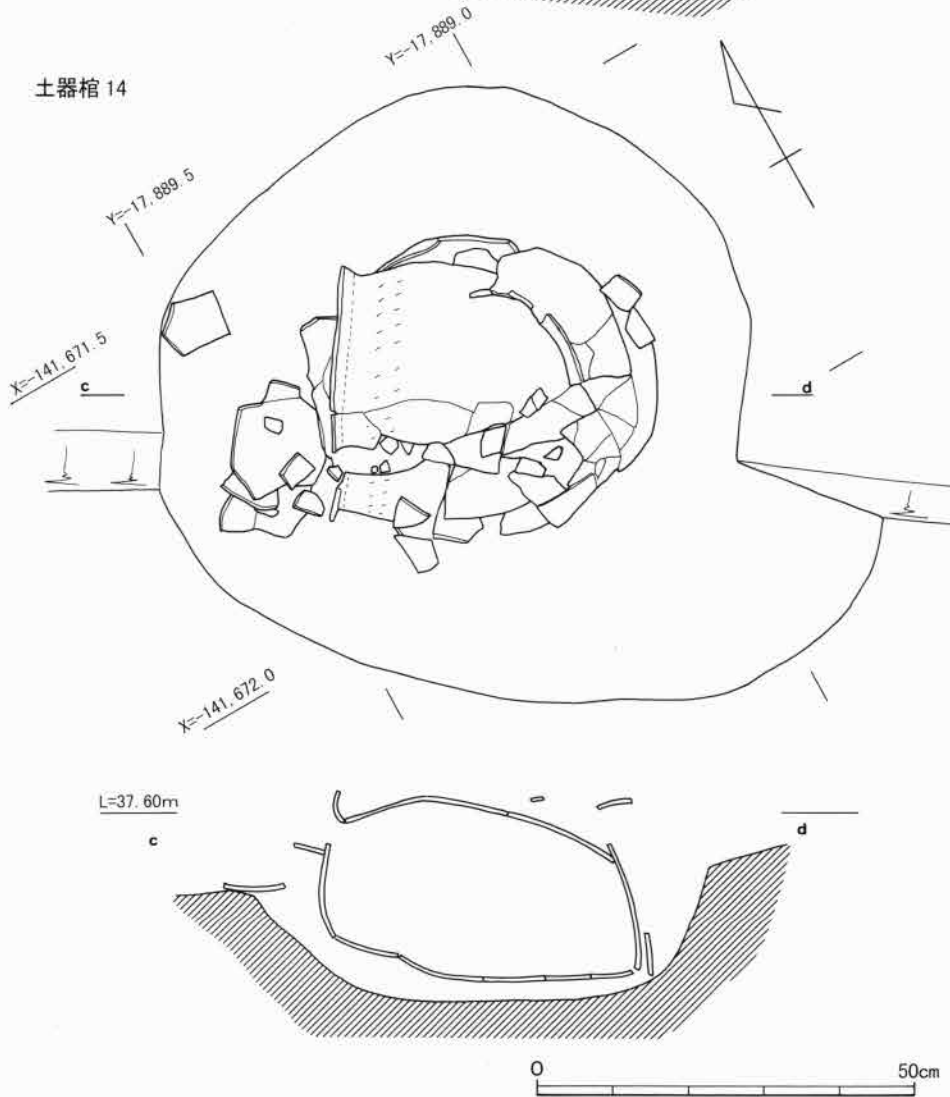
土器棺 13

Y=-17,921.5

X=-141,650.0



土器棺 14



0 50cm

第51図 土器棺13・14実測図

蓋に用いられていたと想定される。この土器棺の上半はきれいに削平を受けている。

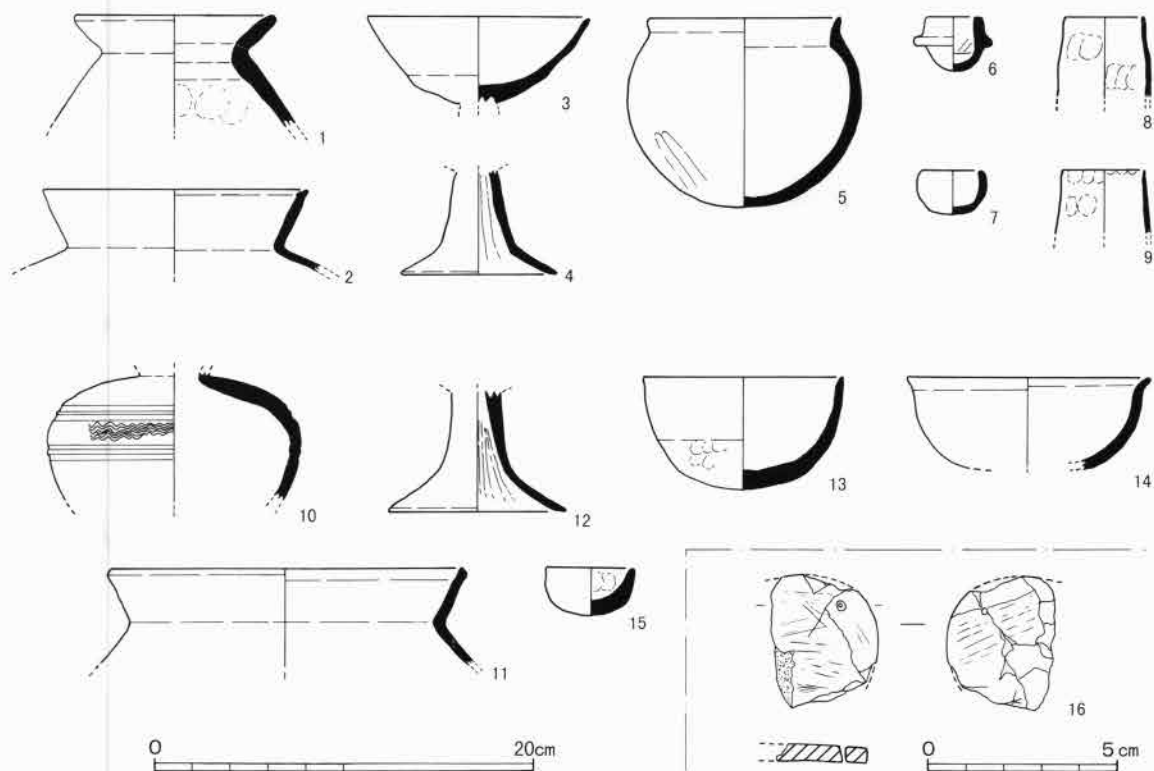
**土器棺14**(第51図、図版第38-2) 東部地区の中央で検出した土器埋納遺構である。大形の壺(第53図21)を縦に半さいし、その半分を底面に起き、蓋には、大形の甕(第53図22)を縦に半さいした一半を用いている。この甕のもう一半は、底部側の小口に口縁を上にして立てている。平面図で言うと、甕の口縁部の西側に一群の土器片が出土しているが、これは下部に置かれた壺の底部付近のものである。おそらく、口縁側の小口を塞ぐものとして利用されていたものであろう。この土器棺は長さ1m・幅0.8m(共に復元)の土坑に納められていた。内部からの出土遺物は全く無かった。

**S X105**(図版第38-3) 試掘2トレンチの東で検出した隅丸方形の土坑で、0.9m×1m、最大の深さ10cmと浅いものである。内部からは、骨片と思われる細片が少量出土し、底面から約3cmの暗灰色粘砂の上では、植物繊維で編まれた状態の炭化物がほぼ一面で検出された。黄色混灰色土上面で検出した。内部からは土師器の細片が出土しているが、細かな時期についてはよく分からない。

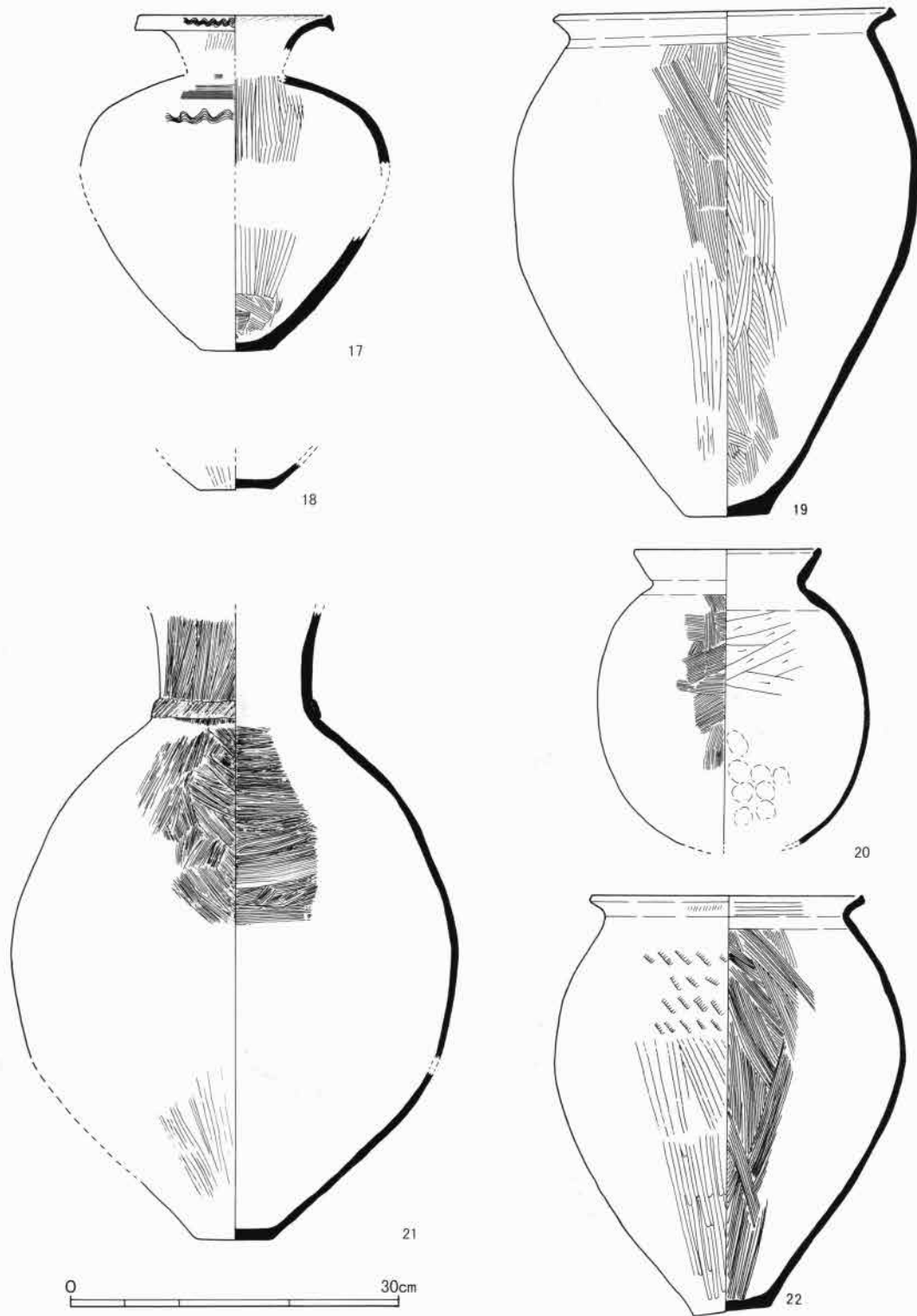
### (3) 出土遺物

出土遺物には弥生時代から古墳時代の遺物があり、その大半が古墳時代の土器である。

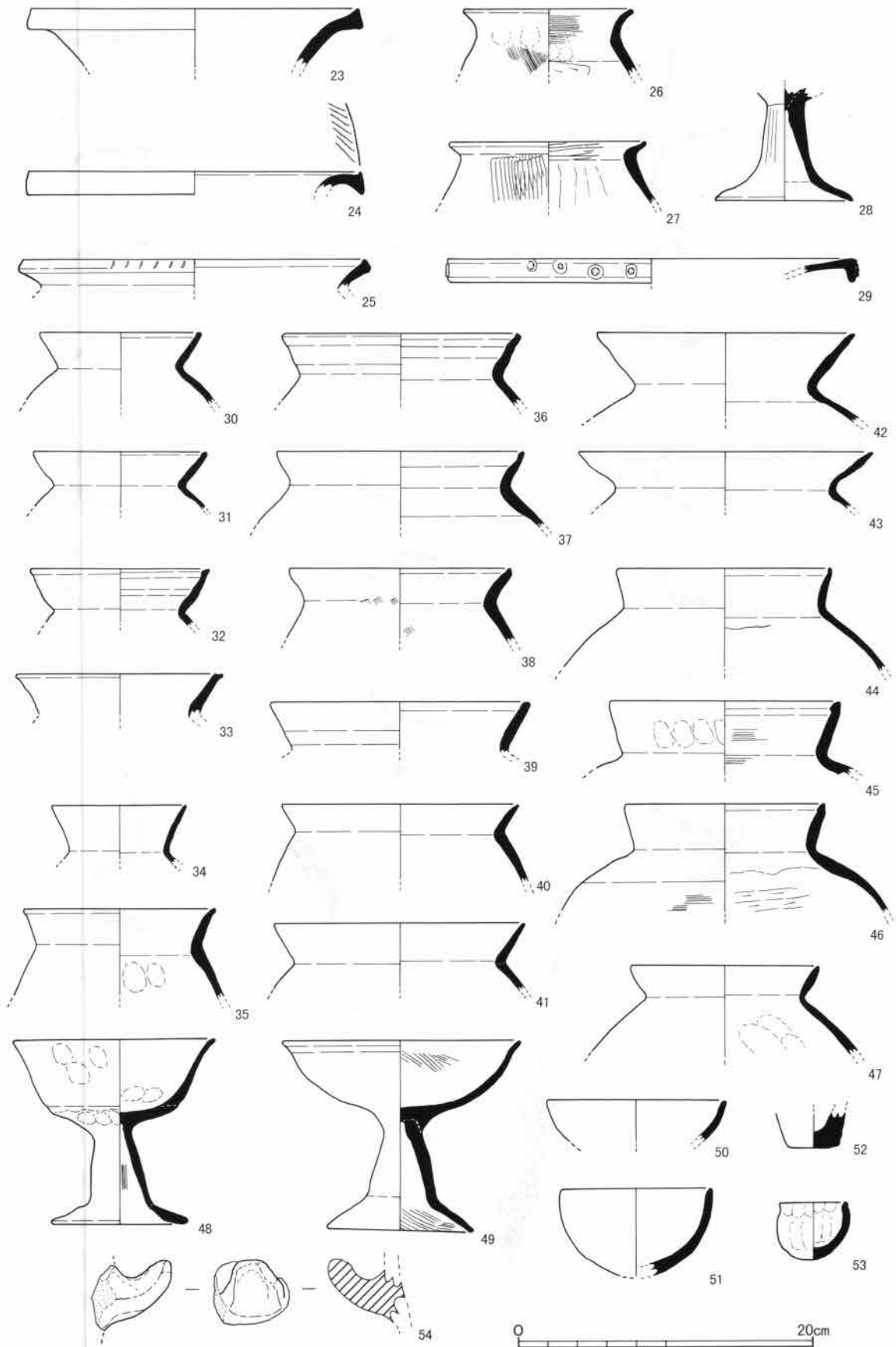
第52図は竪穴式住居跡や柱穴から出土した遺物の実測図である。掘立柱建物跡5の柱穴からは、15・16のミニチュア土器や有孔円板が出土している。竪穴式住居跡4からは、須恵質の製塩土器(8・9)が出土している。第53図は土器棺および流路12から出土した遺物である。17~19は流路12内から出土したもので、他に、第54図27・28の弥生土器が流路12から出土している。17・19と



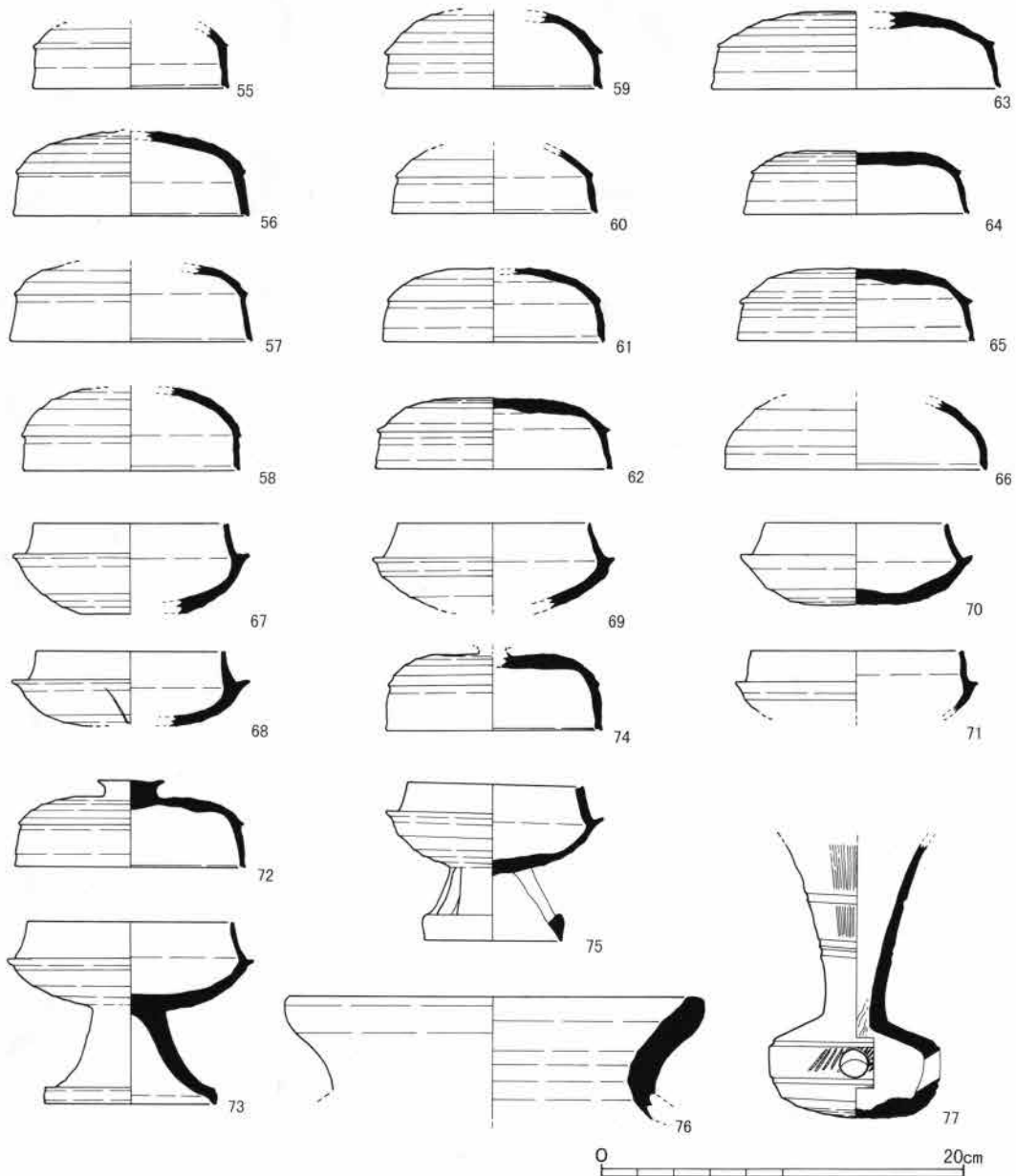
第52図 出土遺物実測図(1)



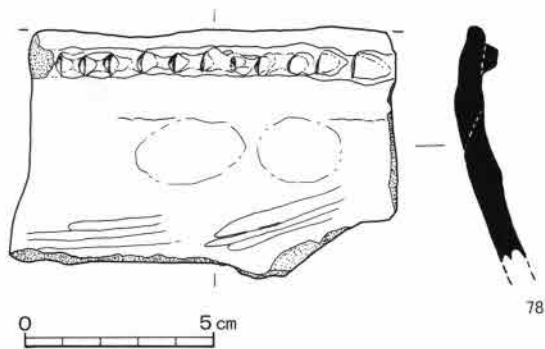
第53図 出土遺物実測図(2)



第54図 出土遺物実測図(3)

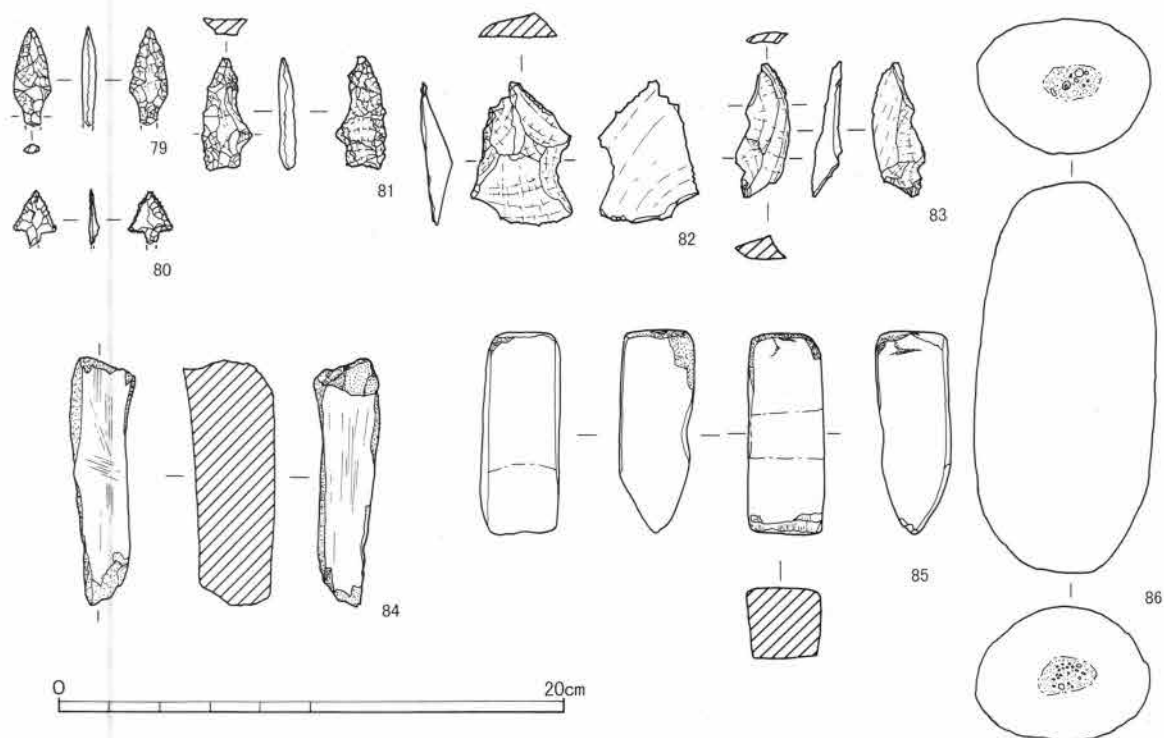


第55図 出土遺物実測図(4)



第56図 出土遺物実測図(5)

もに、流路12の東端にあるくびれ部内で、細片に割れて出土した。17は同一個体であるが、接合面は無い。20は布留式の甕で、土器棺13から出土し、21・22は弥生時代中期の壺と甕で、土器棺14から出土している。第54図は主として包含層から出土した弥生土器・土師器である。第55図は包含層から出土した須恵器である。須恵器はTK47～TK10型式が主体で、ごくわずかにTK43型式が含まれる。第56図は、流路12から出土した縄文時代晩



第57図 出土遺物実測図(6)

期の土器片で、周辺に同時期の集落遺構が包蔵されている可能性を示すものである。第57図は出土した石器の実測図で、石鏃や石斧、叩き石、削器などが出土している。

出土した土師器を見ると、掘立柱建物跡の時期と考えている古墳時代後期の土器は少なく、古墳時代初頭の布留式土器が比較的目立つ。これらは、調査地の西南部から流入したものと考えられ、その時期の集落遺構が隣接して存在するものと推測される。

#### 4. ま と め

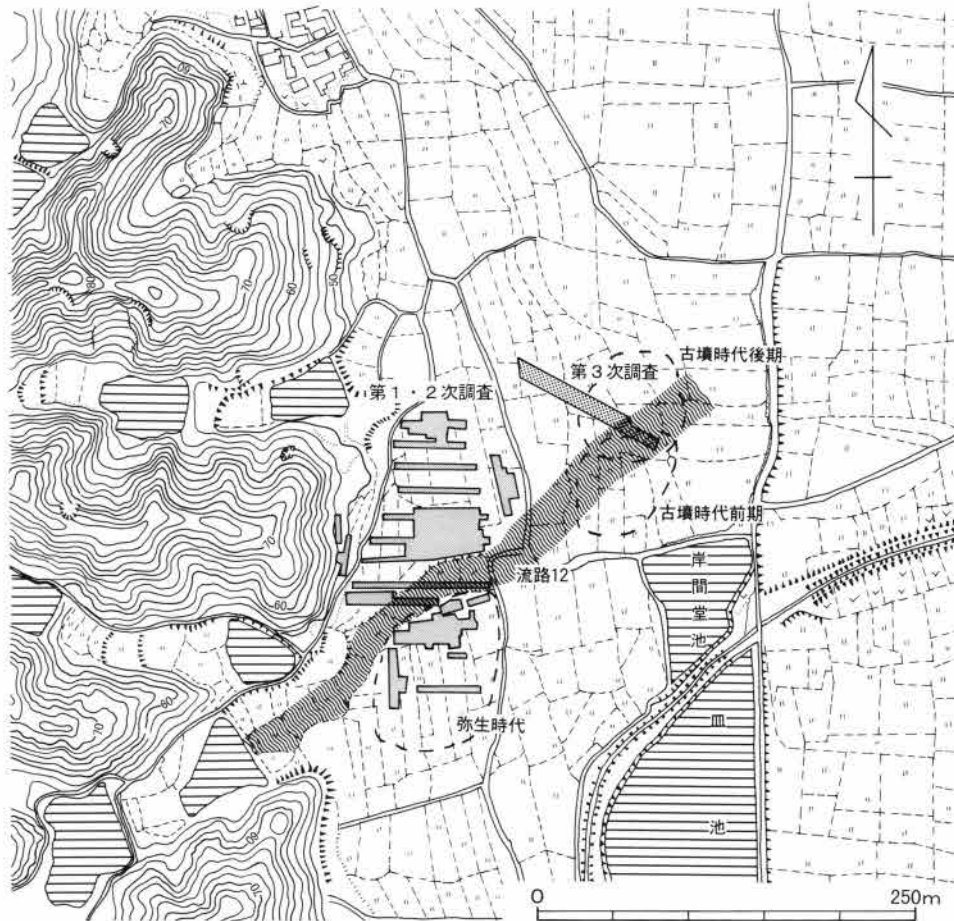
今回の調査地は、従来知られていた大島遺跡の範囲外に位置しているが、調査の結果、古墳時代後期の集落遺構と流路跡を検出し、遺跡の範囲が東側に広がっていることが判明した。また、北西から南東に流れ込む流路12が見つかり、その検出した位置とその流れの方向から、1・2次調査で検出した大島遺跡の中央を分断する谷の末端と判断される。その流路上で古墳時代初頭の土器が比較的多く見られること、土器棺11内には布留式土器が埋納されていたことから、今回の調査地に隣接した南側にその時期の集落が存在したことが推測される。さらに、流路12内からは縄文土器片が出土し、近隣に縄文時代の集落跡が存在した可能性を指摘できる。第58図は大島遺跡の居住域の分布を示したもので、1・2次調査南半の弥生時代中期の集落、北半の奈良時代の瓦屋、今回の調査地の東部地区を中心とした古墳時代後期の集落、南側に広がっていると想定される古墳時代初頭～中期の集落を図示してある。

今回検出した古墳時代後期の遺構が、もともとは調査地の西部地区にまで広がっていたかを検討したい。古墳時代の掘立柱建物跡などの柱穴は、東部地区では多く検出できたが、西部地区では全く検出できなかった。一つの考えは、西部地区にも集落遺構が分布していたが、中世以降と

想定される田畑の造成のために、それ以前の土層や遺構は全て削平されてしまったという考えである。この問題を考える前に、掘立柱建物跡5・6・7を西限として遺構が急に分布しなくなる点をまず検討したい。布留式甕を埋納した土器棺13が流路跡11の東肩で検出できたことから、流路11の西側は、さほど後世の削平を受けていないと言える。そうすると、このような掘立柱建物跡の分布は、後世の削平の結果ではなくて、元々の建物跡の分布を示しているものと言える。すなわち、掘立柱建物跡5・6・7の西側には、掘立柱建物が建てられていなかったと言え、建物が比較的自由に占地した一般的な集落というよりも、何らかの規制が働いた集落と考えられる。掘立柱建物を中心に居住区が構成されており、有力者の“屋敷地”であったとも考えられる。

また、流路11が西部地区と東部地区の間にあり、この地点が丘陵の末端に位置していることを評価し、しかも西部地区の棚田の段差が大きいことを、東部地区と比べて、西部地区は傾斜がかなりきつかったものと考えられる。さきの“屋敷地”の性格付けは抜きにしても、掘立柱建物跡5・6・7を西限とする“規制”を重視し、西部地区はかなりの傾斜地であったと考えられるので、西部地区の傾斜面にはもともと古墳時代後期の集落は分布していなかったと推定される。

周辺の同時期の遺跡では、東南東約1kmで弓田遺跡が調査されている。ここでは竪穴式住居跡が3棟検出されているが、多量の埴輪が出土しているため、通常の集落ではないと考えられており、埴輪の集荷場や埴輪を用いた水辺の祭祀場といった性格が指摘されている。大島遺跡は弓田



第58図 大島遺跡居住域配置図

遺跡を見渡せる位置にあり、何らかの関連が想定される場所である。

また、近畿地方においては、掘立柱建物跡ばかりで集落が構成されるようになるのは、7世紀以降と考えられており、今回の大島遺跡の調査は、それよりもやや早い段階で掘立柱建物跡に移行したと考えられる資料となる。とは言っても、先の“屋敷地”という性格づけも含めて、小範囲を発掘調査しただけの推論であるので即断は避けるべきであろう。また、今回の遺構群の性格付けには、有孔円板やミニチュア土器の出土が意味する内容も大きく関わってくるであろう。将来の隣接地の調査の結果をまって、検討したい。

(岩松 保)

注1 現地調査及び整理作業に参加していただいたのは以下の方々である(敬称略)。

村山和幸・川嶋聡子・沢井亮祐・児玉 真・竹村弘美・大西美智子・池上千賀子・飯尾和恵・山中道代

注2 秋山浩三「京都府(丹波・山城)」(『日本土器製塩研究』 青木書店) 1994

注3 山田 猛「七世紀初頭における集落構成の変質」(『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会) 1981

#### 参考文献

『木津町史』史料篇I 木津町史編さん委員会 1984

橋本 稔「弓田遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

辻本和美ほか「弓田遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第74冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

付表4 大島遺跡出土土器観察表(単位cm)

番号	器種	器形	器径 ※復元	器高 ※現存	調整(外)	調整(内)	焼成	胎土	色調	残存率	備考	出土地点
1	土師器	甕	口径10.6	※5.9	ナデ	ユピオサエ・ナデ	良	密	暗灰褐色	頸部1/4		竪穴式住居跡4
2	土師器	甕	口径13.8※	※4.4	ヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	密	淡赤褐色	口縁1/4		竪穴式住居跡4・SK95
3	土師器	高杯	口径11.6	※4.5	磨滅	磨滅	密	良	茶褐色	杯部ほぼ完存		竪穴式住居跡4
4	土師器	高杯	底径8.2	※5.5	剥離	ナデ	良	密	橙褐色	脚部85%		竪穴式住居跡4
5	土師器	甕	口径10.0※	9.8	磨滅(指ナデ)	磨滅(ナデ)	良	やや粗	淡赤褐色	全体1/4		竪穴式住居跡4
6	土師器	ミニチュア	口径2.9	2.85	指ナデ	ナデ	良	密	褐色	90%		竪穴式住居跡4
7	土師器	ミニチュア	口径3.2※	2.3	磨滅	磨滅	良	密	灰褐色	全体1/2		竪穴式住居跡4
8		製塩土器	口径4.0※	※4.2	ヨコナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・指頭圧痕	良	密	灰色	口縁1/4		竪穴式住居跡4
9		製塩土器	口径4.4	※3.3	手捏ね(指頭圧痕)	手捏ね(指頭圧痕)	良	粗	明灰褐色	口縁90%		竪穴式住居跡4
10	須恵器	甕	体部13.4	※7.7	ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	灰色～濃灰色	体部2/3		東部SK110
11	土師器	甕	口径18.8※	※5.3	磨滅(ナデ)	磨滅(ナデ)柱状部内面	良	やや粗	淡赤褐色	口縁1/6		掘立柱建物跡8・SK26
12	土師器	高杯	底径9.3	※6.3	ナデ	絞り痕を横方向に調整	良	密	淡褐色	底面4/5		掘立柱建物跡5・SK23



番号	器種	器形	器径 ※復元	器高 ※現存	調整(外)	調整(内)	焼成	胎土	色調	残存率	備考	出土地点
13	土師器	椀	口径10.6	5.8	ナデ	ナデ	良	密	橙灰褐色	完形		竪穴式住居跡 4・SK220
14	土師器	椀	口径12.7※	※4.7	磨滅	磨滅	良	密	橙褐色	口縁1/4		東部SK42
15	土師器	ミニ チュア	口径4.6	2.6	手捏ね(指頭 圧痕)	手捏ね(指頭 圧痕)	良	密	灰褐色	完存		掘立柱建物跡 5・SK86
16		有孔円 板	3.6×2.8× 0.5									掘立柱建物跡 5・SK23
17	弥生土 器	壺	口径17.0※	復元 高 30.7	ミガキ	ハケメ	良	密	淡黄褐色	全体1/4		流路12
18	弥生土 器	壺	底径6.6	※2.3	ミガキ	ナデ	良	密	灰褐色	底面2/3		流路12
19	弥生土 器	甕	口径30～ 31.5	45.5	ハケメ・ケ ズリ	ハケメ	良	密	灰褐色	3/4		流路12
20	土師器	甕	口径16.6	26.7	ハケメ・ナ デ	ケズリ・ナ デ	良	密	明黄褐色	3/5		土器棺13
21	弥生土 器	壺	頸径15.4		ハケ・ケズ リ	ハケ	良	密	白褐色 ～橙褐色	全体1/2		土器棺14
22	弥生土 器	甕	口径29.3	43.7	ヘラ状工具 のナデ・ハ ケメ・ハケ メ状工具の 列点文	ハケメ	良	密	灰褐色	全体85%		土器棺14
23	弥生土 器	壺	口径22.2※	※4.0	磨滅	磨滅	良	やや 粗	淡褐色	口縁1/6		褐灰色砂質土
24	弥生土 器	壺	口径22.4※	※1.6	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	淡灰褐色	口縁1/9		東部・竪穴式 住居跡4東・ 青灰色粘砂土
25	弥生土 器	甕	口径23.2※	※2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	淡褐色	口縁1/12	口縁部 刻み目	黄色混茶褐色 土
26	弥生土 器	甕	口径11.2※	※4.5	ハケメ・指 頭圧痕	ハケメ・ケズ リ	良	密	褐色	口縁部 1/4		黄色混茶褐色 土
27	弥生土 器	甕	口径13.2※	※4.2	ハケメ・ナ デ	ハケメ	良	密	黒褐色	口縁1/4		流路12
28	弥生土 器	高杯	底径9.3※	※7.5	ミガキ・ナ デ	ナデ	良	密	橙褐色	底面1/3		流路12
29	弥生土 器	高杯	口径27.5※	※1.6	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	淡褐色	口縁1/10		流路12
30	土師器	甕	口径10.8※	※4.8	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	赤褐色	口縁2/5		流路12(黒灰 色土)
31	土師器	甕	口径11.7※	※3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	明橙褐色	口縁1/6		試掘3トレ (黒灰色土)
32	土師器	甕	口径12.0※	※3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	暗褐色	口縁1/8		黄色混茶褐色 土
33	土師器	甕	口径13.9※	※3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	黄褐色	1/6		黄色混茶褐色 土
34	土師器	壺	口径9.0※	※4.0	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	灰赤褐色	口縁2/5		東部北側・褐 灰色砂質土
35	土師器	甕	口径12.8※	※6.2	磨滅	指頭圧痕・磨 滅	良	密	褐色	口縁1/8		黄色混茶褐色 土
36	土師器	甕	口径15.8※	※4.9	ナデ	ナデ	良	やや 粗	淡茶褐色 ～黒 灰色	口縁1/4		黄色混灰色土
37	土師器	甕	口径16.8※	※5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	白褐色	口縁1/8		黄色混茶褐色 土
38	弥生土 器	甕	口径14.8※	※5.0	磨滅(ハケ メ)	磨滅(ハケ メ・ナデ?)	良	密	暗褐色	頸部1/4	生駒西 麓産	東部北側・褐 灰色砂質土
39	土師器	甕	口径17.4※	※4.5	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	褐色	口縁1/8		黄色混茶褐色 土
40	土師器	甕	口径16.0※	※5.2	磨滅	磨滅	良	密	淡褐色	口縁1/8		西部上段・暗 灰色砂質土

## 大島遺跡第3次発掘調査概要

41	土師器	甕	口径17.0※	※4.7	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	淡茶灰色	口縁1/4		黄色砂混淡褐色土
42	土師器	甕	口径17.4※	※6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	淡灰褐色	口縁1/6		試掘2トレ北側排水溝・暗茶灰色砂質土
43	土師器	甕	口径19.8※	※3.7	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	暗赤褐色	口縁1/6		黄色混茶褐色土
44	土師器	甕	口径14.4※	※6.9	磨滅	磨滅	良	密	淡褐色	頸部1/3		黄色混灰色土
45	土師器	甕	口径15.5※	※5.1	ヨコナデ・指頭圧痕	ヨコナデ	良	密	暗黄褐色	口縁1/10		黄色混茶褐色土
46	土師器	甕	口径13.4※	※7.3	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	良	やや粗	白褐色	頸部1/2		東部北・排水溝
47	土師器	甕	口径12.8※	※6.3	ナデ	ナデ	良	密	淡灰褐色	口縁1/6		黄色混茶褐色土
48	土師器	高杯	口径13.4	11.5 ~ 12.7	指頭圧痕+ナデ	指頭圧痕+ナデ	良	やや粗	淡白褐色	全体80%		黒灰色土
49	土師器	高杯	口径16.2	12.9	ナデ	ハケメ・ナデ	良	やや軟	淡褐色	杯部完存・脚部約70%		試掘2トレ北東褐色砂質土
50	土師器	椀	口径12.0※	※2.8	磨滅	磨滅	良	密	赤褐色	口縁1/6		黄色混茶褐色土
51	土師器	椀	口径10.0※	※5.1	剝離	ナデ	良	やや粗	淡褐色	全体1/4		黒灰色土
52	土師器	ミニチュア	底径3.2※	※2.4	ナデ	ナデ	良	やや粗	灰黒褐色	底部ほぼ完存		東部北側・褐色砂質土
53	土師器	ミニチュア	口径4.5	4.0	手捏ね(指頭圧痕)	手捏ね(指頭圧痕)	良	密	淡白茶色	全体95%		黄色混茶褐色土
54	土師器	甕把手					良	密	褐色	把手完存		東部北側・褐色砂質土
55	須恵器	杯蓋	口径10.7※	※3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	濃灰色	口縁1/6		黄色混茶褐色土
56	須恵器	杯蓋	口径12.8※	4.7	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	濃灰色	全体2/5		黄色混茶褐色土
57	須恵器	高杯	口径13.2※	※4.2	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	やや軟	密	淡灰褐色	全体1/5		東部北側・褐色砂質土
58	須恵器	杯蓋	口径11.8※	4.6	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	灰色~青灰色	全体1/3		黄色混茶褐色土
59	須恵器	杯蓋	口径11.8※	※4.2	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	灰色	全体2/5		黄色混茶褐色土
60	須恵器	杯蓋	口径11.2※	※3.6	ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	灰色	口縁1/6		黄色混茶褐色土
61	須恵器	杯蓋	口径12.1※	3.95	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	濃灰色	全体1/3		中央上段・灰色砂質土
62	須恵器	杯蓋	口径12.9※	3.9	ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	灰色	全体1/3		黄色砂混淡褐色土
66	須恵器	杯蓋	口径14.2※	※3.8	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	灰色	口縁部1/4		黒灰色土
67	須恵器	杯身	口径10.7※	5.0	ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	淡灰色	口縁1/4		黄色砂混淡褐色土
68	土師器	甕	口径13.9※	※3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	良	密	褐色	口縁1/6		黄色砂混淡褐色土
69	須恵器	杯身	口径10.6※	※4.7	ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	暗灰色	口縁1/4		黄色混茶褐色土
70	須恵器	杯身	口径10.0	4.4	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	良	淡青灰色	45%	ヘラ記号	黄色砂混淡褐色土
71	須恵器	杯身	口径11.6※	※3.4	ケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	良	密	濃灰色	口縁1/8		黄色混茶褐色土
72	須恵器	杯蓋	口径12.6※	4.8	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	灰色	全体1/2		黒灰色土
73	須恵器	高杯	口径11.4	10.1	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	褐色	全体50%		黄色砂混淡褐色土

番号	器種	器形	器径 ※復元	器高 ※現存	調整(外)	調整(内)	焼成	胎土	色調	残存率	備考	出土地点
74	須恵器	杯蓋	口径12.0※	※4.3	ロクロナ デ・ケズリ	ロクロナデ	良	密	青灰色	1/2弱		黄色混茶褐色土
75	須恵器	高杯	口径9.6※	8.6	ケズリ・ロ クロナデ	ロクロナデ	良	良	灰色	全体1/2		試掘2トレ北 東・褐色砂 質土
76	須恵器	壺	口径22.4※	※6.8	ロクロナデ	ロクロナデ・ ケズリ	良	密	灰色	口縁1/6		西端上段・灰 色砂質土
77	須恵器	甕	体部9.4	※ 15.0	ロクロナ デ・ケズリ	ロクロナデ	良	良	暗灰色	全体60%		黄色混茶褐色 土
78	縄文土 器	深鉢										流路11

付表5 大島遺跡出土石製品観察表(単位cm)

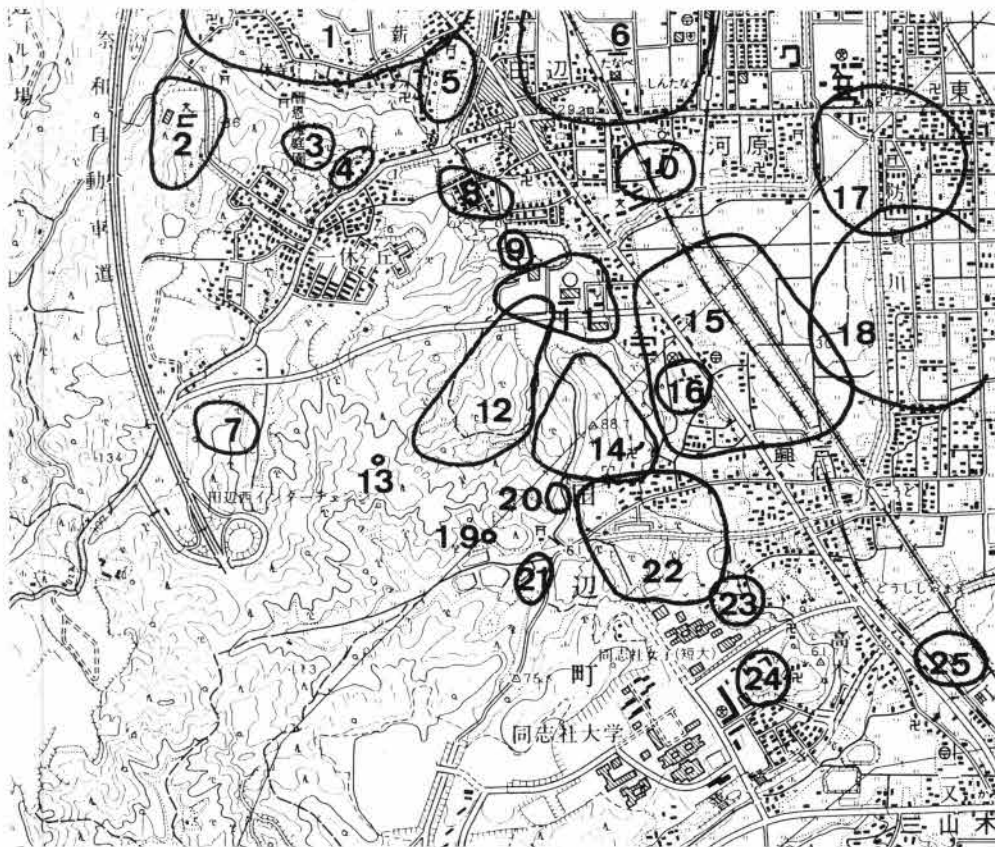
番号	器形	大きさ	材質	備考	出土地点	番号	材質	大きさ	材質	備考	出土地点
79	石鏃	4.0×2.5×0.6	サヌカイ ト		竪穴式住 居跡4内 精査	83	石核	5.4×2.0×0.9	サヌカイ ト		土器棺14
80	石鏃	2.1×1.8×0.4	サヌカイ ト		東部北側 溝清掃中	84	砥石	9.6×2.5×3.5	粘板岩		東部・黄色混 茶褐色土
81	削器	4.5×2.6×0.6	サヌカイ ト		流路11	85	石斧	7.9×3.9×2.9	頁岩		S K162
82	削器	6.6×4.0×1.1	サヌカイ ト		竪穴式住 居跡4内 精査	86	叩き石	14.8×7.0× 5.4	砂岩		掘立柱建物跡 7・S K134

## 5. 興戸宮ノ前遺跡第3次発掘調査概要

### 1. はじめに

興戸宮ノ前遺跡第3次調査は主要地方道八幡木津線建設工事に伴い、京都府田辺土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は京田辺市興戸宮ノ前に所在し、現状は田畑となっている。

試掘調査は京都府教育委員会が行い、その結果をもとにトレンチを設定した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、同調査員藤井 整が担当した。調査期間は平成10年8月25日から同年10月29日までで、調査面積は約700m<sup>2</sup>である。発掘調査を進めるにあたっては、京都府教育委員会ならびに京田辺市教育委員会の指導と助言をいただいた。なお、調査に係る経費は、京都府土木建築部が負担した。



第59図 調査地位置図(周辺遺跡分布図) (1/25,000 田辺)

- |             |             |           |             |          |          |
|-------------|-------------|-----------|-------------|----------|----------|
| 1. 薪遺跡      | 2. 堀切古墳群    | 3. 天理山古墳群 | 4. 小欠古墳群    | 5. 棚倉遺跡  | 6. 稲葉遺跡  |
| 7. 茂ヶ谷遺跡    | 8. 尼ヶ池遺跡    | 9. 竹ノ脇遺跡  | 10. 河原遺跡    | 11. 田辺遺跡 | 12. 田辺城跡 |
| 13. 丹後谷古墳   | 14. 興戸古墳群   | 15. 興戸遺跡  | 16. 興戸廃寺    | 17. 鍵田遺跡 | 18. 大切遺跡 |
| 19. 酒坪古墳    | 20. 興戸宮ノ前窯跡 | 21. 川原谷遺跡 | 22. 興戸宮ノ前遺跡 | 23. 興戸城跡 |          |
| 24. 田辺天神山遺跡 | 25. 野神遺跡    |           |             |          |          |

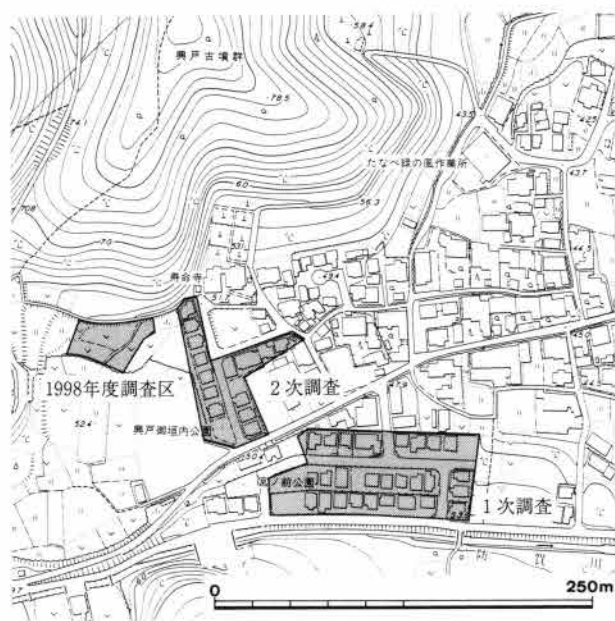
## 2. 過去の調査

興戸宮ノ前遺跡における過去2回の調査はいずれも田辺町教育委員会(現京田辺市教育委員会)によって行われている。

第1次調査では防賀川の南岸に中世の遺跡が存在する可能性が指摘されたが、明確な遺構は検出されなかった。<sup>(注1)</sup>

今回の調査区に近接する第2次調査では15世紀初頭の遺物片とともに、五輪塔の一部が出土している。<sup>(注2)</sup>

この五輪塔については、今回の調査区の東に位置する寿命寺との関連が指摘されており、寺院関連の遺構が検出されることが予想された。



第60図 調査地位置図 (1/5000)

## 3. 調査の概要

調査対象地は丘陵裾部で、北側が興戸古墳群の所在する丘陵、南側は扇状地である。調査地は現状では棚田となっており、各田ごとに北側から順に1～3トレンチとして調査を行った。

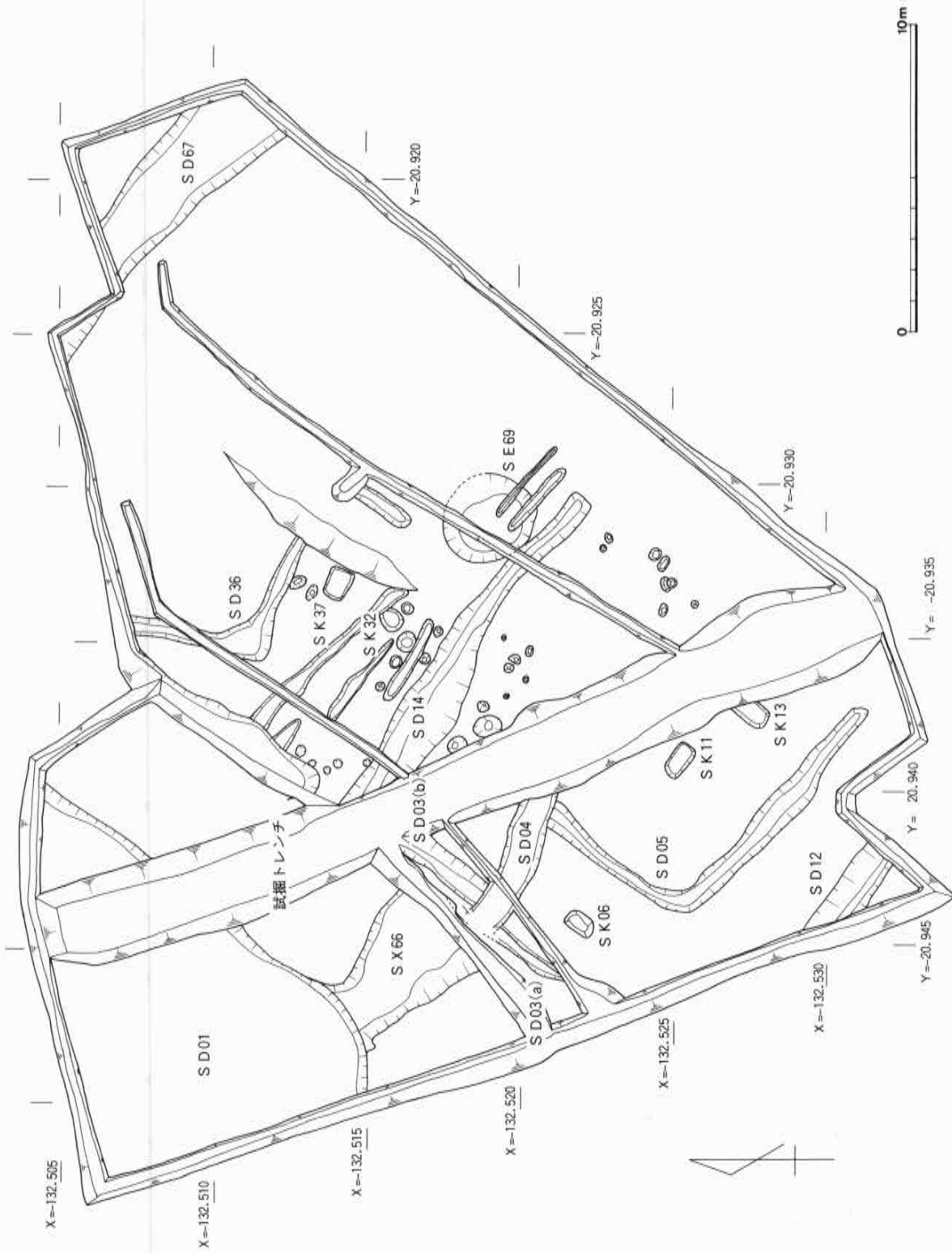
今回の調査では1トレンチにおいて溝SD01と、それに伴う木樋SX66が出土した。木樋によって流された水は曲物SX68によって受けられ、濁らないように配慮されている。水は区画溝の可能性のある溝SD03・SD14によって導水されるが、建物跡は検出できなかったため、その性格等は不明である。

2トレンチでは木樋に伴う溝(SD03・14)を検出した。特にSD14からは、花押やカタカナが書かれた墨書木板や漆椀が出土している。この溝以外には、墓墳の可能性のある方形の土壇4基(SK06・11・13・37)と、桶棺の可能性のある土壇(SK32)を1基検出した。

また、SD05からは障子の棧を連想させる用途不明の木製の組み物が出土した。組み物のサイズはいずれも40×20cm程度で、折り重なるようにして3個に分かれて出土した。今のところ類例は見つかっていない。

3トレンチは耕作に伴う造成によって著しく削平されており、遺構の密度は低かった。このトレンチでは、SD01と関連する可能性のある溝SD67と、石組みの井戸(SE69)1基を検出した。この井戸からは、口縁内面に「□南備□」と墨書のある土師皿とともに漆椀、瀬戸、美濃、中国産の天目茶椀や瓦質の羽釜などが出土した。

これらの遺構、遺物はいずれも中世のもので、今回の調査では近接する興戸古墳群、興戸窯跡に関連する遺構と遺物、また第2次調査で出土している弥生時代の遺物等は出土しなかった。



第61図 調査地遺構平面図(1/200)

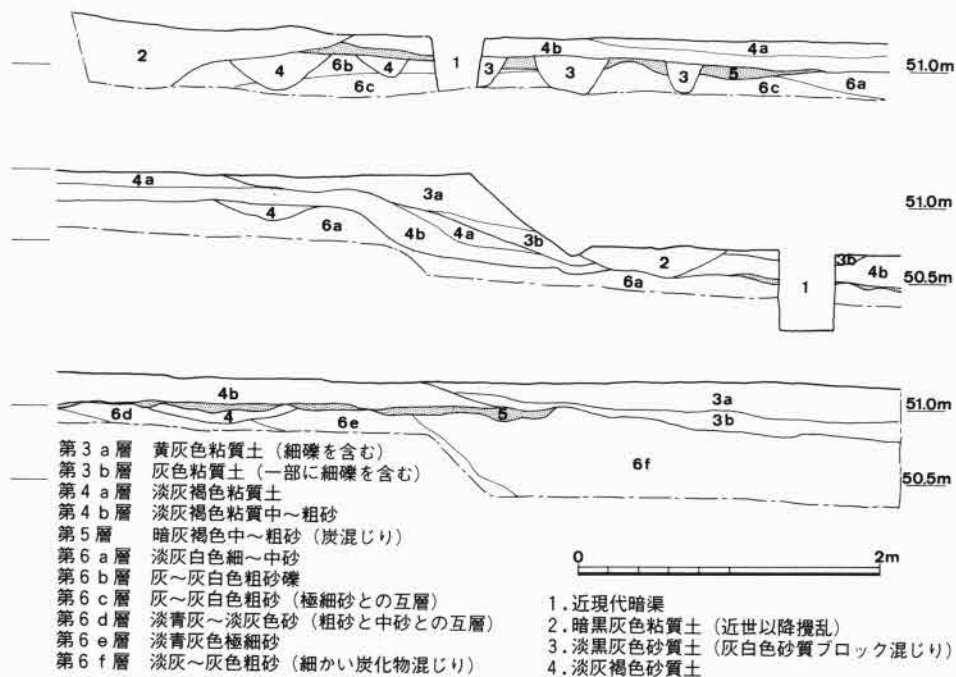
(1)土層の堆積状況

調査地は、興戸古墳群の位置する丘陵の裾部から、現在は水田となっている湿地にかけての範囲である。湿地は現在天井川になっている防賀川の旧流路の痕跡にあたるものと考えられ、調査区内でも遺構は河川堆積の上に掘削されていた。地山と考えられる第7層は、調査区の北端の丘陵裾で確認されたが、それ以外の部分では河川堆積しか確認できない。調査区の南100mの地点で行われていた工事による掘削でも、T P 47.000m付近まで掘削されていたが地山とみられる層は確認できなかった。

2トレンチから3トレンチにかけての基本層序は以下の通りである。地山と考えられる第7層明黄褐色粘質土(礫を強く含む)は、1トレンチ北端でその一部が確認できたが、河川堆積である第6層によって削られ、その他の地点では検出できなかった。第6層は、防賀川の旧流路堆積と考えられ、重層的に切り合いながら調査区全体に厚く堆積している。この層から遺物は出土していない。

第5層暗灰褐色中～粗砂には炭が混じる。2・3トレンチの一部で薄く堆積しているのを検出した。遺構は、第5層上面から切り込むものと、第6層上面から切り込むものがある。残念ながら第5層の検出範囲が狭く、遺構は全て第6層上面で検出した。

第4層は淡灰褐色粘質土である。下層の第4b層は、第6層の影響をうけて砂質となっている。第3層は砂礫を含む層で、しまりが弱い。丘陵からの崩落土、ないしは整地土と考えられる層である。遺物として図示したものは、1トレンチ南端の第3層で集中して出土した。遺構の検出につとめたが、遺構らしきものはなく、整地の際に遺物が廃棄された可能性が高いと考えている。第2層は近現代の耕作の床土、第1層は同じく耕作土である。



第62図 調査区土層断面図(1/40)

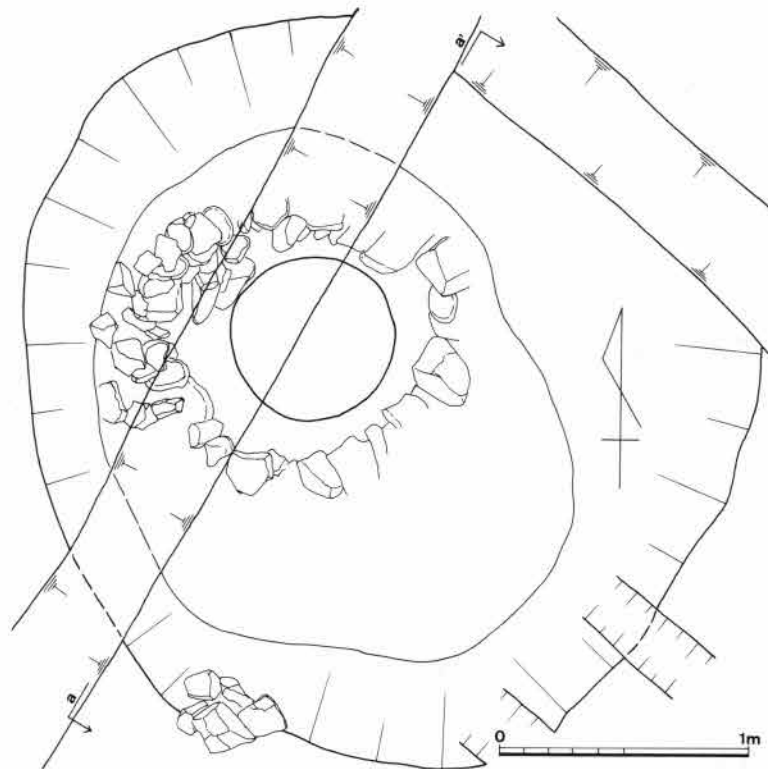
## (2) 検出遺構

井戸(S E 69) S E 69は石組円形の井戸で木組円形桶側である。調査時は遺構番号S X 69として調査を行った。掘方は直径3.1mで、検出面からの深さは1.9mであった。調査時に崩壊の危険が生じたため、井筒の取り上げはできなかった。

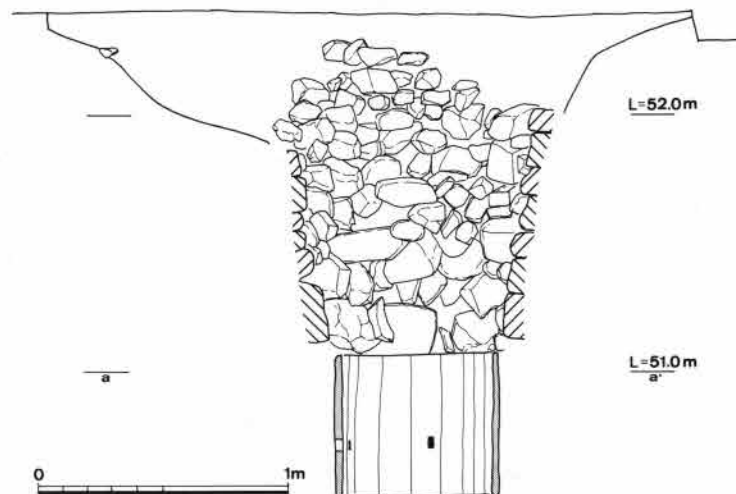
石積みの部分は小児人頭大の石材を円形に組んだもので、一部は廃絶後に井戸内に崩落している。石材は角礫か亜角礫で、周辺で採取できるものを使用したと考えられる。下部の井筒となる桶は内径64cmで、板材一枚の厚さが1.5cm・幅11cm・長さ58cmで湧水砂層中に埋め込まれている。桶の板材のうち四枚には、ほぼ中央付近の位置に縦4cm・横1cmの方形の穴が穿たれて、湧水を井戸枠内に送り込んでいる。

井戸の遺物の取り上げは上層、下層、最下層として行った。井筒内部の埋土(最下層)は暗灰色粘土層で、井戸が廃絶した前後に自然に堆積した層であると考えられる。石組みの部分(下層)は、暗灰色～灰色粘土層と灰色粘質細砂の互層になっており、これも人為的な堆積ではない。上層については、埋土のブロックが確認できることから、井戸が半分近く埋没した段階で、一気に埋められたものと考えられる。ただし、これら三層の遺物には顕著な時間差を見いだせないことから、比較的短期間のできごとであると考えられる。

井戸内からは瓦器椀、瀬戸・信楽・備前の陶器や龍泉窯の青磁などと共に墨書土器(第70図22)と、同じく墨書された曲物の底板(第70図1)などが出土している。またこれらと共に用途不明の木板や、松笠などが出土している。これらは遺構内に投入ないしは廃棄されたものと考えら



第63図 井戸 S E 69 平面図 (1/30)



第64図 井戸 S E 69 立面図 (1/30)



れる。

**導水施設**(溝 S D01・木樋 S X66・曲物 S X68・S D03・14) 調査区の北西隅で木樋が出土した。木樋はほぼ完存しており、取水部分から排水部分、そして水を受ける曲物 S X68を検出した。木樋は S D01から S D03、S D14への導水を目的とした遺構である。木樋は第6層を掘り込んだ溝内に据えられており、堤ではない。この遺構は一度改修されて再利用されているため、ここでは改修前と後にわけて報告する。

①**改修前** 木樋の身は一木を削り抜いてつくられている。身の断面形態はコの字状で、長さは約5mで南側が低くなる。木樋は両側面を杭で固定して設置されている。取水側では木樋の両側に木樋の上部構造を支えたと考えられる柱穴を検出した。柱の痕跡は明瞭で、直径は15cmであった。これらには建て替えた形跡は認められなかった。

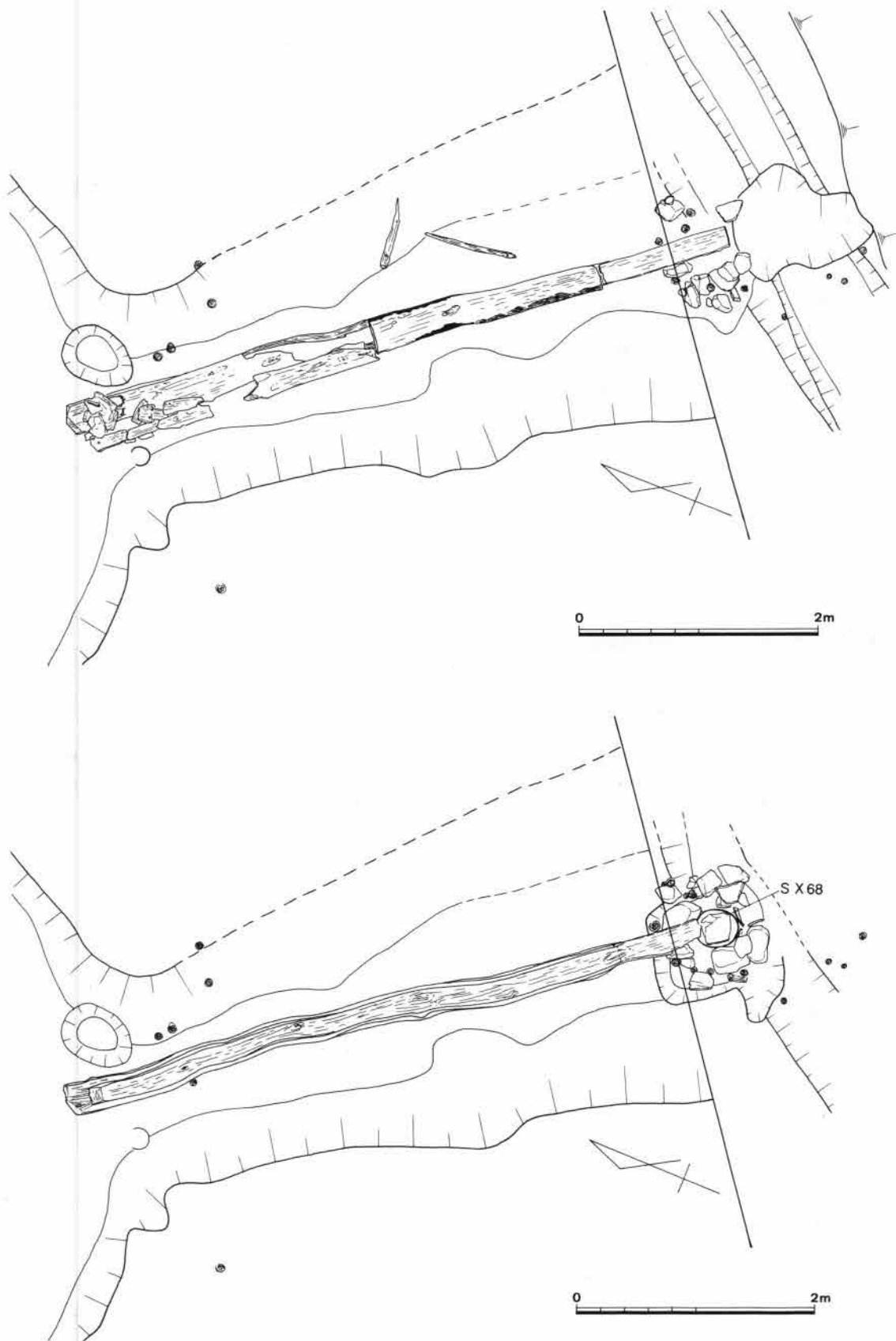
木樋の蓋は三枚に分かれており、そのうち最も取水側に近い一枚は腐朽が著しく、木樋の身と同じ材質のものであることなどから、これは改修前のものと判断できる。木樋の身の先端部分には、曲物 S X68が据えられていた。曲物の直径は30~34cm・深さ27cmで、その内部にはほぼ同サイズの石材が据えられていた。石材は自然石の平滑な一面を上面として水平にして据えられていた。この石材によって水を濁らせずに導水することを目的としたものと考えられる。

②**改修後** 遺物はいずれも細片で図示できるものが少ないが、周辺の遺構と著しく時期の異なるものは出土していない。木樋の身は、そのまま利用され、蓋の一部が交換されたものと考えられる。木樋の排水側の蓋二枚は、身とは異なる材を用いており、やや硬質であった。改修後の段階には曲物はすでに埋没しており、水は直接土壌に落とされていた。水が落ちた部分には鉄分が沈着しており、そのことを裏付けている。改修後には蓋が身の先端から約25cm延長され、張り出した蓋の下部分には拳大から親指大の礫と、「シュロ」のような植物の繊維(編んだものではない)が挟まれていた。この構造は、曲物廃絶後の水を濁らせない工夫であったものと考えられる。

改修に伴う再掘削の層から、木樋の上部構造と思われる、筒状の木器と栓状の木器が出土した(図版第43-3)。筒状の木器は断面U字形のものをふたつ合わせた形で、合わせたときの直径32cm、幅35cm、長さは約1mの破片であった。この筒に栓をした状態で出土したのが栓状の木器である。これら上部構造は、廃棄されており現位置を保っていない。筒が円筒形になるものは、やや新しい傾向であるという指摘を受けたが、掘り形内には中世以降の遺物が入っていない。

S D01は幅の狭いところで約4m、最も広い部分で8m以上になる。検出面からの深さ約1.1mの溝で、埋土は上層に至るまで粘土質で埋没するまでの間、流れはゆるやかであったものと考えられる。木樋はこのS D01が大きく谷側にふくらんだ部分に取り付けられていた。溝の遺物は極めて少ないが、最下層からは瓦器椀(第69図37)が出土している。この溝は堆積の状況からトレンチ東端で検出したS D67につながる可能性がある。

S D03は東西方向に走る溝である。この溝は木樋によって取り入れられた水を流すという性格を持っている。この溝は、木樋が改修された際に再掘削されている。木樋改修前に伴う溝(a)は、改修後のもの(b)に壊されており、ごく一部でしか検出できなかった。この溝は他のトレンチで



第65図 S X 66・S X 68出土状況図(上段:蓋撤去前・下段:蓋撤去後)

は確認できないため、SD03(b)が再掘削した際に失われたものと考えられる。

SD14は南北に走る溝で、試掘トレンチの直前で西へ折れる。おそらくはSD03(b)、木樋につながる溝であると考えられる。この溝には多くの木質遺物が残存しており、特筆すべきものとしては、墨書木板(第70図14)がある。遺物が出土しなかったため不明であるが、SD12もこれらと関連した溝となる可能性がある。

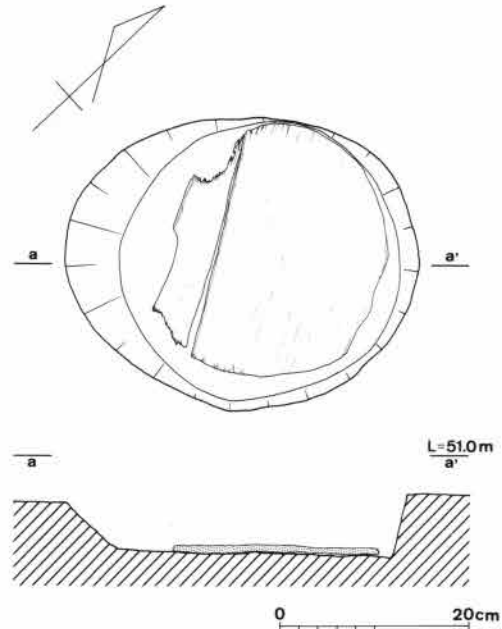
土壙(SK32・6・11・13・37) 円形の土壙SK32は2トレンチ中央で検出した。土壙の径は47×40cmで、検出面からの深さは8cmである。土壙の底面には板が残存していた。(第66図・図版第46)底板直径は33cmで、土壙底面のサイズとほぼ同程度である。この底板は桶ないしは曲物の基底部の可能性もあるが、桶の側板の痕跡は検出できなかった。また、人骨も検出されなかった。

SK06・11・13・37は、SK32と関連して土壙墓ないしは木棺墓となる可能性が高いが、ここでも人骨等は検出されず、副葬品も伴わないため不明である。

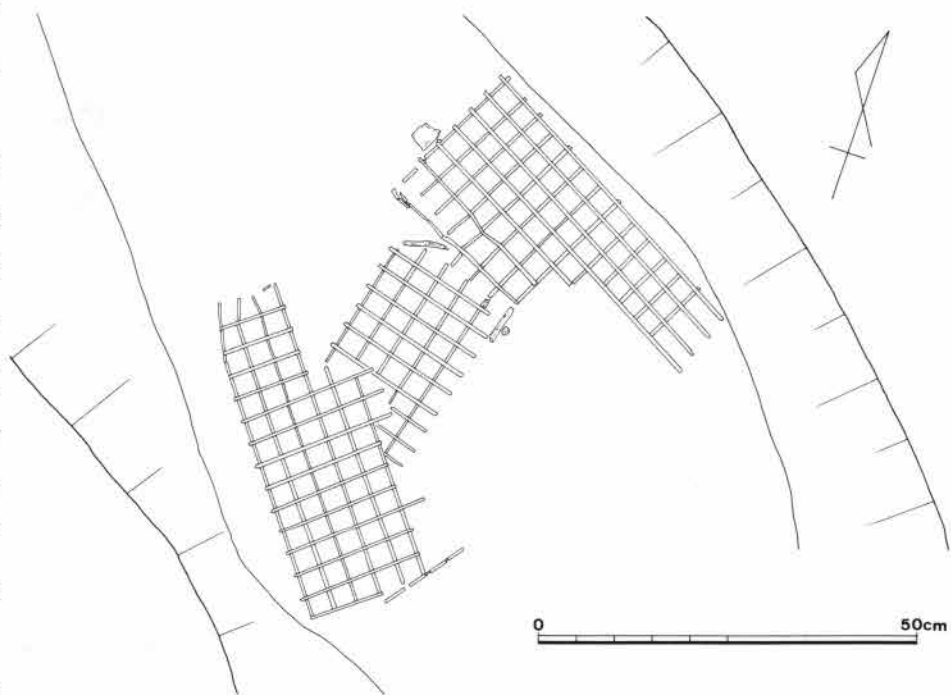
溝(SD04・05) SD04は幅約1m・深さ20cmの溝で、SD03・05を切っている。方向性としては木樋SX66に伴う溝である可能性があるが、木樋との接合部分や、試掘トレンチ以南の状況は削平等により不明であり、性格は明らかではない。

SD05はほぼ直角に折れ曲がる溝である。溝は削平されて3トレンチの途中で途切れている。この溝からは用途不明の組み物が溝の底に接する形で出土した(第67図)。

組み物は40×20cmのサイズの



第66図 SK32曲物底板出土状況図



第67図 SD05棧出土状況図

ものが折り重なるようにして3個出土した。接合はしないが同一個体であった可能性が高い。

### (3) 出土遺物

土器・陶磁器(第68～69図) 第68図1～35は井戸S E69出土遺物である。遺物の総量はコンテナにして約2箱である。井戸内の遺物の取り上げは、上層・下層・最下層と分けて行った。しかし、上層と最下層の遺物間には時間差が見いだせないため、ここでは一括して報告することとする。

瓦器碗(1～10)はいずれも高台のつかないもので、口縁端部に沈線の残る大和型瓦器碗である。外面には指頭圧痕が強く残り、内面にはミガキがほとんどみられないものが多いが、9・10など一部にミガキが残るものも出土している。

11～22は洛外模倣形の土師皿である。22は内面に墨書のある土師皿である。墨書は口縁内面に「□南備□」<sup>(注3)</sup>と書かれている。「南」の上には墨が残っているが、わずかな部分である。おそらくはこの上に「神」があるものと考えられる。

23は瓦質の小壺で、24は瓦質の火鉢である。火鉢は全体の1/4弱しか残っておらず、脚は1か所だけ出土している。25は瓦質の播り鉢である。煮沸に用いられたものと考えられ、体部には煤が非常に強く付着している。26は信楽の捏ね鉢である。色調は淡赤褐色で、白色の砂礫を多く含む。27～29はいずれも瓦質の羽釜である。27は茶釜形の羽釜である。30は盤であるが内面に火熱を受けた痕跡が確認でき、機能としては火鉢であったものと考えられる。

31は龍泉窯系の青磁蓮弁紋碗である。釉は厚く、蓮弁はやや広いタイプである。32は濃褐色の天目茶碗であるが、釉が二度かけられており、ガラス質も厚い。高台のケズリ技法などから、中国産であると考えられる。

33は美濃産の山茶碗、34は古瀬戸の灰釉平碗である。釉は厚く安定感があり、内面には胎土目が残る。高台は削り出しで、底部には糸切り痕が明瞭に残っている。

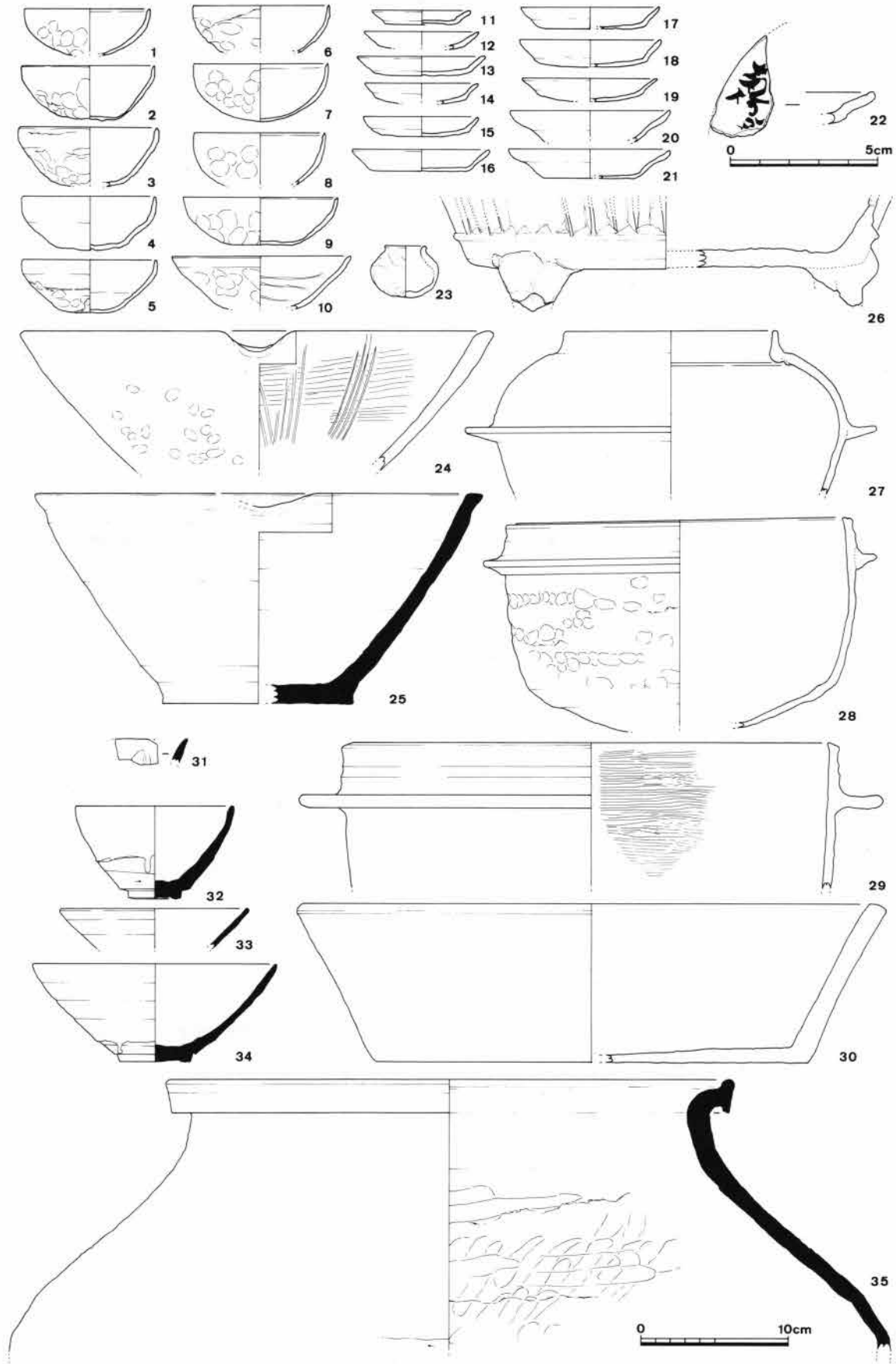
35はT字口縁の甕であるが、常滑焼か丹波焼であると考えられる。内面には粘土の巻き上げ痕跡と成形時のナデが強く残る。

第69図1～5は木樋S D65、6～11は土壙S K32出土遺物である。12～23は溝S D03出土で、24～36は溝S D14出土遺物である。22は東播系の播り鉢である。井戸S E69では出土しないが、この溝や包含層中からは一定量の出土が認められる。23は瓦質の火舎香炉である。内面にはナデが残るが、外面は摩滅しており調整等は不明である。30は龍泉窯系の青磁碗である。

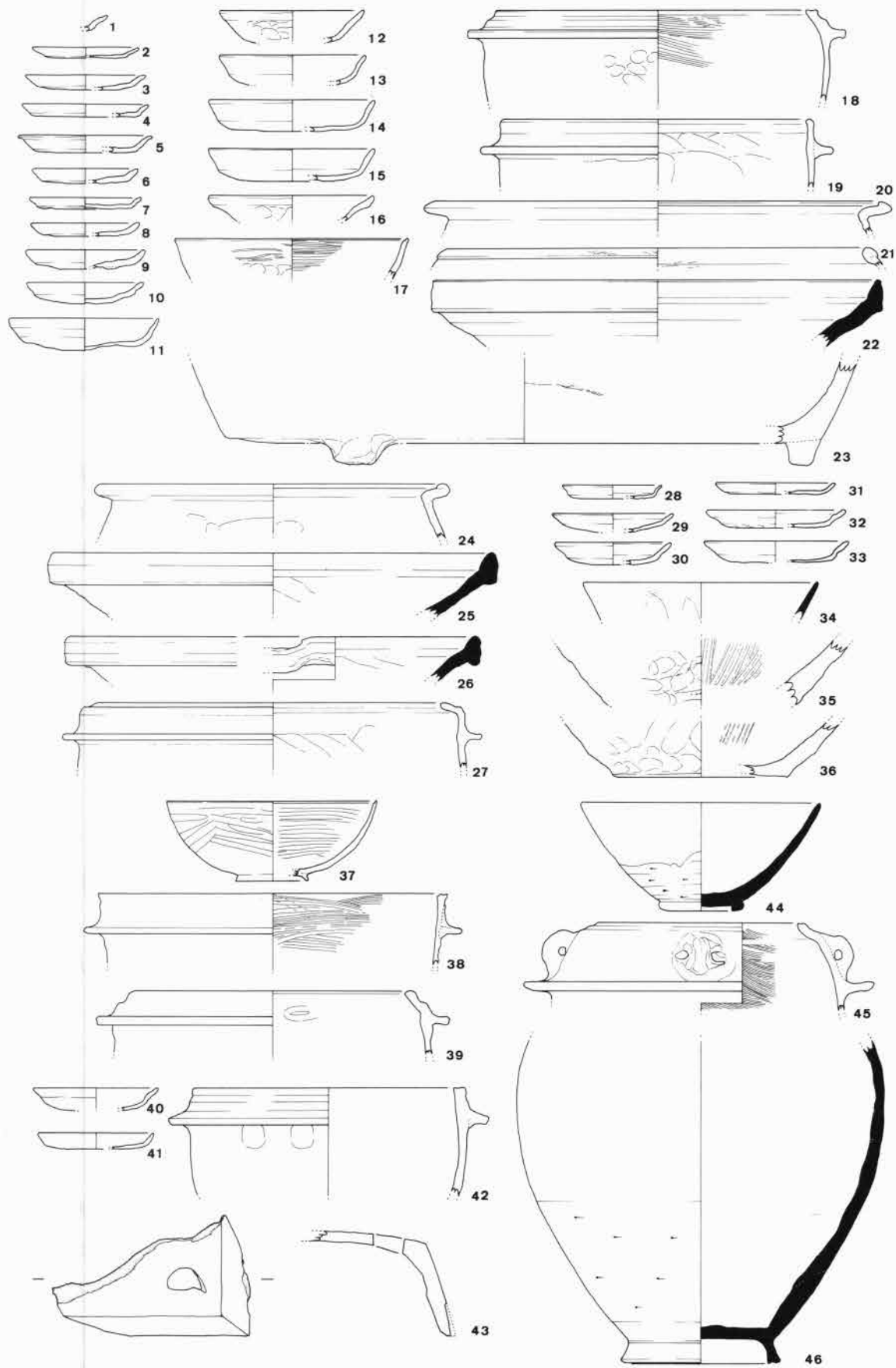
37～39は溝S D01出土遺物である。37は瓦器碗で、溝の最下層から出土している。38・39は共に瓦質の羽釜で、口縁部が直口のものと同傾するものの二者が出土している。

40～43は溝S D05出土遺物である。43は瓦質の香炉の蓋である。内面は粗いケズリ、外面には横方向のミガキが施される。上面には透かしが1か所入れられているが、残存部位が少なく全体の状況は不明である。

包含層出土遺物のうち、特筆すべきものを3点のみ図示した。44は第4層出土で、45・46は第3層出土の遺物である。44は瀬戸の張り付け高台の平碗であるが、釉は薄く不安定である。45は瓦質の羽釜である。46は古瀬戸の壺の胴部下半で、おそらく四耳壺になるものと考えられる。釉



第68図 出土土器実測図1 (1/4 S E 69)



第69図 出土土器実測図2 (1/4 S D65、S K32、S D03・14・01・05、包含層)

は淡く薄いものである。

**木製品**(第70図) 今回の調査では中世の良好な木質遺物が出土した。木質遺物は井戸 S E 69(1・2・4~11・13)、溝 S D14(12・14)、S X68(3)などを中心に出土している。

1~3は曲物の底板である。いずれも板は針葉樹材である。1は墨書のある直径12cmの底板である。厚みは5~9mmと不均一で、側面に細工はない。板は強く反っている。墨書は二ないし三文字あると考えられるが、中央の一文字が「川」と判読できるのみである。

2は直径12.8cmの曲物の底板で、厚みは7mm、ほぼ均一である。側面には菱形のくり込みが一か所ある。3は直径11cmの曲物の底板で、厚みは7mm、ほぼ均一である。側面には直径1mmの穴が合計3か所に穿孔され、うち一か所には竹ヒゴ状の棒が残存していた。

4・12・13は漆の椀である。4は無紋の内外面ともに黒色系の漆椀であるが、すでに複数個の破片となっているため、図面は復元図面である。

12は漆椀の破片である。内外面共に黒色系で、内面には赤色系で紋様が描かれる。抽象化されているが、図案は鶴であると考えられる。13は松に鶴の図案が赤色系で描かれた黒色系の漆椀である。図案は外面が鶴、内面が松と鶴である。中央の鶴の頭部は欠損している。漆椀は全体の2/3が残存しているが、これもすでに複数個の破片となっている。

5は不明木製品である。底辺5cm・高さ2cm・厚さ8mmの木板であるが、側面に細工された形跡は認められない。

6は桜の樹皮である。幅3cmの樹皮が約20~30cm分、巻かれた状態で出土した。樹皮には細工が施されており、製品の一部が脱落したか、あるいは製品とするために準備されていたものと考えられる。

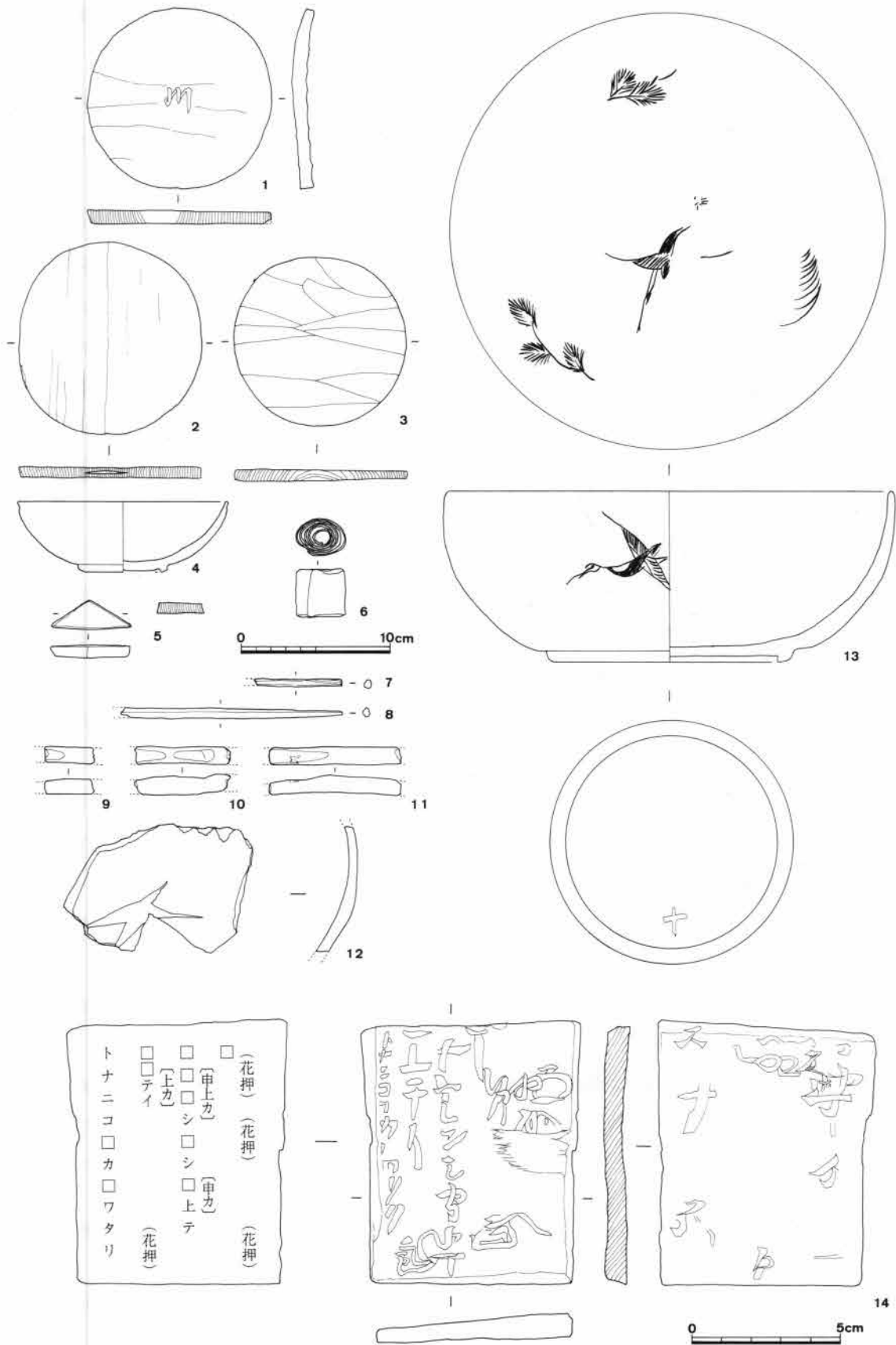
7・8は箸状木製品である。7は長さ5.7cmで、8は長さ14.8cmが残存しており、粗く3から4面に面取りされている。この箸状木製品は細棒の一方の端を細めたもので、もう一方は欠損している。出土したのは図示した二個体のみである。

9~11は用途不明の木製品である。表皮をはいだ直径9mmの棒の一部に切り込みを加えたもので、接合しないが一個体となる可能性もある。

14は墨書木板である。木板は長さ8.7cm・幅7.0cmで、中央部分で折れた形で出土した。中央の折れた部分が人為的なものかどうかは不明である。板材の四周は面取り加工されていることが観察できる。特に表面からみて左側は表面側から刀を入れて切断した痕跡が確認できた。ただし、文章の判読が困難なため、この切断と文字の前後関係は不明である。

表面(図面左側)には花押と文字が4行、裏面には文字列を3行(うち左端の一行は花押の可能性もある)が確認できるが、遺存状態が悪く判読は不能である。判読が可能な表面には右から、1行目に花押、2・3行目に漢字仮名交じりが、4行目にはカタカナが書かれていることが判読できるが、文字や花押の羅列にすぎないようで、内容がわかるほどには判読できていない。

これらの木質遺物のうち、第70図1・4・13・14とS D05出土の不明木製品、S X66出土の栓と取水口部品(図版第50C・D)については理化学的保存処理を行った。



第70図 出土木製品実測図 (S X69. S X68. S D14 1~11:1/4. 12~14:1/2)



#### 4. ま と め

これまでの調査によってその存在が指摘されていた中世の遺構を、初めて明確な形で確認することができた。今回の調査によって遺跡の範囲も北へと広がることとなった。

今回の調査区では、中世の良好な資料が得られた。特に木樋は導水を落とす曲物が据えられるなど、極めてていねいな作りであった。残念ながら建物を復元することはできなかったが、溝SD03、SD14は直角に折れており、区画溝としての性格が考えられる。

陶磁器類も古瀬戸などと共に、青磁・白磁などが出土している。この遺跡はこの地域としては非常に瀬戸が目立つのが特徴である。また、井戸SE69からは中国産の天目茶碗や瓦質の茶釜など、「茶」に関連するものも出土している。また、包含層中からではあるが四耳壺と考えられる壺も出土しており、同時に墓壙とみられる遺構も検出されるなど、寺院に関連するものが多く出土した。また、木製品も極めて多彩な内容で、曲物の底板、箸などとともに漆碗、障子の棧を連想させる不明木製品などが出土している。

今回文字資料が出土したことも大きな成果である。特に墨書土器にかかれた「□南備□」は貴重な発見である。この墨書に関連するものとしては、『延喜式』に綴喜郡十四座として「甘南備神社」が挙げられており、京田辺市内には薪に「甘南備寺」がある。この寺は『今昔物語集』（巻十四）にも「山城国神奈比寺聖人、誦法花知前世報語」として登場しているが、中世には荒廃していたという。同じく薪の西南端、河内国との境には「甘南備山」があり、信仰の対象になっている。今回の出土は中世の神南備信仰を考える上で重要な史料である。

第2次調査では、今回の調査区の東に位置する寿命寺との関連が指摘される遺物が出土している。今回の調査でも墨書土器や墓壙などから、当遺跡が中世の寺院となる可能性が考えられたが、宮ノ前付近には該当するような寺院の記録は残されていない。また、溝SD14から出土した墨書木板に花押があることなどからも、寺院以外に山城といった施設についても検討が必要である。周辺の継続的な調査が望まれる。

(藤井 整)

注1 奥村清一郎・西川英弘「興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 田辺町教育委員会）1981

注2 鷹野一太郎『興戸遺跡発掘調査概報—郡塚地区の調査—』（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第10集）1989

注3 釈文は向日市埋蔵文化財事務所の清水みき氏にお願いした。「□南備□」のうち、初めの一文字はわずかに墨があることがわかる程度で、最後の文字は「祭」となる可能性もあるが不明である。

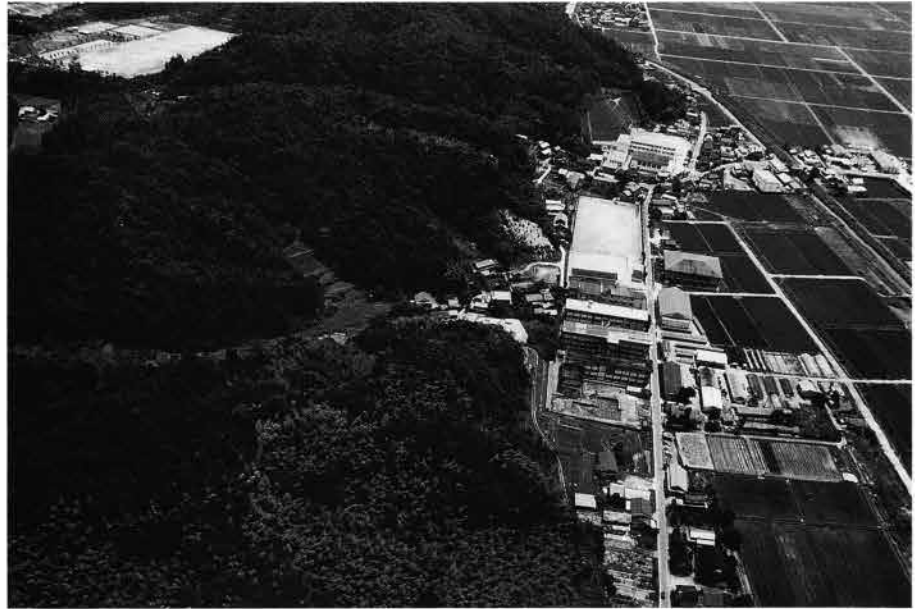
今回の調査と整理にあたっては、以下の方々に御指導と御教示をいただいた（順不同・敬称略）。記して深謝申し上げたい。

清水みき（向日市埋蔵文化財事務所）・市川秀之（大阪狭山市教育委員会）・岡田章一（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）・佐藤公保（(財)愛知県埋蔵文化財センター）

# 版 圖

図版第1 橋爪遺跡第5次

(1)調査地遠景（北から）



(2)調査地遠景（下が北）



(3)調査地遠景（西から）



図版第2 橋爪遺跡第5次



(1)調査前風景（北東から）



(2)調査前風景（西から）



(3)重機掘削風景（北西から）

(1)発掘作業風景（西から）



(2)遺構検出状況（西から）



(3)東部遺構検出状況（南から）



図版第4 橋爪遺跡第5次



(1)北西部遺構検出状況（南東から）



(2)北西部遺構検出状況（南から）



(3)調査区北壁断面（南から）

図版第5 橋爪遺跡第5次

(1)調査区全景（東から）

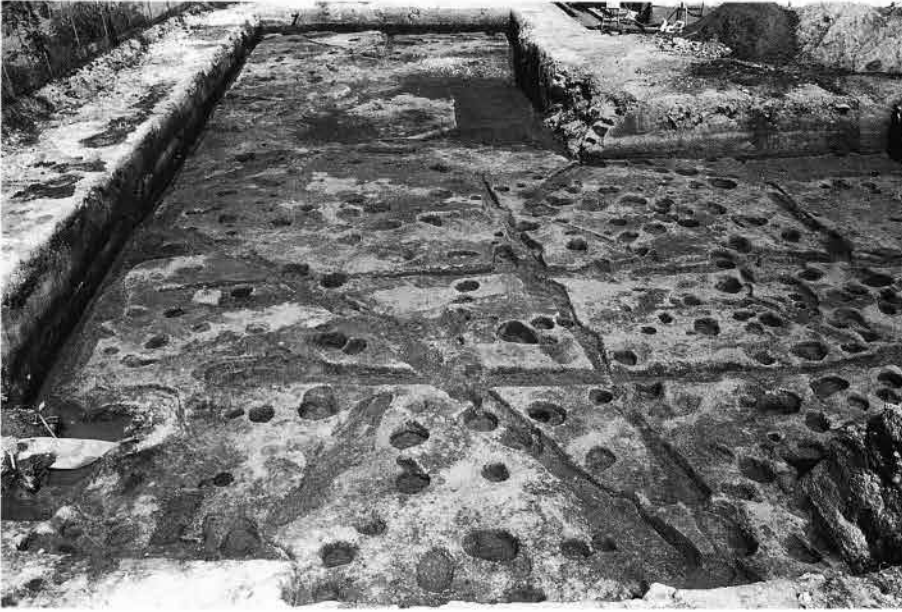


(2)東部完掘状況（東から）



(3)東部完掘状況（南から）





(1)調査区全景（西から）



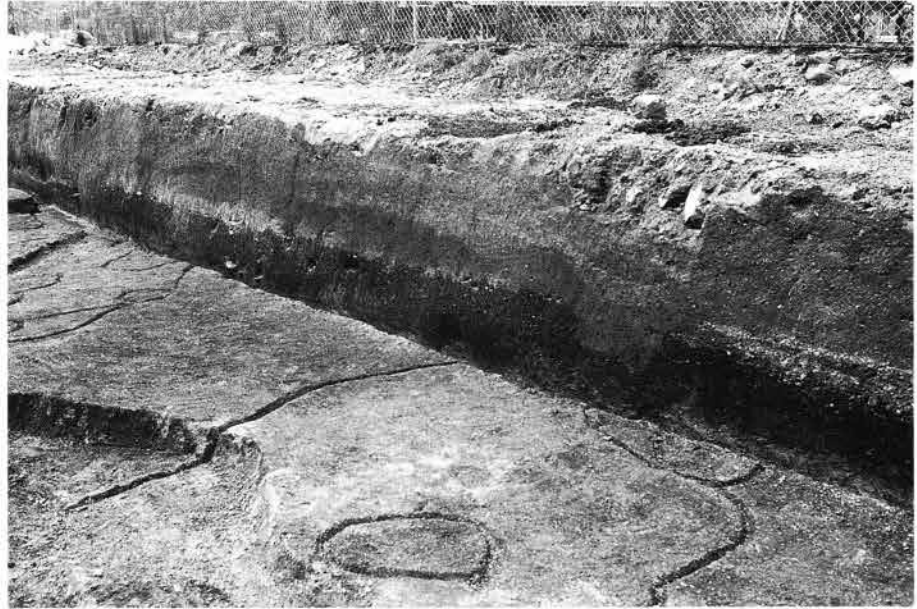
(2)北西部完掘状況（南から）



(3)南西部完掘状況（東から）



(1)調査区北壁断面（南東から）



(2)調査区南東壁断面（西から）



(3)遺物出土状況（北東から）





(1) S D 131検出状況  
(南から)



(2) S D 131遺物出土状況  
(北から)



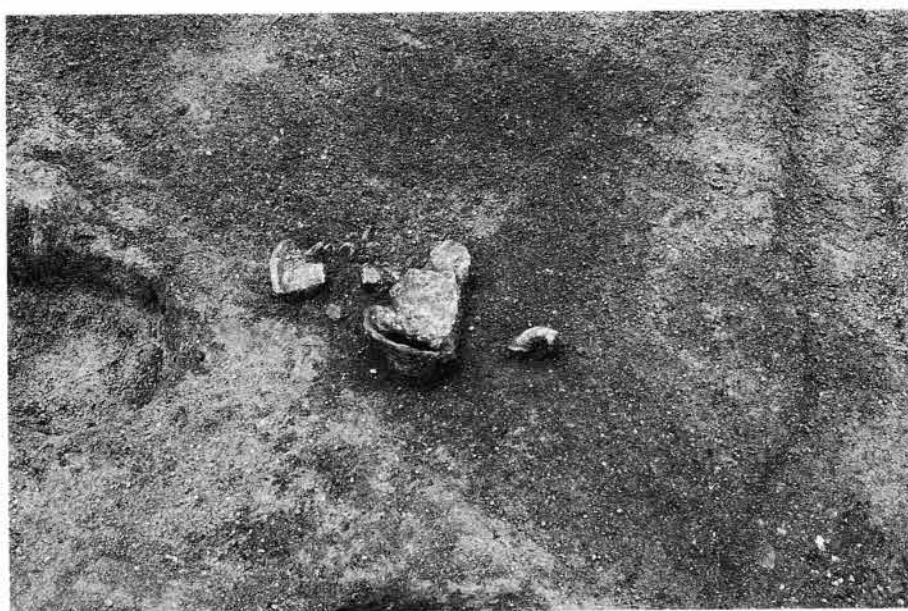
(3) S D 131遺物出土状況  
(西から)



(1) S D 131遺物出土状況  
(南から)



(2) S D 131遺物出土状況  
(東から)



(3) S D 131遺物出土状況  
(西から)



(1) S K 058完掘状況 (東から)



(2) S K 058遺物出土状況  
(東から)



(3) S K 058遺物取り上げ風景  
(北東から)

(1)調査地遠景（下が南）



(2)説明会風景（北東から）



(3)説明会風景（北から）





1



3



2



4



6



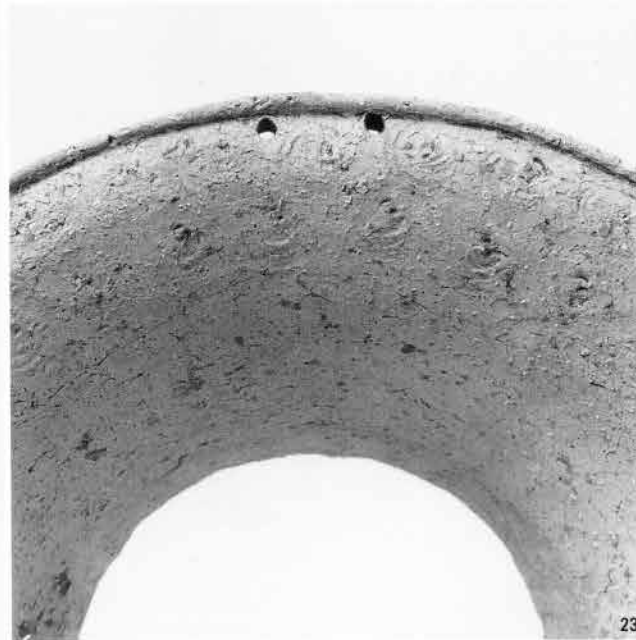
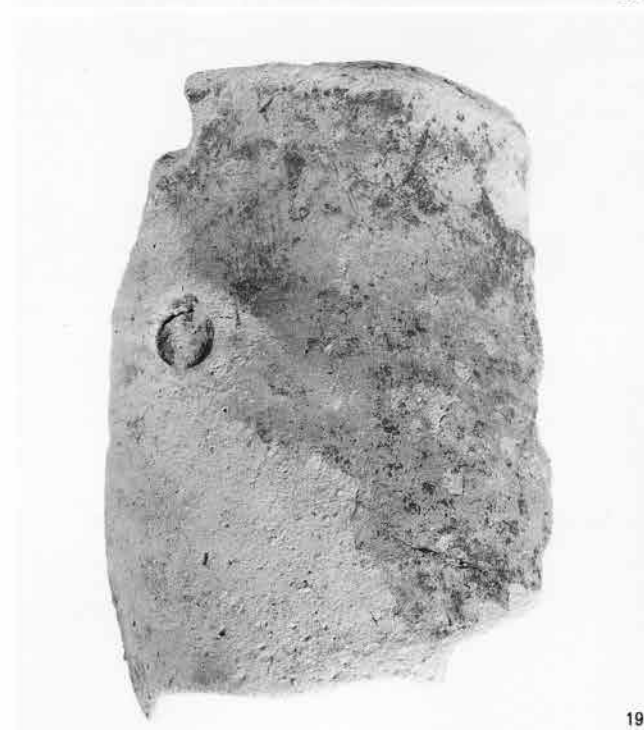
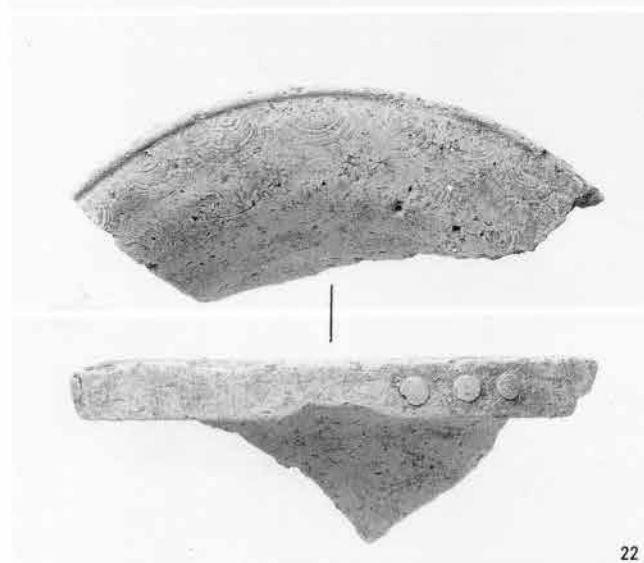
10



13



11





36



37



32



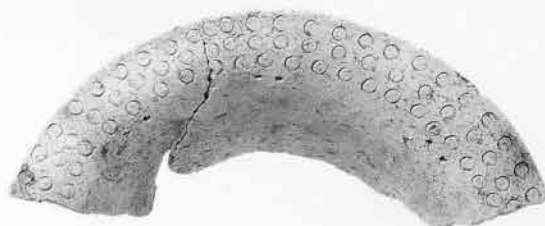
45



48



40



51





23

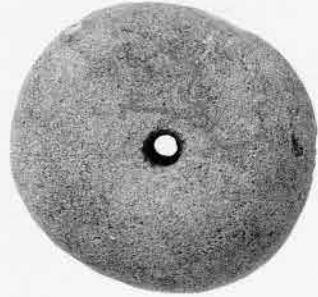


9

出土遺物(4)



52



54



53



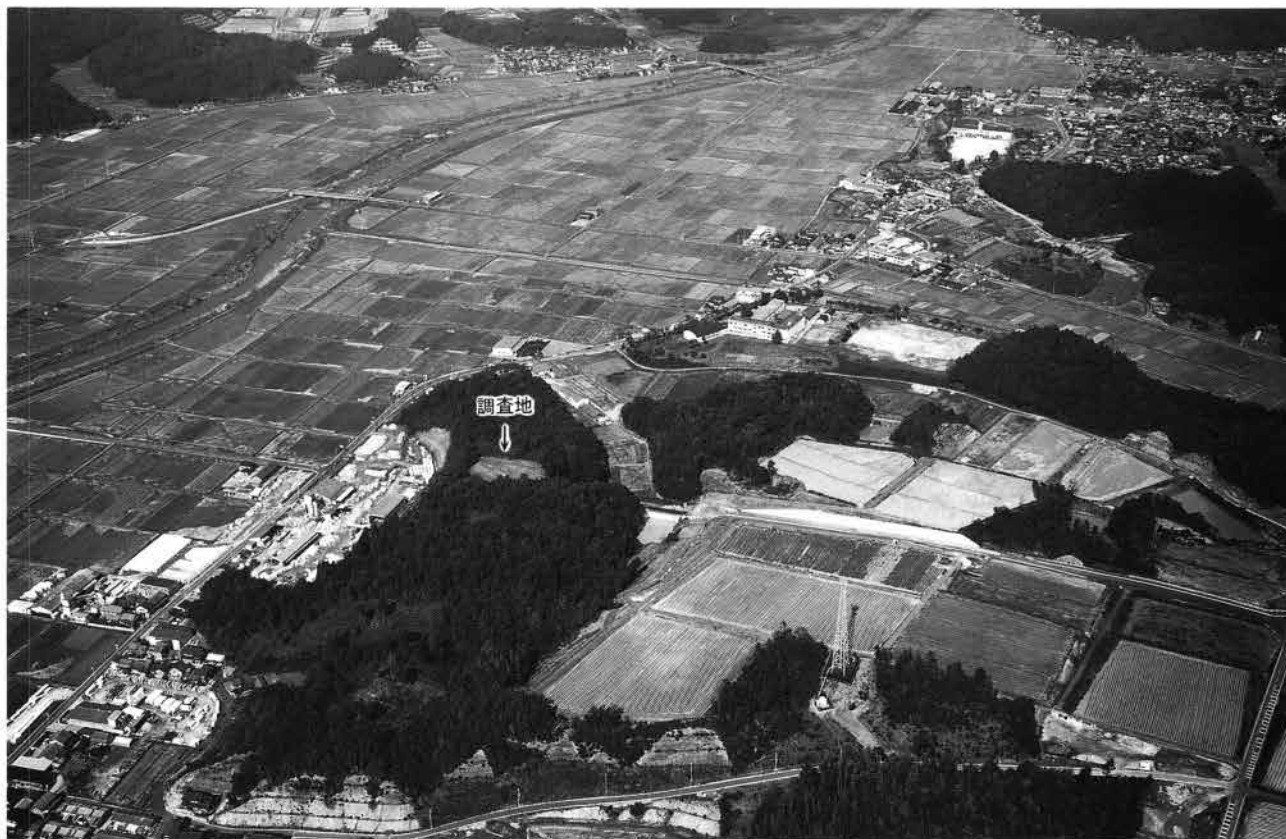
56



55



57



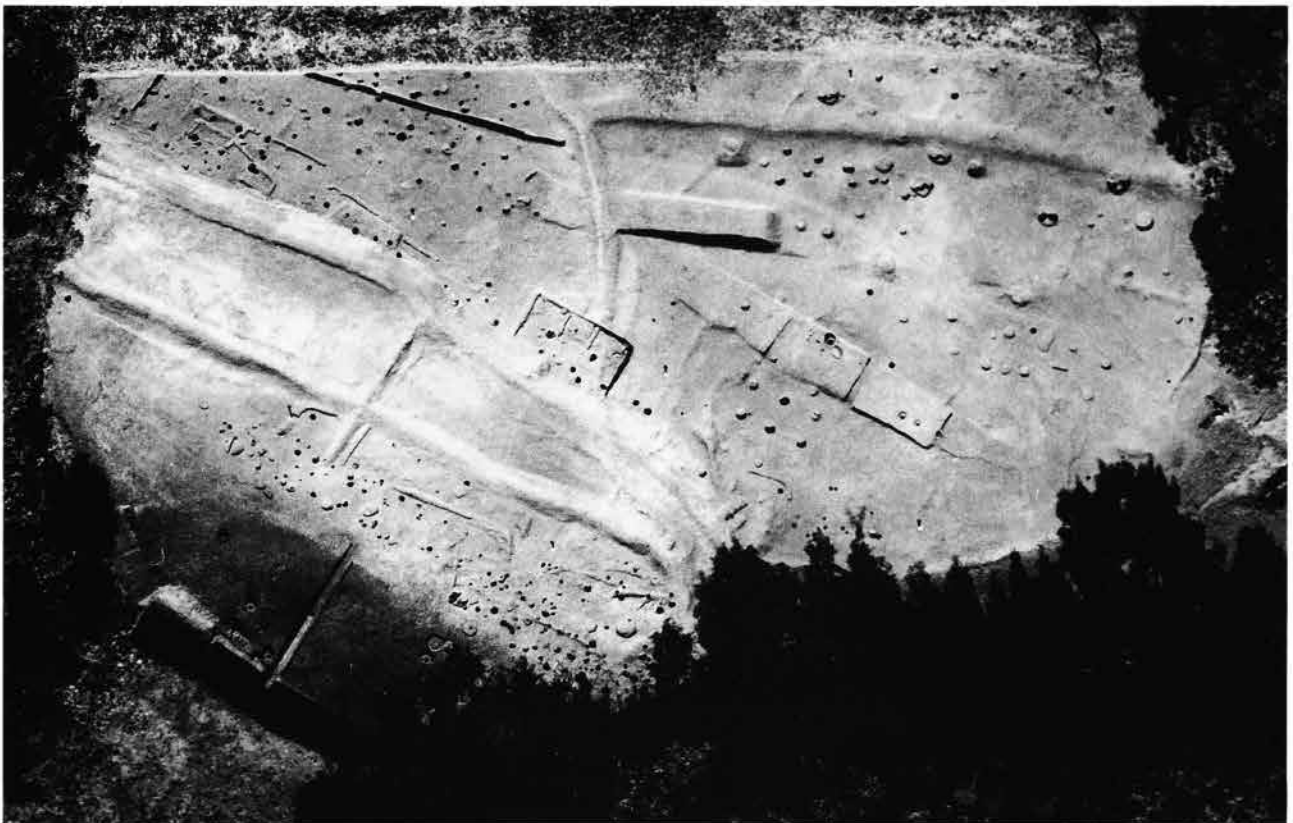
(1)調査地遠景（南から）



(2)調査地遠景（東から）



(1)調査地近景（西から）



(2)調査地全景（真上から、上が北東）



(1) 竪穴式住居跡 S H005 全景 (遺物出土状況、南西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H005 全景 (完掘後、南西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H005  
東コーナー付近遺物出土状況  
(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H005  
北東壁中央部付近  
遺物出土状況  
(南西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H005  
支柱穴1土層断面  
(北西から)

(1) 竪穴式住居跡 S H006 全景  
(南東から)

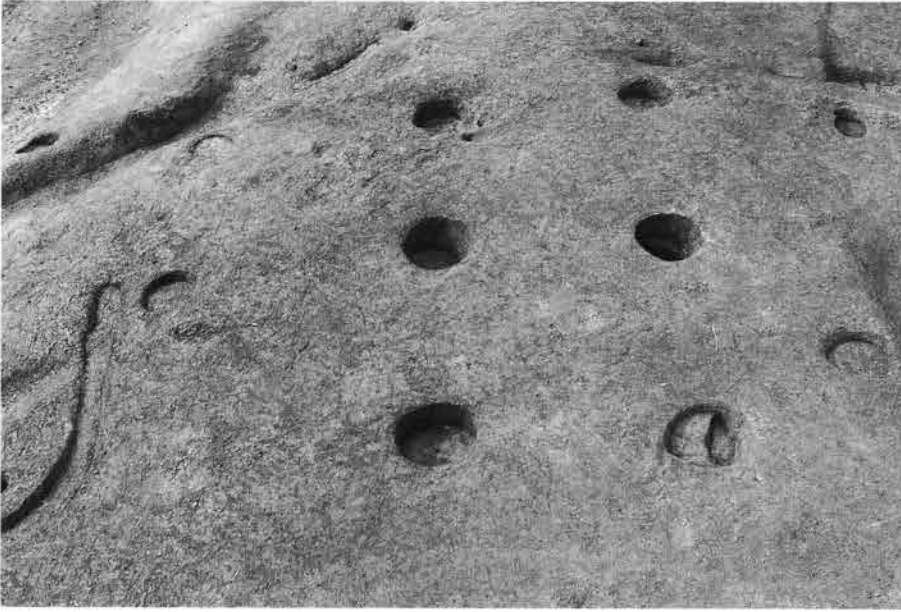


(2) 竪穴式住居跡 S H007 全景  
(南西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H089 全景  
(南西から)





(1)掘立柱建物跡1 全景  
(南東から)



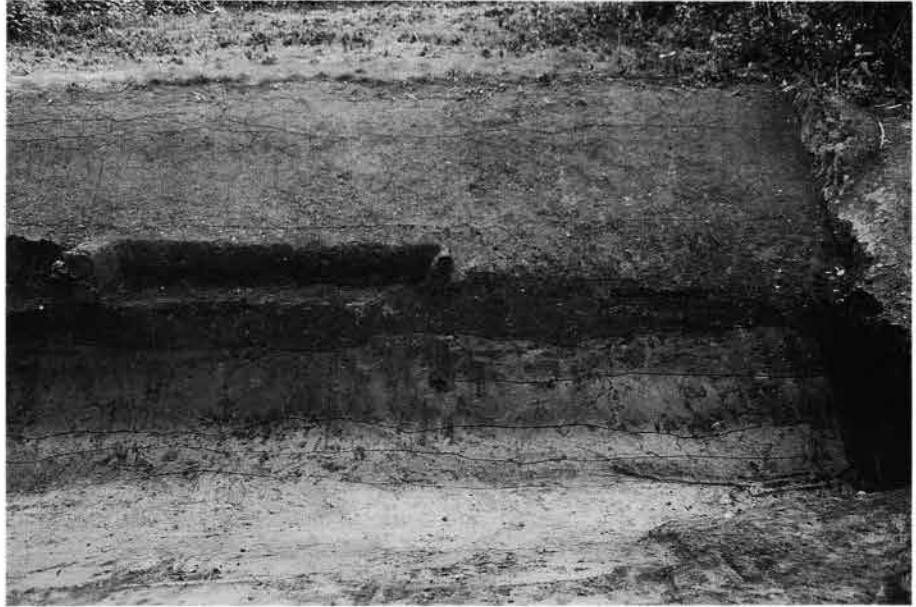
(2)掘立柱建物跡2 全景  
(南東から)



(3)作業風景 (南西から)



(1)調査地南端 (P 5) 土層断面  
(北東から)



(2)落とし穴状遺構 S X 405 全景  
(南東から)



(3)関係者説明会風景  
(北東から)





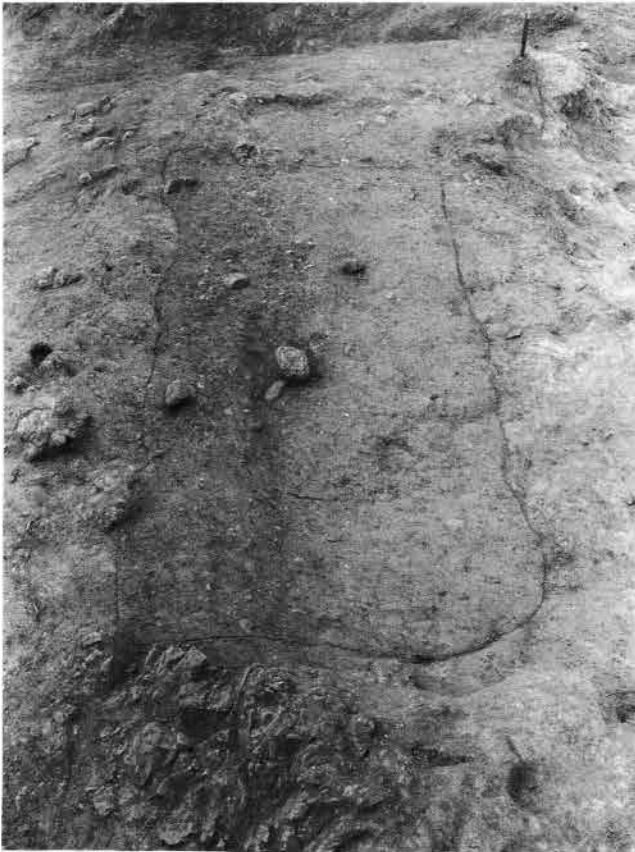
出土遺物



(1)川向古墳群近景（東から）



(2)川向古墳群から見た周辺の景観（南から）



(1) 2号墳主体部検出状況（南から）



(2) 2号墳主体部完掘状況（南から）



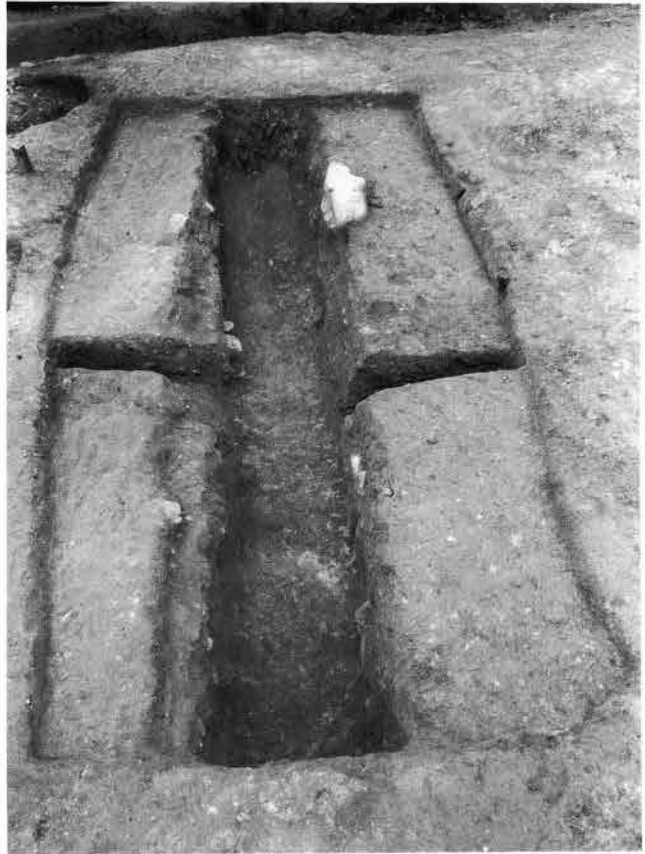
(3) 3号墳第1主体部裏込め土断ち割り状況（北から）



(4) 3号墳第1主体部礫検出状況（北から）



(1) 3号墳第1主体部完掘状況（北から）



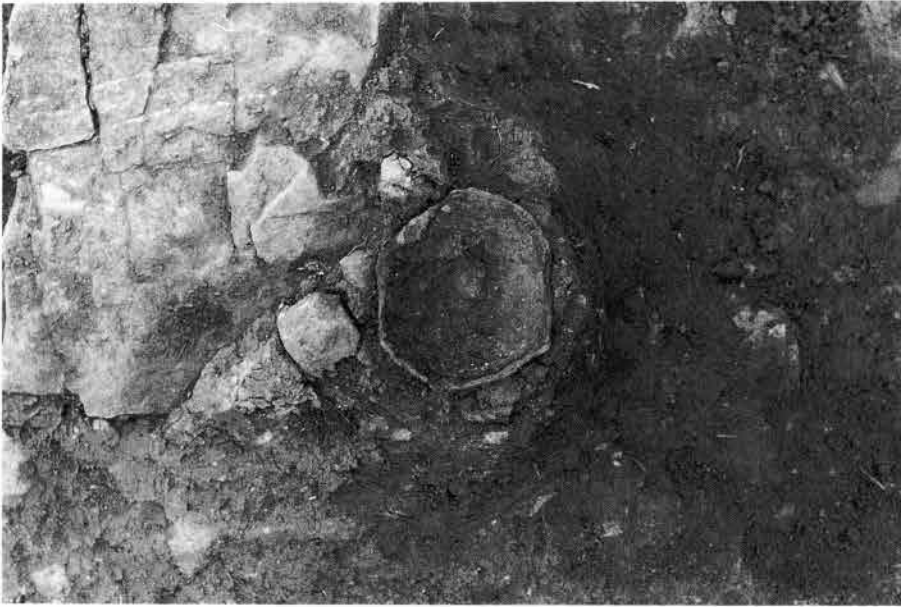
(2) 3号墳第2主体部裏込め土断ち割り状況（西から）



(3) 3号墳第2主体部礫検出状況（西から）



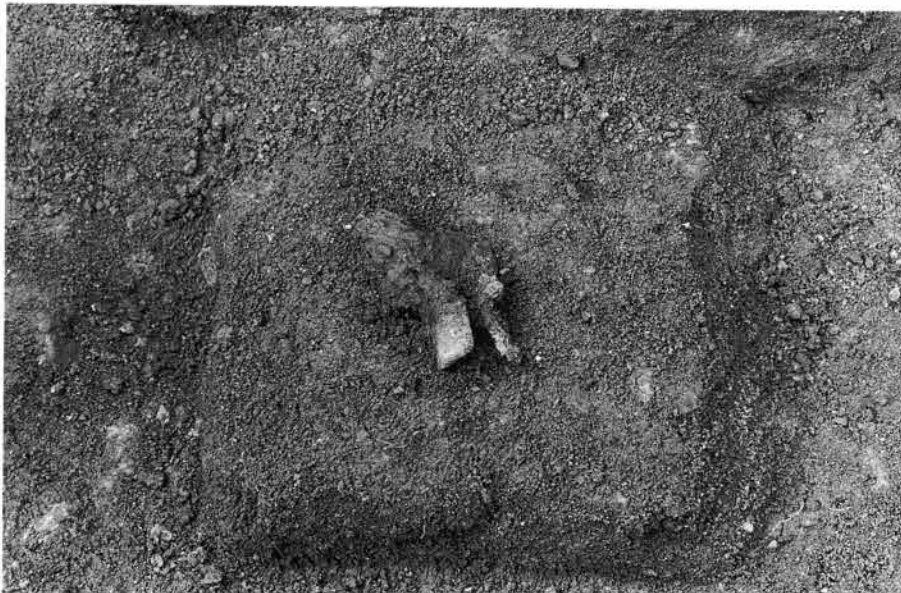
(4) 3号墳第2主体部完掘状況（西から）



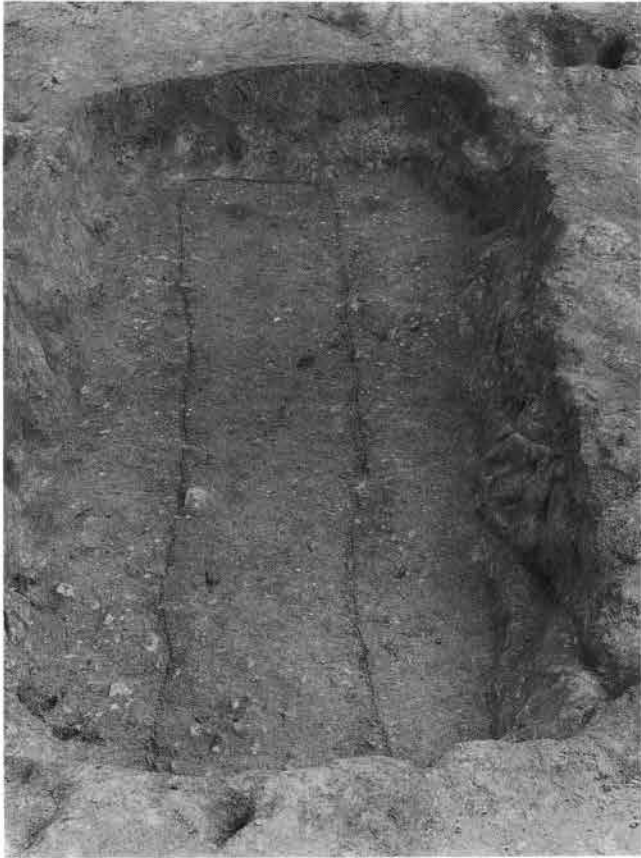
(1) 2号墳弥生土器出土状況  
(西から)



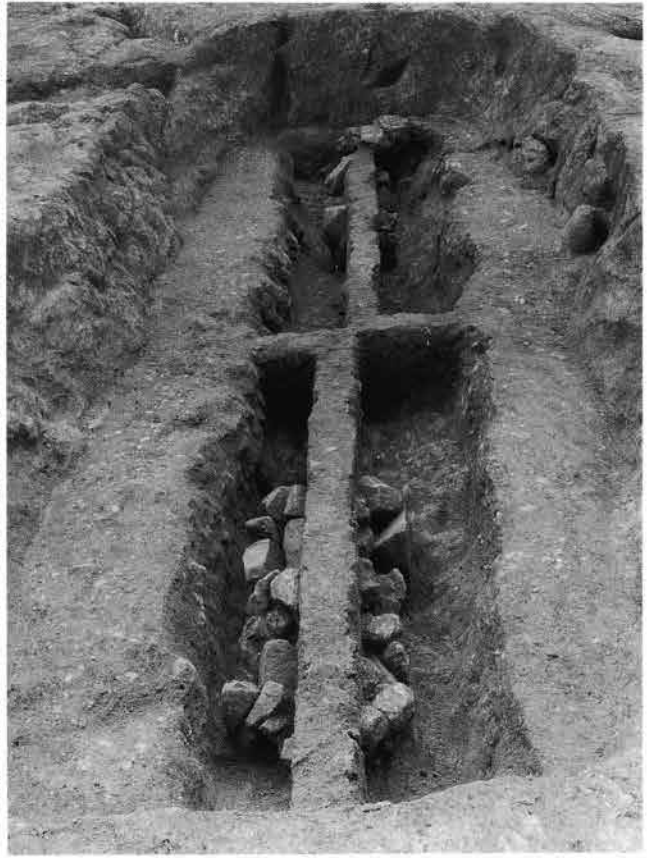
(2) 3号墳第1主体部鉄器出土状況  
(東から)



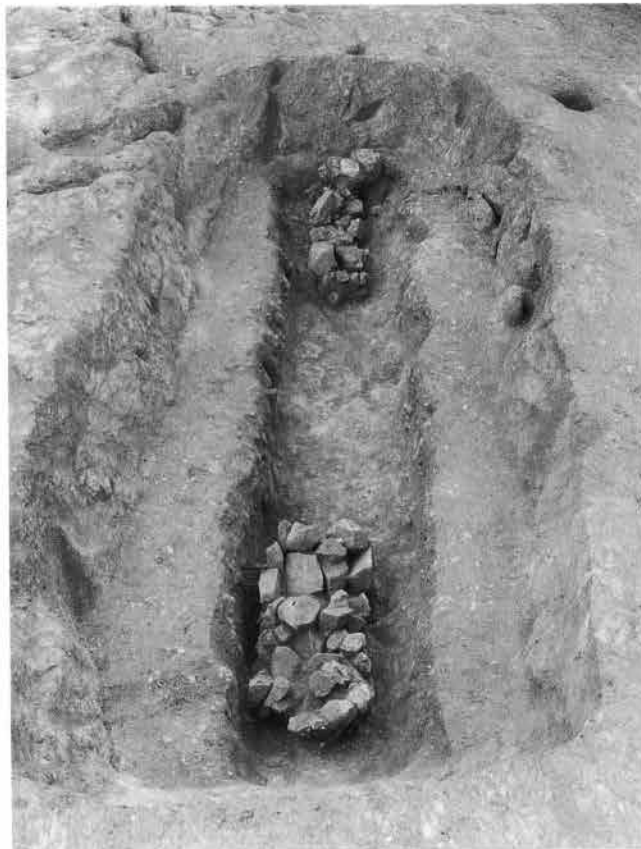
(3) 3号墳第2主体部鉄器出土状況  
(北から)



(1) 4号墳木棺検出状況（南から）



(2) 4号墳木棺内あぜ設定状況（北から）



(3) 4号墳木棺完掘状況（北から）



(4) 4号墳主体部完掘状況（北から）



(1) 4号墳壺棺検出状況（東から）



(2) 4号墳壺棺検出状況（東から）

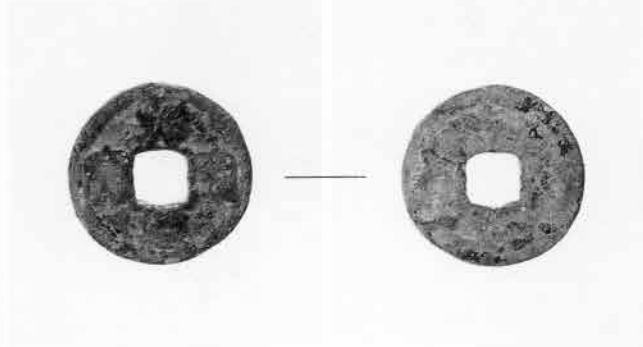


(3) 4号墳壺棺出土状況（東から）



(4) 4号墳壺棺完掘状況（西から）





出土遺物(1)



9



7



7・8



7・8 部分拡大



7 部分拡大

(1)調査地全景（北東から）



(2)調査地全景（南西から）



(3)調査地全景（北西から）

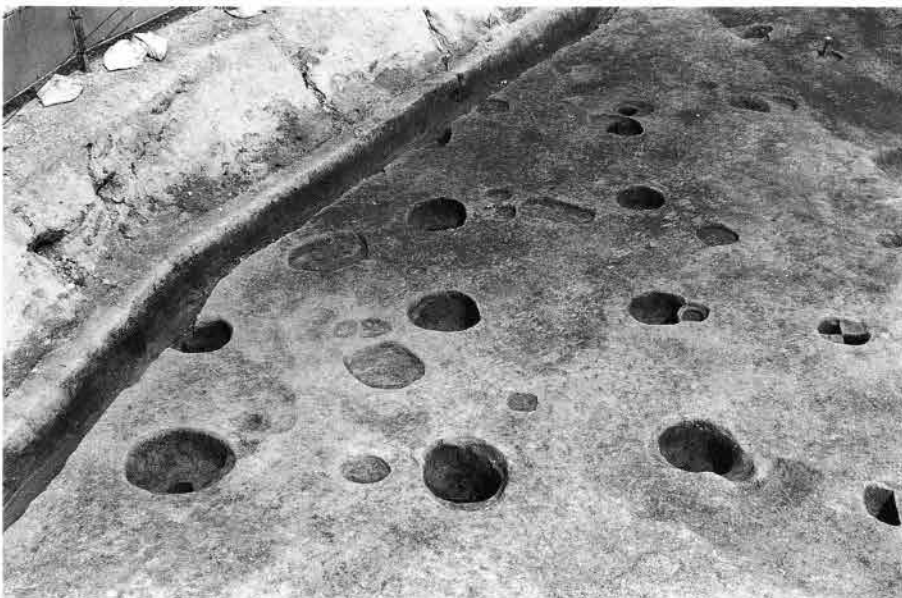




(1)掘立柱建物跡1 検出状況  
(南東から)



(2)掘立柱建物跡2・3 検出状況  
(南南西から)



(3)掘立柱建物跡5 検出状況  
(西から)

(1)掘立柱建物跡6・7 検出状況  
(西北西から)



(2)東部地区掘立柱建物跡群  
検出状況 (南南西から)



(3)竪穴式住居跡4 検出状況  
(南西から)





(1)流路跡11検出状況（東から）



(2)流路跡11検出状況（北東から）



(3)流路跡11内流木検出状況  
（西南西から）

図版第37 大島遺跡第3次



(1)流路跡12全景（北東から）



(2)流路跡12くびれ部（西から）



(3)流路跡12くびれ部  
（北北西から）



(1)土器棺13検出状況（東から）

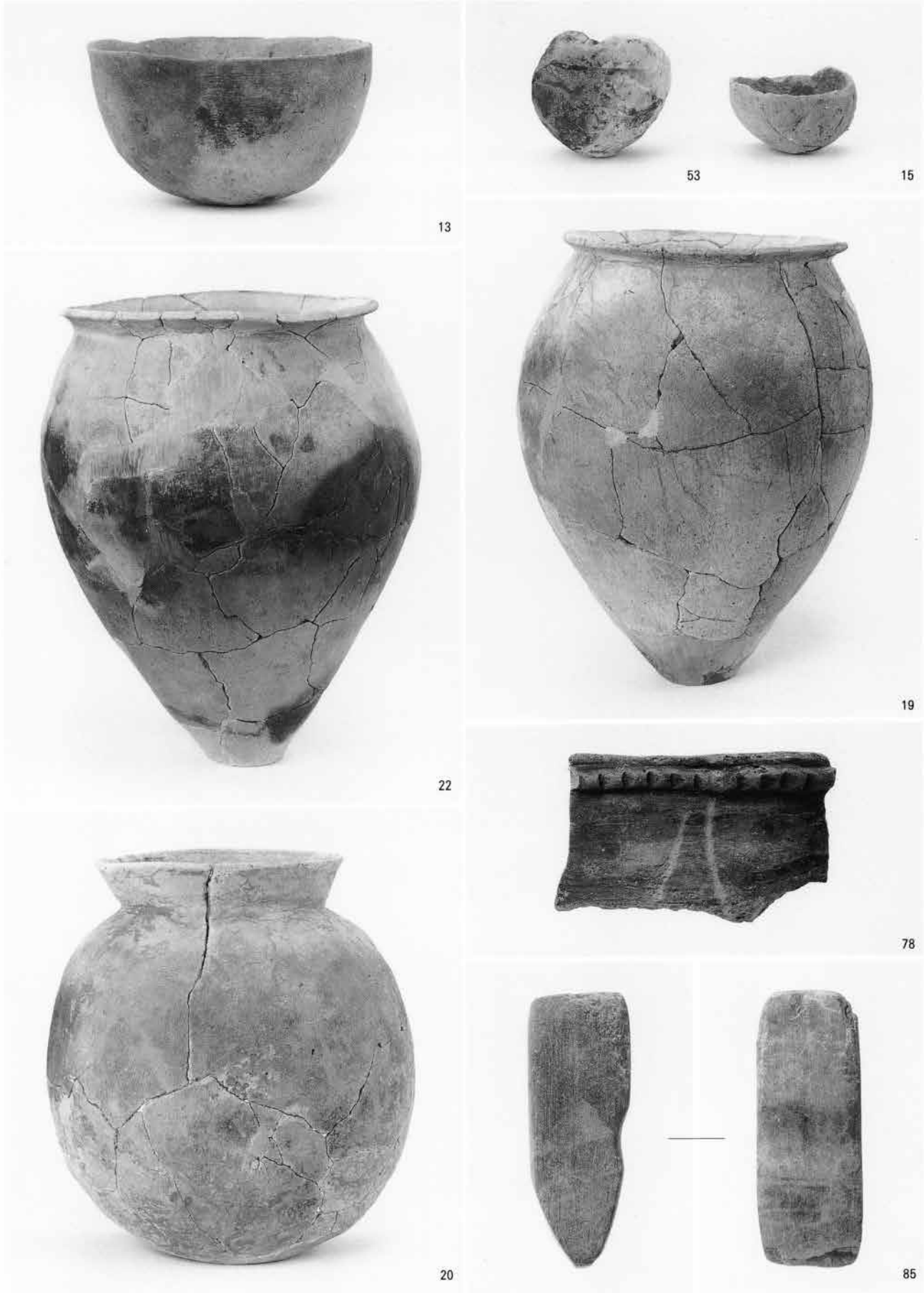


(2)土器棺14検出状況（南東から）



(3)S X 105検出状況（東から）





出土遺物(1)





(1)調査区全景（垂直写真、上が南）



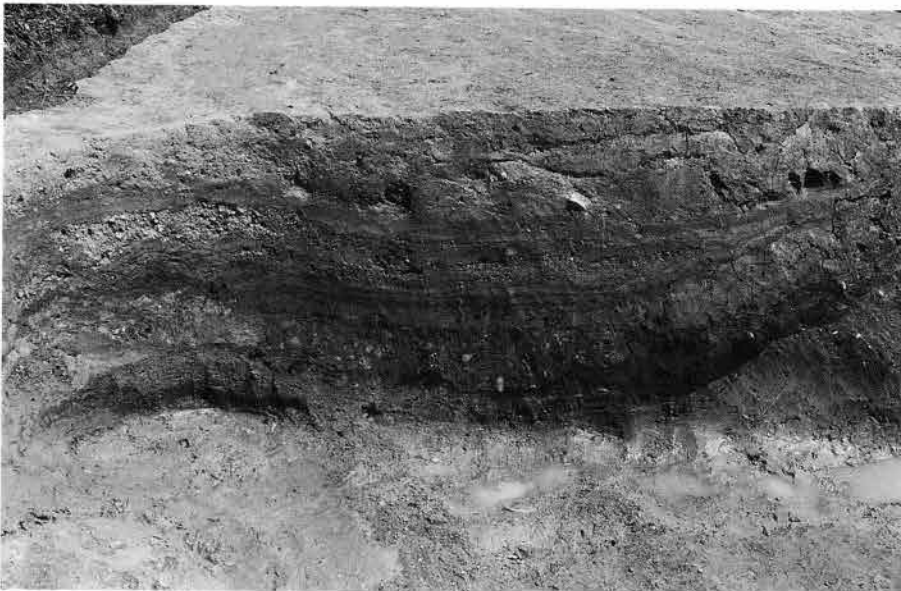
(2)木樋蓋撤去後（南から）



(1)井戸S E69 (南から)



(2)井戸S E69井戸枠 (南から)



(3)S D01土層断面 (南から)

(1)木樋蓋撤去前（南から）



(2)木樋改修後の蓋（北から）



(3)木樋上部構造出土状況（北から）





(1)木樋上部構造出土状況（東から）



(2)木樋土層断面（南から）



(3)木樋取水口部分（東から）



(1)木樋取水口部分柱穴（北から）



(2)木樋蓋撤去後（南から）



(3)木樋蓋撤去後（東から）



(1) 曲物 S X 68 検出状況 (南から)



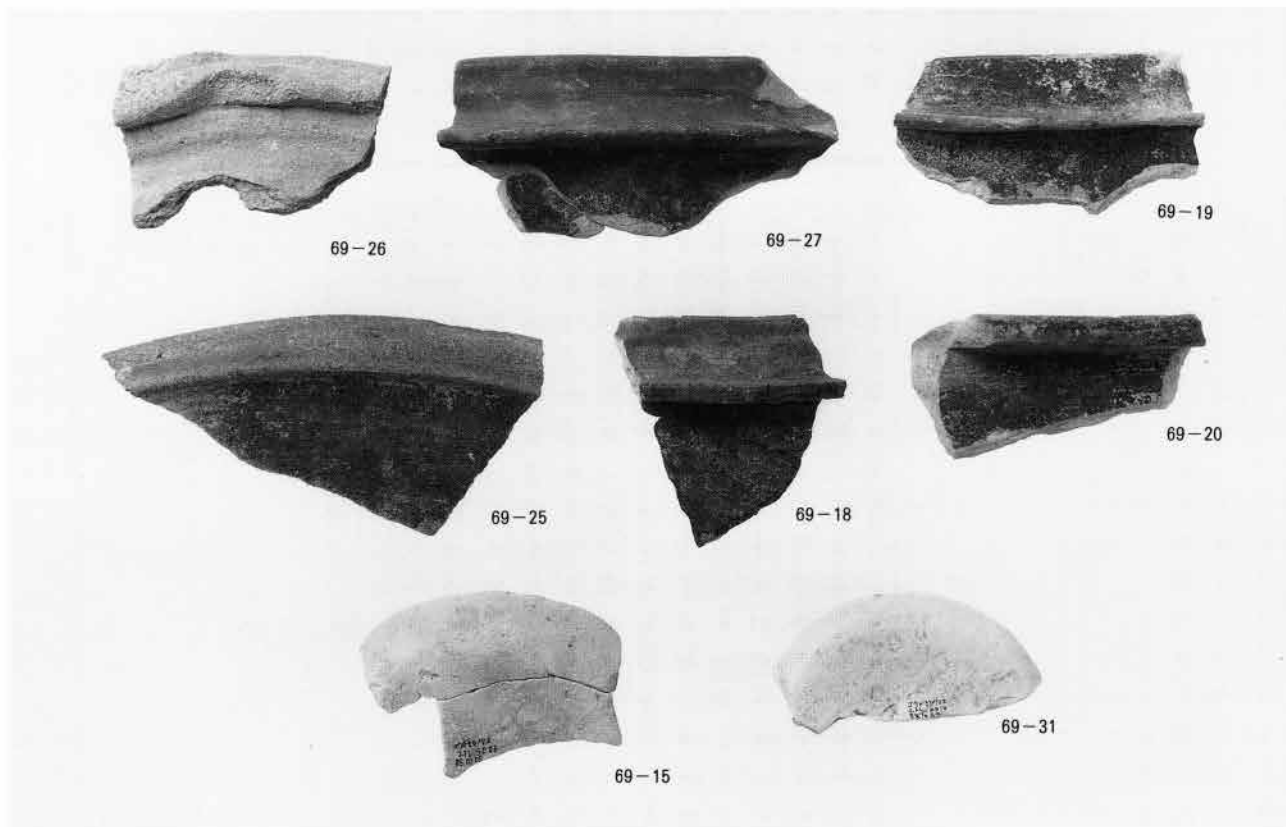
(2) S D 05 不明木製品出土状況 (東から)



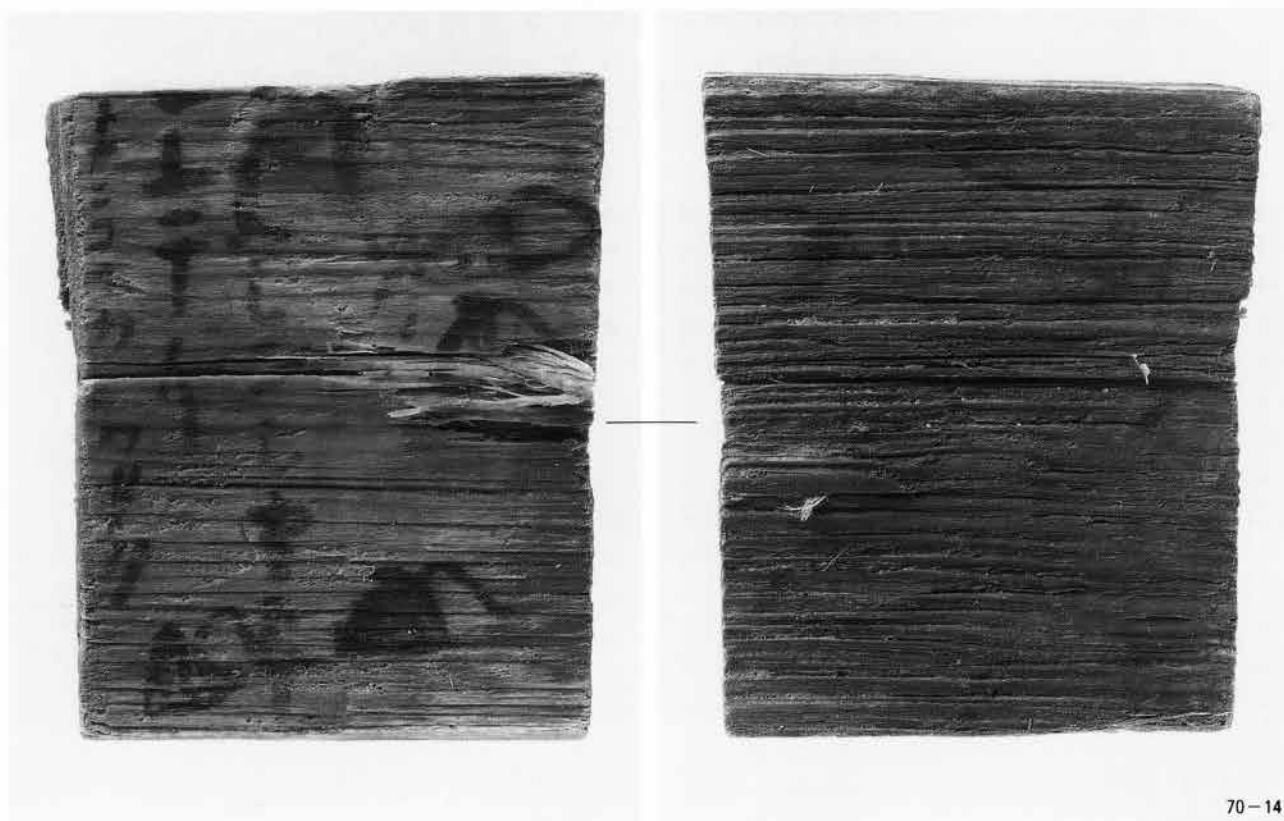
(3) S K 32 曲物底板出土状況 (南から)



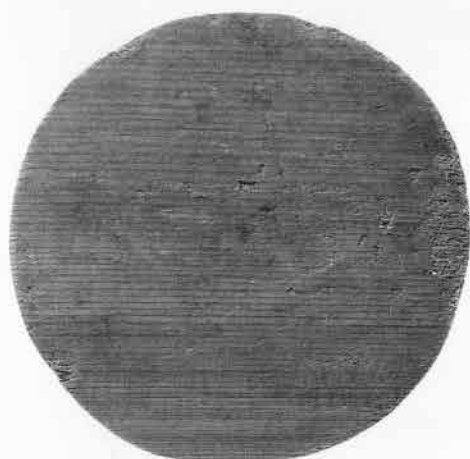




(1)出土土器(2)S D03・04



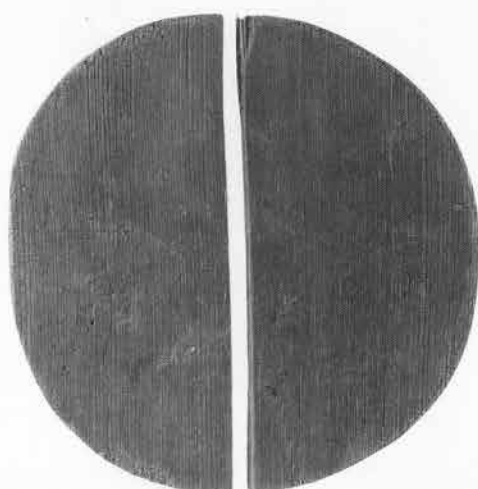
(2)出土木製品(1)S D14出土墨書木板



70-1



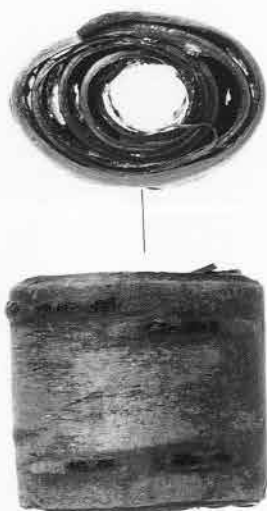
70-13



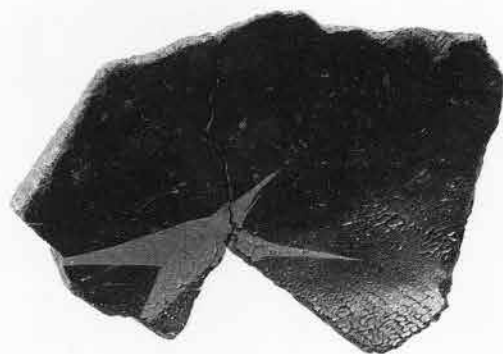
70-2



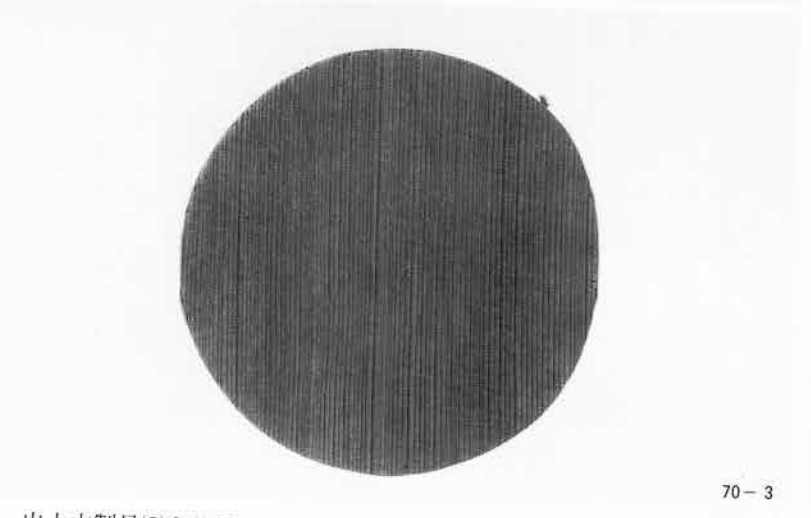
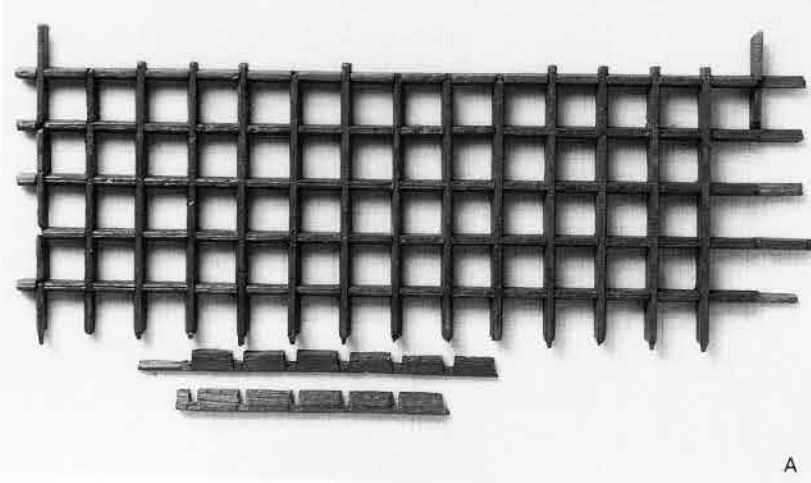
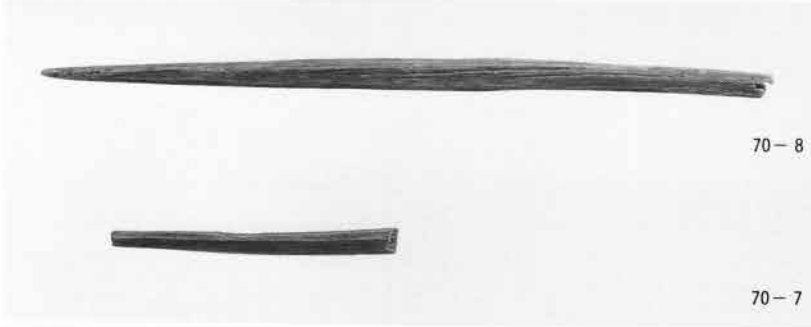
70-4



70-6



70-12



出土木製品(3)SE69、SX68、A : SE05、B : SX68、C・D : SX66

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第87冊							
編著者名	村田和弘・筒井崇史・河野一隆・福島孝行・岩松 保・藤井 整							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1999 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしづめいせ きだい5じ	くまのぐんくみはま ちようはしづめ65ば んち							
橋爪遺跡第 5次	熊野郡久美浜町橋 爪65番地	521	26	35° 35' 24"	134° 56' 4"	19980512 ~ 19980703	420	校舎改築
なくおかいせ きだい9じ	たけのぐんやさか ちようみぞたに							
奈具岡遺跡 第9次	竹野郡弥栄町溝谷	503	37	35° 39' 58"	135° 5' 46"	19980818 ~ 19981113	1,260	道路建設
かわむかいこ ふんぐん	まいづるししだかか わむかい							
川向古墳群	舞鶴市志高川向	202		35° 25' 24"	135° 15' 26"	19971203 ~ 19980226 19980428 ~ 19980722	1,400	道路建設
おおはたいせ きだい3じ	そうらくぐんきづ ちようさがなかきし まどうちない			34° 43' 22"	135° 48' 15"			
大島遺跡第 3次	相楽郡木津町相楽 岸間堂地内	362	36			19980623 ~ 19981002	1,100	道路建設
こうどみやの まえいせきだ い3じ	きようたなべしこう どみやのまえ			34° 48' 18"	135° 46' 16"			
興戸宮の前 遺跡第3次	京田辺市興戸宮ノ 前	342	79			19980825 ~ 19981029	700	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
橋爪遺跡 第5次	集落	弥生		溝・ピット群		弥生土器・石器		
奈具岡遺跡 第9次	集落	弥生 古墳		竪穴式住居跡・掘立柱建物跡		土師器・須恵器 弥生土器		
川向古墳群	古墳	古墳		木棺直葬主体部・壺棺墓 炭窯		土師器 鉄器		

大島遺跡 第3次	集落	弥生・古墳	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡 土器棺墓	弥生土器 須恵器・土師器	
興戸宮ノ前 遺跡第3次	集落	中世	木樋・井戸・溝・土坑	木製品・青磁・瓦器 古瀬戸・青磁	

## 京都府遺跡調査概報 第87冊

平成11年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)